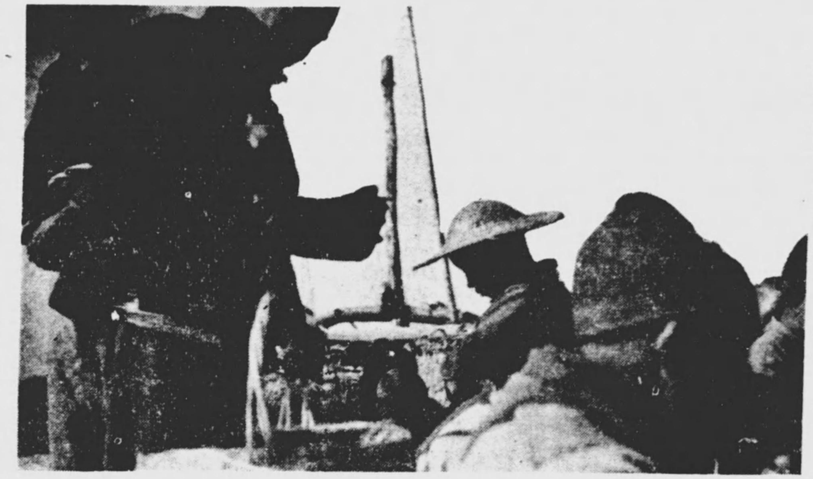
た吸殻から思ひつくなんて全く想像だもしてゐない所である。

又四川上流の合江の村里では、マッチの軸木七十本を分けて七束に作り、硫黄のついた側面を同じく七枚に挟み切り、之が村の細民に賣られてゐるといふつましい露店商ひ振りも見られる。とても想像もつかぬ細かい商ひ振りではないか。かう云つたところの細民は泥棒市から片足の古い支那靴を、格安に値切り、又他の店から、更にもつと安いのを只同様の値で買ひ取つて來る。片かたで合はなくとも、襤褸切れなど突込んで歩行に脫げないだけの用意をする。いくら乞食をするほどでも、跣足になつて路面を蹈む習慣のない支那では、ズボンと足丈は必ず露出しない様に心掛けてゐる。どんなに暑い夏の炎天であらうと、その邊の風俗は實に堅いものである。

## 四十二、教育無用の細民心理

支那細民の心理狀態では、職業による貴賤の別といふものが考へられてゐない。自ら營々として稼ぐ者は、その道の王者であるとそれぞれ任じてゐる。それ故常に心は光風霽月、人にあたまを下げぬだけのゆとりを持つてゐる。如何にして、その自分の職業を持續し、如何にしてその仕事の範圍内において、最も信用のあるお株を占めんか、と云ふ點になごやかに集中されてゐる。されば豆腐屋は親子代々豆腐屋を營み、染坊は代々染坊、料理番は幾代となく料理番といふその家業をついで行く。船頭



はかりの目きびしく教はる貧家の子

は船頭、瓦匠は瓦匠、と云つた風でその家業を以て一つの運命づけられた仕事として考へ、その家業の範圍を脫しない事につとめてゐる。従つて主人の家に代々手代、番頭として、又ボーイとして勤續して來た者があり、又陳家、王家に八代、十代、とその料理番を世々勤續して來てゐる者もある。いくら男の子があつても、學校へやる事などは考へもせず、唯一途にその料理なら料理の途を、又その野菜、肉類などの材料の買出しに、又そのコンミッションの分前財産の蓄積、主人の味覺に合せる調味法などと云つたその仕事專門のことを訓練させる。それに心を集中させるのである。従つて料理番の息子が中學をやつたり、專門大學をやつたりすることは、支那の世相として考へられてゐない。まして主人を持たず、その日稼ぎの細かい金を收入としてゐる子供にあつては、無論通學など思ひもよらぬことである。

されば支那では、細民部落にいくら小學校を設けて見ても、入學者は殆どあるわけなく、若し、之を強制的に勸めたりしようものなら、それならば、一日三錢なり、五錢なりの日當をよこさなければ行つてやらない、など云ひ出して來る者もある。親の方でも、空疎な學問なんかさせて理窟を覺えさせるよりかその日、直ぐ稼げる家業を手傳はせた方がどんなによいかと考へてゐる。つまりすべて卑近な役に立つ體驗と、そのコツを覺えさせるやう仕向けて行くといふのが、支那細民階級の唯一の願ひであり又その教育法でもある。そこに支那の細民が、富豪階級の生活に迄向上し得られない、運命的な區劃線の存してゐるところが見られる。が又日本の今日の教育中毒に惱み抜いてゐる實狀から見て、支那細民の心掛けが多少頂門の一鍼ともなるやうな氣もしてならぬのである。尤も支那のやうな國柄では三字經や百家姓、論語孟子など寺小屋で教はつて見たところで、それは字を覺えるには爲めにもなるが、その日からめしを食べようと云ふには役に立たぬと見られてゐる。生れ落ちると阿一、阿二、阿三と數號だけつけられ、男女の如何も構はず、かやうに呼び名さ

北支家庭教師と幼年ふたり　その盛裝振りを示す



れてゐるやうな手合では、字のことなど考へるわけもなく、船頭百姓で名前さへ書けぬものが多い。文字よりも先づめしの食ひかたを心得る方が第一緊要事だと考へられてゐるのである。これが細民階級の學校、寺小屋に對する一般の氣持ちとなつてゐると云へる。

# 九、支那宗教と學藝

## 四十三、宗教氣分の大觀

支那ではその一般の人に宗教心があるとも云はれ、ないとも云はれてゐる。その一般世相があまりに現代生活に卽した方面にのみ重きを置かれ、すべてが考へられてゐる爲め見方によつては、支那に高遠なる宗教は見出されぬと云ふ見解を立てゝゐる者もある。支那の佛寺に禪僧を訪ね、之と教義を語つて見るやうなときでも、その話の範圍がいつも現代にのみ卽し、死後の精神生活の事などに觸れる者は殆んどゐない。古の孔孟の教にしても、その人間行爲の道徳、倫理の方面を說き、その行爲の善惡を主として說かんとしたものと見られる。眞の人生觀、宗教心と云ふものを考へんとするものは、むしろ、支那の大自然を背景として生れ出た老莊思想の方面に着眼し之から出發した方がよいかと思はるゝ位である。老莊の思想は、南方では、その自然の人間生活が氣樂に呑んだ氣に求められんとし福、祿、壽、の三方面に亙り、その思ふがまゝの情趣を全うせんとし、第一財產を作り、性欲にあこがれ、長壽を出來る限り求めんとするといつた卑俗な方面に專ら向ふ事となつた。之が又いつしか大衆に受けて、益々迷信的宗教風俗を盛んならしめて來たのである。と云ふのは南支那の方はその文化の進み、又物資の供給にしても豐かであり、物質生活にわりに不自由のない所からこれが人間生活の全部なる如く早合點して考へられるに至つたのによるのである。その俗間大衆が之に淫する所以もこゝに在るのである。

浙江錢塘江岸に聳ゆる六和塔

所が、北支那にあつては、比較的物資の方面に乏しく、日常生活も割りにつましくやらなければ何れの階級にしたつて立ち行かぬと云ふ大局の上からの必要に迫られてゐる。それが爲め衣食住を始め、すべての方面に、成るべく、悠久なる自然の生活を求め、大自然を採入れた悟りの道に這入らうとする一種の枯れた澁い氣持ちが、宗教風俗として現れて來るに至つた。だからその不自由な生活に堪へ、困苦缺乏を意としな

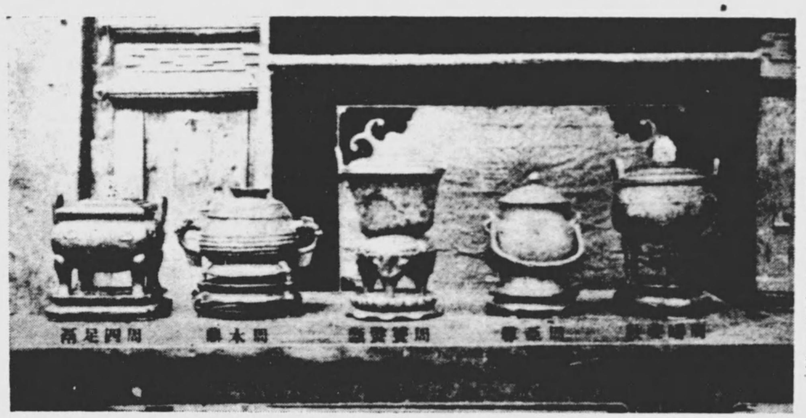
い超越的な老莊氣分は、北方の方に於て多く見出される。かくして老莊と云ふものが南北色分けを生ずるに至つた。固より同じ支那民族のことであるから、そこは南北の氣持ちの互に入り亂れてゐる所もあるにはある。が、大體の所支那宗教大觀は斯樣に概括的に二大分野に分れたものとして見られるのである。

## 四十四、孔夫子の聖廟

支那の人の抱く宗教思想は大衆本位に見て來ると、老莊氣分が勝つてゐるとは云へ、割りに物質本位に傾いてゐる。その未來を語り、宇宙の永遠に考をおいて說くなど云ふ者は少ない。それよりも現世の幸福、今日の衣食住、目下の局面打開と云つた手近の事に誰れしも考へを置いてゐる。それ故卑近なところの鬼神、怪異の如きものを捉らへ來たつて、兎や角と信ずるものが存外に多い。儒教の孔孟を信ずるものは之を淫祠と稱し、之を語り合ふことすら喜ばぬと云ふ儒教張りの建前でゐる。し

南支杭州、山寺に歸る禪僧





山東の曲阜聖廟に見る古銅器各種

かしそれとこれは別である。孔孟の道は八釜しく云ふと、天下國家の建前から、五常の道を說き、仁義禮智信の道德的倫理觀を確立し、國の政事を通じて、秩序の維持を强調し、建築の規定一つとつて考へて見ても中々八釜しい。天子、諸侯、士太夫、庶民それぞれの階級に伴ひ、その壁の色、柱の色の細かいところ迄も規定してゐる事は、禮記の文面にも詳しく述べられてゐる。かやうにしてその衣食住のことにしても、又、その典禮、儀式の上にしても、こまごまと差別觀を立て、日常の占ひを立てることにしても、天子諸侯は龜甲、殊に蔡の國の龜甲を用ふべきこととせられ士太夫以下は獸骨を、北方では鷄骨を用ふること等となつてゐたらしい。かやうに日常の用品、調度に至る迄のものが八釜しい規則できめられてゐた。その身分に非る者が、亀甲でも用ひたとなると、世論を騷がせ、ひどく物議をかもしたことさへあつた。この話は、論語の中にも見えてゐる。天子諸侯を始め爲政者側ではかう云つた、秩序に關したことを八釜しく云ふ儒教の方の教を以

南京の秦淮夫子廟前の喧噪振り

てさながらバイブルとして見てゐたこともあつた。從つてその道の學者は重く用ひられ、その書物は盛んに印刷され、普及されてゐた時代もあつた。またその根本に溯つて、その文字、金石、の元始的材料についても調べさせたり、又異同考證の事に迄も及び、之を小學と稱して、專ら考證學方面に力を致させた時代もあつた。正續皇清經解などは、その經學研究書中でも最も重きをなしたものである。

支那は大聖孔夫子を出した山東魯の國を始め、各省各地に孔夫子をまつれる聖廟が建立せられ、之に見る大成殿は巍々として聳え、何れも在りし昔の儒教萬能時代の雰圍氣を思ひ浮べしめてゐる。中にも山東曲阜の聖廟は、その規模も大に輪奐の美は云はずもがな、衍聖公府を始めとし、大成至聖文宣王の墓碑を拜する孔林などと相並び、天下に一頭地を抜いた聖地として崇め奉られてゐる。その他、北平に、又南京に蘇州に、卽墨にと到る處この孔子廟を見ない所はない位であ



る。しかも何れも神々しい大成殿を有し、之に夫子の尊像又は神位を安置し、儒教の尊嚴味を湛へてゐる。ところが時移り人心の變るに從つて、中には大成殿の屋上には雜草、宿り木などの生へ、軒は傾き、門內草蓬々、甚だしきは狐狸の巢となつてゐるやうな所も尠くない。獨り山東の聖廟と、北平のそれとはよく掃除も行き屆き、千古の尊嚴味を今だに漲はしめ、後の學者、夫子の道に心をいたす者の敬虔措く能はざるものとなつてゐる。けれ共、地元界隈の住民達は、別に之に參詣しようとするでもなく、四時門は固く鎖ざされ、市民大衆は丸つきり沒交涉でゐるやうに眺められてならぬ。惟ふに昔しの爲政者、官吏、學者の方面に、その孔子の道によつて自ら立ち、國家、社會を秩序立てやうとした考へから、之に多大の關心を持つて居つたのであるが、廟前の住民里人たちにとつては何等の御利益がこの大成殿から湧き起るわけでもなく、之が爲めに腹を膨らませて貰へるわけでもなく、全然われとは無關係に存在するものだとして、冷たく見られてゐるのである。之が民國最近の思潮自覺心に照らして一段と露骨に現はれて來たやうである。今日一九三三年の、時の人たちの心持は、果たしてどう觀じてゐることであらう。

支那現代各人の有する宗教心は、迷信の方面が主體となり之を除けばその外の方面はわりに無關心でゐる。數年前のこと、政府筋の意志を體して、若い青年新人たちが迷信を禁じ、偶像を破壞し、時

代遲れと見らるゝ宗教風俗は之を根絶してしまへよなどと叫び出し、或る地方では軍隊の力まで籍りて寺院の木像、銅像、鍍金佛などを廟内から持ち出し、破壊すると云つたほどの亂暴狼藉をやつた。その騒ぎに、寺僧達との間に葛藤が起り、血の雨を降らすに至つた事さへある。當時、江蘇、蘄縣あたりに最も恐ろしい慘劇を演じ珍らしい不祥事をかもしたのであつた。しかしいくら政府が尻押しして も元來迷信に本づいてゐる事とて、その偶像のことと云ひ、又宗教風俗と云ひ、法律の力などでは、つひに之を彈壓する事が出來なかつたのであつた。かくの如くして、大衆側の舊來の習慣が拔くべからざる力のあるものとして認められるゝこととなつたのである。

## 四十五、佛教藝術と禪僧

支那は各地に漢魏以來、佛寺の築えに築えた偉を殘こし、今日もその歷史的遺跡の窺はれる所は、南北諸地方に隨所に見出される。從つて支那古代藝術と云はれるものの中でも大部分は堂塔伽藍、佛像、佛具、佛畫などといつた佛教藝術に關した方面のもので占められてゐる位

河南洛陽、龍門に輝く石佛、山西大同、天龍寺のそれと對比せらる



に盛んなものであつた。最近には北方錦州の奥義縣及薊縣に遼時代の木造建築の佛寺の發見せられたものがあり、九百幾十年の古代を物語る遺跡として珍なるものとせられてゐる。又山西省には大同に天龍寺に、又河南には洛陽の龍門にと夫々世界的の名高い石窟石佛の數多殘つてゐるものがある。近來奸商の手で佛體の首がもぎ取られ、日本に、米に、英に、佛に、獨にと、首體所を異にして運び出され、その佛教の象徴は、斷片的に勿體なくも曝されてゐる形となつた。しかしその佛教の教義、又その教理の研究、學問に關する方面のことは、支那よりも日本の方で多くなされるに至つた。

佛教藝術の最も優秀なもので而かもその初期の力強い所を示してゐるものは、北魏時代のものである。次いで隋唐の時代には、益々その圓熟期に達した。前者は山西省に、後者は洛陽に、長安にと散點し、宋元、以後のものは、或は南に、又北にと隨所に求められてゐるのである。これ等藝術方面の名殘りの存する反面にその教義の氣分が精神方面に這入り、その悠久なる大陸的雰圍氣の中で溶け合ひ、幽玄崇高な芬香を以て、渾然と漾ふてゐるところがある。これは何と云つても矢張り支那各地に見る佛寺の間に認められる。佛教教理の研究に關しては大して支那寺に求め得るところはないとしても、その間の血液に、又その大陸氣分の中に、柔かく又大きく流れ込んでゐる所のものと云ふは寺僧である。殊に禪僧の間に豐かに之が窺はれるのであつて最も多く又一等榮えてもゐる。その本山、末寺は今尙南支、長江方面にどつさり見出されてゐる。禪寺は、日本長崎

に見るそれらとかなり似た所があり、布袋が祀られてゐるが、その規模は更にもつと大きく、その境内は割によく掃き清められ、參詣者も相當に多い。江西省廬山南麓に行つて見ると、棲賢寺、萬杉寺慈航寺、秀峰寺、歸宗寺、海會寺などと云つた禪寺がある。廬山東南の五老峰、双劒峰、李白の瀑布などを背景に有してゐる丈にこれ等の禪寺は、安徽の九華山、湖南の衡山、四川の峩眉、滿洲の千山長白山あたりと共に天下に得がたい名勝禪寺と稱せられてゐる。これ等の寺々の僧侶は、寺に所屬した山や田地を有し、生活の保證を得てゐる所があるからでもあらう。その風格がよろしい。又體面を維持することを缺かない。中には三百人、五百人と云ふ僧徒を有してゐるところもある。天童育王の如き、普陀山金山寺の如きは、その中でも雄なるものである。これ等の山寺に見る僧侶の中には、德の高い名僧もあり、又隱れた高僧大禪師と云はれるものもあつて、その親しく

江西省廬山南麓、棲賢禪寺の山僧　その脫俗味を見るべし



風格に接する時は、一種云ふべからざる幽玄味を感じ、或はそのどことなく古岩の如く、大木の如く、又人間の如く、言語で以て表現し得られない靈感を得るものがある。その溫容人に迫り、柔和にして人間味の豐かな名僧であると、その次第に親しみを覺ゆるの時、その胸中にでも溶け入らましき感じのして來るやうなものもある。寺内に逗留して、共に精進料理を味ひ、佛前に參禪し、讀經奏樂の裡に打ち交つてゐると、大陸佛教の奥床しさにどことなく心の打たれる所がある。その念經の取り行はれる時の大雄寶殿内部の光景と云つたら奏樂頗る賑かであつて鳴り物の調子は殊に高い。滿座衆僧の經を讀む抑揚頓挫の餘韻は日本のそれと大體似寄つてゐる。

支那寺院は境内に墓地を有してゐないのを普通としてゐる。又寺自ら葬式のことに關係せず、日本のそれと樣子の違ふ所が頗る多い。北支那の寺僧は、乞食的の姿をした成り下つた者が多く、觀光客などの來り訪ねる者でもあれば、早速その姿を見るなり、當て込み、練り物の贋の珠數とか獨鈷とか、三鈷とか色々の佛具を取出し、堂内の暗き所へ客を誘ひ込み聲を低め、恩に着せた云ひ方などして之を賣りつけようとするなど、その佛らしくないのは、かう云つた打ち壞しを敢へてなすその實例を見せつけられることちて僧徒の評判の芳しくないのが、支那の佛教、地に墜が輿つて力ある事と見られてゐる。

杭州西湖飛來峰ににこやく布袋の彫刻

## 四十六、支那に見る俗間信仰

支那で古來最も人氣を集めてゐる宗教方面の中心となるものは前にも述べた福祿壽といふ人間生活に直接關係の深い御利益のある寺々である。その寺々といふを擧ぐれば、關帝廟、城隍廟、東嶽廟、娘娘廟、藥王廟、龍王廟、青帝廟、土地廟、老君廟、文昌廟など數限りもなく出て來る。別けても財神廟の如きは、金造りの神として、參詣者は引つ切りなく、又文昌帝を祀れる廟宇の如きは、古から試驗に及第をさせて呉れる神樣の祀られてゐることとて、學徒、受驗生の之に祈願をかける者が多い。又娘娘廟は病氣平癒に祈願の神樣としてその全快祝ひに之に參詣する者がまた尠くない。毎年、四月の八の日の春の大祭には、幾万と云ふ善男善女が之に參詣し、賽錢を投げ香華を手向けるものが多い。

道教方面の本山としては、蘇州に玄妙觀があり、北平に白雲觀があり、遼西に醫巫閭山があると云つた風に、各地にその信仰の中心となれる者があり、村々には清道觀があり、道士が之にお籠りをしてゐる。而して參詣者の爲めに大吉、吉、凶、大凶などの黃紙に印刷された神符を頂かせて呉れてゐるせいか思ひ切つた喜捨をする者も多く、ために賽錢成金を生じてゐると云はれてゐる。

支那は、かう云つた、俗間大衆の迷信がかつた宗教思想が、相當根强く行はれてゐる處であるからして、いざ祭りとなると、何れの地方も大變な人出で、その沿道界隈は參詣者で賑ひ、かなり地方民のふところを潤はせる。竹を心にした長い線香、紅の蠟燭、銀紙で造つた馬蹄銀形のユワンバオ（元寶）爆竹の束などいふ供へ物の、その賣れ高の數萬金、數十萬金に上るものがある。南支の田舍ではその買物の目的で集り來たつた客は宿錢を取らないで泊めてゐる大仕掛けの店もあり、一人で數十元から數百元も買ひ求め、大の男を使つて神前で盛に焚かせてゐる者もある。境内の銀紙を燒く裝置は煉瓦造りの大規模のもので、その投げ込む入口から覗いて見ると、さながら熔礦爐の如く燃えてゐて

火焰は猛々とうねり上り、空高き煙突の上までもその赤い舌がペロ〳〵出沒してゐることもある。かう云つた物凄まじい宗教風俗の現れは、我が臺灣北港のマン（媽祖）の廟を見たことのある者には容易にその光景の強烈さが察せられることであらう。大祭後の竈の中に見出される灰燼には、相當な錫の塊りが得られると云はれてゐる。こは神の前に投げ込まれた馬糞紙様の黄紙に、銀色をなす錫箔の貼られたものが、あとに鑛物として燒け殘つたものだと云はれてゐる。一體何が故にこれ程までも、神様の爲めに多額の供へ物をなし、惜し氣もなく散財をするのであるか。この事については、誰れしも想像される如く、田舍の豪農達に念願があるためである。その年の秋の收穫をたゞたゞ祈つてゐるによる。その供へ物の額を多くかけた丈、それ丈、實のりを多くしてもらへるものだと云ふ迷信のあるに基いてゐるのである。つまり神様の氣持を人間並みに取り扱ひ、いくら天にましますとも我れらの神にしろ、與へる所が尠なければ、その因果應報は薄いに極つてゐると、かやうに信じてゐるが爲めの奮發振りに過ぎないのである。

どうせ目に一丁字のない、罪なき農夫、かみさん達の信仰からする事であるから、之を科學の頭の出來てゐるものから

門前市をなす南支田舍の城隍廟



見れば、迚も愚にもつかぬ精神生活だと評される。併し、いくら他から何と云はうと、太古ながらの世襲的の習慣古俗であり、又地方的にはかなり深く根を下してゐる迷信的行爲でもある。既に人も疑はず、自分も信じ切つてゐる全くこびり付いた遣り方であつて、いくら新しい昨今の洋行歸りであらうと、之を冷笑したりする譯には行かない。又自分のことと思へば實際笑つてゐられぬことがある。例へば、幾萬幾億の蝗の大群が黑雲の如く大空に現れ、忽ちにして我が村落田園に襲來すると云つた恐ろしい悲劇を體驗してゐる者もあるのである。さう云ふ村民たちは、この知らせが、十里二十里と先の方から飛來すると、いくら何でも呑ん氣にしてゐられぬ。豫て用意してある例の八尺大の大旗を竿に結びつけ、兩手で之を振り振り、虛空に半圓形を畫きとほすと、盛んな鉦、銅羅、太鼓の音に合せてその蝗軍退治の大活劇を演じなければならぬのである。この騷ぎは南支に又北支にとよく田舍で見る所である。かう云つた慘劇に對する防衞を行ふ年中行事は、迷信どころの騷ぎでなく眞劍に實際の利害に直面して立たなくてはならぬ行事なのである。だから寄り〳〵その地方の武廟、城隍廟、媽祖廟、土地廟あたりへは誰れしも必ず參つて祈願をかける。人間と云ふものは、平素ことのないときは强い事を云つてゐても、一度ひどく我が田畑の野菜、穀物、柳の芽、庭木、靑い物が悉く、殘らず蝗の爲めに喰ひ盡されて見ると、始めて其處に神様にでも賴みたいと云ふ氣持になつて來る。こゝである。この邊に爭はれない神詣でをしたり、萬金の供へ物をしたりする心持にさせる力がある。そ

れが大旗振りの結果ともなり、神符護符を買ひ求めさせることになる。それで以て心の平安を祈らんとする心境にもなつて來るのである。

## 四十七、支那に見る回回教徒

支那の俗間宗教と、その信仰風俗の一斑は、上に紹介した如くであるが、更にアラビア方面から遙々東漸し、甘肅省を中心に、或は東に、東北に、東南にと全國的に傳播して來た別個の宗教、回回教がある。これは唐の時代既にウイーグル（回紇）の名で知られ、支那の俗間にホイホイ（回回）と稱せられ、マホメットを教祖としてゐるかなり有力な宗教團體となつてゐるのである。その統計は明かに！ないが全支に少くとも約三千萬を下らないであらうと云はれてゐる。そのモハメダン宗徒の信仰思想は頗る固く、毎日羊皮のコーラン（經典）を原文の儘讀み上げ、その教義を說教するアホン（教長）を中心として、各省各地の要所々々にはその信徒が集つて祈りを捧げてゐる。その寺は一般に淸眞寺と稱せられ、之に大小規模の相違はあるが、偶像を有せざる殿堂、禮拜堂、齋浴場を具へ、又神聖にして犯すべからざる井戸が設けられ、又之を汲み取る神聖なる神男の使徒が定められてゐる。その人の手で神聖なる湯が供給せられ、アラビア語の念佛樣の言葉を默唱しながら、極めて敬虔な態度で信者自らそれぞれその肉體を洗ひ淸めるのである。



天津淸眞寺に見る禮拜堂內部の淸趣　回教の面目を物語る

回回教徒は、その職業として風呂屋、ガラス商、翡翠商、或は羊肉の料理店などを營んでゐるものが多く、毎日五回、時を定めて最寄りの淸眞寺に詣で、その禮拜に參加するの外、その齋浴場に至り夫々齋湯を頂き受けて大洗、小洗の、勤めに從事する。大洗とは信者が電話室程度の小室に數多仕切られた觀音開きの戸のある浴室に入り此に脫衣して、頭から湯を被り全身をよく洗ひ齋き淸める。殊に下の方は念入りに淸める。女子の方には又神女がゐて、これと同じ淸め方を嚴守してやつてゐるが絕對に双方互に異性者の這入ることを禁じてゐる。小洗とは、その流し場に沿ふて設けられた長椅子に倚り、鼻の穴、耳の穴、全身九個の局所を、殘らず洗ひ淸むるのを原則とするが、その信仰に燃えた信者たちは、例の默唱裏に居並んだまゝの形で、何回となくその局部の淨化につとめてゐる。尙その指の股、足指の間などの細かいところは特に念入りに淨化につとめ可なりの時間をかけてゐる。齋

浴が濟めば、禮拜堂の前に一同起立し、伏し目になつて左手を左の胸部に靜かに當て、アラビア語の題目樣の唱へ事を嚴かに高唱し、終つて一同簾を排して入堂する。一定の間隔を置き、物靜かに敎長の念ずる言葉について唱和し、三拜九跪する。そしてやがて敎長はコーラン原文の一節を朗讀し、次で支那語で以て信者の爲めに解り易く說敎をする。信仰の熱烈なる信徒は、朝に夕に、之に時間毎に馳せ參するが、若し止むなく間に合はない時には、之を溜めて一度に取行ふことになつてゐる。信徒の子弟は、普通の小學校、寺小屋に這入らないで、同じ回回の學堂に收容し、宗敎敎育を施してゐる處もある。上海城內の達敎長はイスラム（伊斯蘭）學校を創設し、こゝに回々敎敎育の實際に當つてゐるのを見る。又北平、ニウチエー（牛街）の東大寺、西大寺は、淸朝宮廷の勅願寺であつた關係上、五彩美しき建築になつて居り、その附屬回々學堂には、數百人の小回々が今日收容されてゐる。

回々敎徒は、その信者共通の印として、一種特別な回敎帽子を被り、その禮拜堂に出入するときの外、商賣を營む者は、その軒の入口に、又軒端高く、空に、その帽子形した眞鍮の看板を揭げてゐる。その眞鍮はよく磨かれ、鮮かに輝き、行人の眼を引くものがある。市中、淸眞寺、料理店などの入口で行人がよく、みゝずの這つた如きアラビア文字の看板を見ることのあるはこの回々たることを物語るものである。廣東、懷聖寺、山門の看板には、特にその堂々たるものが見られる。回々の料理店は回々菜館又は西域菜館と稱せられ、豚肉を一切用ひず、又蟹の如き橫に步く動物を出さず、又鱗なき魚類を食べさせない。その羊肉を主とする特殊の料理は、食道樂で天下に鳴つてゐる支那としては異彩を放つものである。北平、東安市場內に、又は菜市口の南部方面には到るところ、有名なこの回々料理の風味が味はれ、その値が比較的安いので評判をとつてゐる。

回々敎徒は總體に團結心に富み、他宗の富豪から結婚を申し込まれても、眞つ平ら御免を蒙ると云つた態度をとり、自ら持すること甚だ高い。新聞紙上などで、どうかすると、その豚料理を好まない所から、冗談半分の、漫談記事でも揭げようものなら大變なことになり。忽ち新聞社を襲ひ、ガラスを打ち破り、印刷機械を破壞し、ひどく取つちめなければ止まない、と云つた徹底した氣分を有してゐる。現に各地に幾度かかう云つた慘事を演じたこともある。その團結力の粘り强く、その同じ宗徒相互の連絡をとり、擁護に當たる所は侮り難いものがある。山東泰山の幡夫の仕事が回々のみを以て固められ、他宗のものゝ入るを拒んでゐる如きその一例である。回敎徒の多き北平の街は、その戶數にしても一萬有餘を下らないだらうと云はれてゐる。市中南部、回敎徒部落の空地が地價の安いところから、或る富豪の之を買ひ求めそこへ或る日大豚を菰包みにして運び込んだことがあつた。何れ御馳走の爲めの考へから、やつたことであらうが、何時しか、その事がパッと噂になり、遂にその金持の人は附近の回々から袋叩きにされ、居たゝまれなくなつて、逃げ出したと云ふ事實もある。日本人で支那に滯在する多くの在留民のうちに久留米の人、川村狂堂翁は、この回敎を信ずるこ

全支耶蘇宣教師の夏季大會の催された廬山クウリン（牯嶺）

と厚く、これが唯一の日本人として、北平、西單牌樓の清眞寺の一室に世塵を外にその道に努めて居られ、自分は之を訪ねたことがある。翁の刊行になる回教雜誌は今尙頗る貴重視せられてゐる。

## 四十八、耶蘇宣教師

現代支那に行はれてゐる大衆向きの宗教、又過去に榮えてゐた爲政者向きの宗教などについては、大體以上に述べたところで想像されると思ふ。ところがこの外に尙歐米から近代人道主義の建前を看板に、キリスト教の浸潤し、在來の宗教とは全く行き方を異にし、積極的に勇敢に街頭に立ち、又會堂を作り、直接その貧民大衆を集め、之に聖書の講義、繪本、漢譯新譯全書の給與をなし、その他、貧兒を入浴せしめたり、散髮をしてやつたり、藥を與へたり、又新しい青衣を惠んだりなど可なり慈善事業的の事にまでも手を出し、着々效を奏して來たものがある。殊に學校を建設し、病院を建て、惱める地方細民を隨處に救濟する。そしてそれに莫大の費用と時間と勞力をかけ、日に、月に、年にと不撓不屈の努力をつゞけ、白人の人道主義を力說高調して止まないのである。その爲めひとり貧兒細民許りでなく立派な有識階級、中流以上の紳士淑女にして宣教師と交りを結び　共に宗教活動の手助けをなし牧師となり、それを手蔓に歐米留學、又歐米の政客と手を結ぶなどいふその進展振りの目覺しいところを見せて來たものもある。かうなつて來ると、從來の儒教、道教、佛教、回々教などは遠く及ぶ所でないことになる。そして着々各地に、その要所々々を中心として、YMCAの會館が建設される。地方的にキリスト教信者と、歐米歸朝者との連絡が圖られ、延いては語學關係、宗教關係、政治關係と云ふ三角關係から新しき職業までたやすく得られると云つた結果となり、斷然支那社會上に生き生きした働き振りを示すことになつた。こゝに於てか、近代支那の世相は、この基督教のために著しく識者の注意を喚起するに至つたのである。併し最近の傾向はどちらかといふと民族自決にあり、三民主義の强調にあり支那の自立、自主にある。この自覺の熱の高まつて來た爲めに、新人、政客などの間から議論が出て來た。曰く今までのキリスト教は、名を人道主義に藉り、宗教布教の美名に隱れて、文化侵略を逞うするものである、云々。といつた見方をする者がだん〳〵多くなり、最近では遂に各省各地の教會堂、學校、病院なども、その影響を受けて振はないものが多くなり、又宣教師の數も幾千人となく減

じ、今日の在支那基督教活躍なるものはガタ落ちの觀を呈するに至つた。しかし宣教師の中には今尚奥地に稀には、ひとりで蹈み止まり、道の爲に身を捧げてゐる者も見られる。

支那に見る宗教の類別と、その動きはかやうである。その形は日本で想像する如きものとは異り、かなり多種多様を極め、その動きの波も又かなり大きい。その種々雑多なる宗教思想と、宗教風俗で以て支那の大衆は色づけられて來たが、併し、要するに今では大衆も識者も、何れも、どんな御馳走にも、飽いて來た形である。この歸着する所は、支那の大自然、大社會を背景とする歴史上の體驗からして、結局の所は、人生は大宇宙の中に認められるゝ天地の配在から脱する事は出來ない。榮枯盛衰のあとから證明せられて來る如く、つまる所は運命觀である。大自然の落ちつく處へ落ちつく。結局は天命に頼よるの外なし、と云ふ悟りの境涯に到達する。これが支那に於ける最後の宗教思想として四億萬の大衆の胸に深く深く刻みつけられたものであると考へられる。言葉を換へて見ると、メーフアーツ（沒法子）（仕方がない）の一語に歸着する。毎日の口過ぎに苦しむ細民も、酒池肉林に浸つてゐる偉い富豪も又時めく大官連中も、結局のところはこの運命の大原則に弄ばれてゐると云ふ所に來る。誰れ人も皆この點に、諦めの目星をつけてゐる。けれ共、それは最後の視線をそれに放つてゐると云ふに過ぎないので、現實の生活には、何處迄も石橋叩いて渡る式の堅實振り、どこまでも堅忍不拔努力に努力を根よくつんで、その運命づけられた天地の中で最大最高の發達と名譽を期待し、それ〳〵、衣食住、福祿壽の、現世慾を滿足させようとつとめてゐるのである。

## 四十九、支那の學術文藝

支那は學藝の點で、上古史の時代に、既に驚くべき發達をとげてゐる。あのエジプトのピラミッドにも比ぶべき萬里の長城の築城法にしても、その背景に如何に土木築城の知識の進んでゐたかゞ察せられる。その上部に見る女墻、方孔にしても、その内側より見たる縁の取り方が斜め四十五度に削られ、弩弓を放つ矢の方向を、右に左にと出來得る限り廣く方向の取れるやう、細やかな注意が拂はれてゐるのは、可なり專門的の素養のあつたことが考へられる。之を今日の土木築城の經費の點から見ても、之をあの西の方、甘肅省の嘉峪關から東、渤海の山海關に至る距離は、日本里數の八百里（鹿兒島より青森に至る）その蜿蜒長蛇の如き城壁を完成せ

築城法で世界に先鞭をつけた八百餘里の長城大觀

んとするには、少くとも時價四千億元を要することになると專門家は計算してゐる。古の春秋戰國、燕の時代より秦の始皇に至る間、又始皇より後二千有餘年の間に改築修理せられ又增築せられてゐるその間の學術とその應用力には、多大の基礎知識が必要であつたものだと云へる。

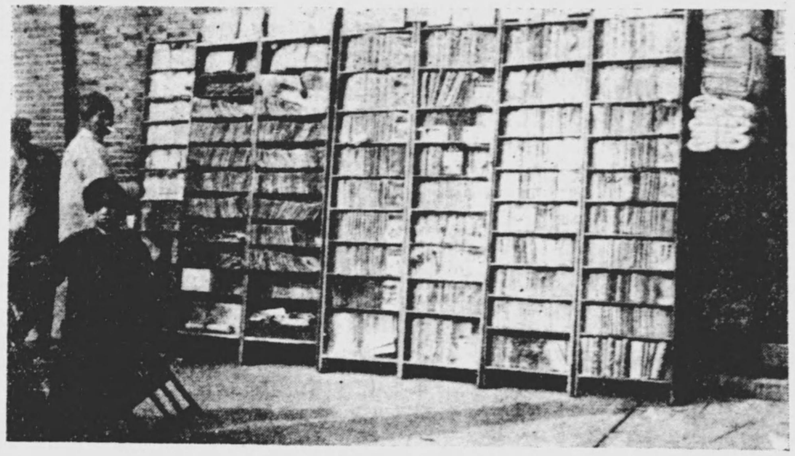
その外歷史上に見る火藥の如き、又戰車（衝車、臨車）の如き、或は後世の巧みな民船の構造の如き交通機關の支那式考案になれるものには、幾多の近代科學に一致してゐる所があり、之を既に古代に實現してゐる。また周代の指南車に見る磁石の應用の如き、或は活字の發明のごとき、その後世の人智を以てしても容易に考へつかないほどの物をちやんと發明してゐるのである。又上代工藝學上に於ける鑄金術にありては、銅、水銀、錫などの高等數學を要するほどの合金率による古銅器の製作又その藝術的曲線美の案出、又その表面に圖案せられた雷紋、夔龍紋、饕餮紋の如き複雜多樣なる意匠は世界何れの古代文明にも見出されないくらゐ珍とされてゐるものがある。これ等の工藝上の知識は、更に又金環に、又古鏡に、或は刀劍に、馬具の飾りにとあらゆる方面の製作物の上に見出され、その發達のあとを證明する事が出來るのである。

古代の學術はこれ等土木工藝の外、建築に、織物に、或は周禮、儀禮、禮記などに見る如き、文物制度の組織の上に、多大の學術的考察が試みられる。又れたものが甚だ多く、その精神文化の方面に於ても、易學の上に、又書經に見る如き政治方面の上に



書經、春秋左氏傳、淮南子などに見る天文曆日の知識の如き、その可なり高級の頭腦を働かさなければ解らない方面の學問上のこと迄が、既に古代人によつて考究されてゐた。また先秦から兩漢三國六朝時代にかけての藝文各方面に亙つての研究が、驚くべく大成されてゐる。漢書、藝文志に見えてゐる文化の精粹は、全くその片鱗に過ぎない。又漢の楊雄の方言には海岱山東を始め各地方の水村山廓に於ける同一語の訛り言葉が調査されてゐる。交通の不便であつた上代にあつて、言語の分布などを知ることは容易ならぬ大事業であつて、英國ジャイルスの英華大辭典に見る方言音を以てしても、未だ容易に知り得ない方面が、既に二千年の昔調査され明記されてゐるのである。その他一般博物、地質礦物から動植物、人體解剖、本草、藥物の一般に亙る學問的分類と、その檢討が可なり行屆いて調べられてゐるのである。

支那は文字の國、その金石にあらはれた古代文字の前に殷の龜甲文字があり、後に篆文がある。後漢の時代に許愼が說文解字を著し、篆文九千五百九十三字を統一ある組織の下に排置し、部首を立て五百四十部に夫々分類し、且つその音符と象形的意味の印との兩要素を見つけ、又全體に亙る造字上の形式として、象形、會意、指事、諧聲、轉注、假借、の六義を立て、その古代文字の發生、生ひ立ちを說明した。その要素と項目分類の價値は、今以て千金の値がある。又支那古來の學術資料としては、四書（大學、中庸、論語、孟子）五經（易經、書經、詩經、春秋、禮記）に老子、莊子、荀子、



汗牛充棟も啻ならぬ文獻國を物語る露店の本屋

韓非子などの子類は云ふに及ばず、歷代二十四史の如き、或は叢書に太平御覽の如き、淵函類鑑の如き、皇清經解の如き、幾多の浩瀚なる編纂物が大成せられてゐるが、別けても清朝、乾隆帝の四庫全書は、世界一とも云はるべき幾十萬卷の大編纂物を出現し、恐らく、支那空前の學術的偉業と稱へる事が出來る。この外に唐の玄奘三藏、義淨三藏を始めその佛典飜譯に力を致したものは歷代に數多あり、このうちでも、所謂大藏經の佛敎研究資料は、これ又支那學術界に多大の貢獻をなしてゐるものと云へるのである。

## 五十、支那の文獻

支那の學藝方面は、殊に精神的方面に於て多大の發達を遂げ、その政治思想の上に、又宗敎倫理の上に、著しき結晶物を見せてゐるが、又文學藝術方面に、或は金石の上に、最も支那らしい幽玄な趣と匂ひをあらはしてゐる。詩賦に、文



章におのづから支那文學獨特の天地を開き、李白、白樂天、の如き、又古くは屈原宋玉の如き文豪を出し、その文學的內容の餘りに複雜であり、又餘りに深遠であるが爲め、容易に歐米人あたりの了解の得られないほどのものも澤山ある。先秦文學の主なるもので論語孟子の如く、その旣に歐文に飜譯されてゐるものも多々あるが、しかし文選や水滸傳の如き、また元曲雜劇の如き、最も文學の粹を抜いたものはどうかと思はれるにこれ亦、旣に手がつけられてゐると聞く。これらは、その辭句文字の意味迄をも含めて、白人に理解せしめその風韻を嚙みしめさせることは恐らく容易でない。幸にしてこれ等は日本古今の文藝の上に採入れられ、多大の貢獻をなしてゐることはこゝに論ずる迄もないことである。

支那では、かゝる文學物の方面には汗牛充棟も啻ならぬ程、大著述や大編纂物が殘されてゐるが、さて建築であるとか、その他工藝に關する技術上の方法を記載した書物となると、極めてその文獻になつてゐるものが少い。之はその實際上の眞を穿つその道にある工匠、或は瓦匠、又筆匠、墨匠などにして自らその微に入り細に入つて筆をとり、圖解し、著述に遺す迄の事を遂行し得る者が尠い爲めであらう。造營式目、墨法集要の如き建築や製墨の事に關し、極めて簡單な大體を示したものは多少ないでもないが、總體から云つて、かう云つた技術方面に關する古書は甚だ寥々たるものゝやうである。

支那は又隨筆の國、これと云ふ目的方針なしに、あつたこと、聞いた儘のこと、そは隨感隨想の筆に成つたものをまとめ一書としたものは頗る多く、組織的の內容を持つてゐないところが却つてそれに貴重資料の片鱗を見せてゐる所以ともなるわけで、重く見られてゐる。こは一つにはその日常生活の影響や、或は環境から來た習慣が之をして然らしめた物でもあらう。しかし時にはその云はんと欲する所をわざと言外に餘韻として殘し、一を述べて十を覺らしむると云つた隨筆も尠くない。或は當局者を憚り、皮肉を並べてゐるものもある。又後世に書き殘して知己を千載に待つと云つたものも隨分ある。又支那文藝、歷史の上には、韓退之が廣東の田舍潮州に謫せられ、或は黃山谷が四川の奥の涪州に流される等、何れもその流謫の身で、配所の月を眺めてゐた爲め、却つて大いに文を練り、地誌を調べるの機を得、又大いに熱烈な文章を書き遺すと云つた風に行つてゐるものもある。都大路に唯安逸を貪つてゐる文豪あたりの容易に企て及ばない傑作をこゝに見るのである。同時に、又その人の筆によつて、普通なら世間からも、又歷史の上からも、取り殘されたさみしい山間僻地が、却つてよく紹介せられ、又美化せられ後世有名になるの機會を得たものも少なくないのである。

こゝに示したものは、いづれも筆によつて記載せられた文獻學方面の資料について述べたのである。ところが、支那は又半面に非文字國、文字のない方面のことを調べると、却つて面白い意外なことをそこに見出すことがある。南支で、堂々たる禪寺の住職を勤め、見たところのかつぽくは美目長髯、



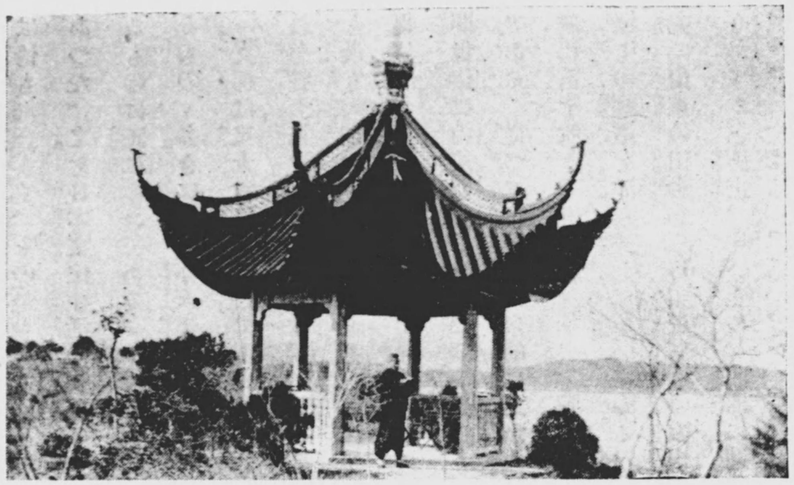
誠に頭の下る程の高僧と云つてもよいのが、どうしたことか、堂內で、紙を前に、筆談などして見ると、碌すつぽ自分の名さへも書けず、寺男に書かせ、その字が又とてもひどい誤字で、字になつてゐない。その正誤の見分けすらも附かない位の驚き入つた山僧である。こは廬山南麓、觀音橋の松下、慈航寺の住職であつて、今も忘れられぬが、其處の住職との面接した時の實話なのである。以下推して知るべしである。城內支那街の商家の番頭、又主人などにして、その賣つた品物の名は口で云へても、字はどう書くと聞いて見ると、薩張りちんぷんかんぷん、筆と紙を手にして近所界隈を走り廻り、遂に要領を得ず、しかも平氣で澄まし、わかりませんでした、と云つてゐる手合もゐる。金の方には細かいけれ共、字の事になつたらこの通り薩張り解らない。一方には、筆がやかましく、懸腕直筆で揮毫するとか、後世に迄保存をして置き度いとか、名筆を揮ふ神童がゐるとか色々云ふが、他方ではこのざまである。恐らく支那の社會は、一局部に學者、新聞記者、文字あるインテリがゐるとしても十中八九までは明き盲目の連中が多いと見てよいであらう。ステーションに掲げられてゐる文字の讀めるものは少なく、自分の名も書けない乘客が火車の中にどんなにゐることか判らぬ。又輪船の中だつて同じわけである。それ故、支那の旅行者大衆あたりは、學校に行つた事のない手合が多いと見られる。滿洲の學齡兒童の就學率が百分の三十であると云はるゝのはまだ餘程よい方であると云へるであらう。

支那の田舍には、その文字こそ知らね、その筏の上で流す筏を讀み込んだ竹詞のへなぶり、又船頭たちの艪に合せて歌ふ舟歌、又牧童が大陸の野を渡つて來るとき歌ふ、月夜の歌、家鴨飼ひが野を渡り、水を越え、一本の鞭を使ひ使ひ、鼻歌交りに歌つてゐるあの民謠、これらは何等の文字に拘泥した氣持もなく、さながら都々逸、安木節、八木節などをやらかしながら呑ん氣さうに歩いてゐる日本のそれ等と、先づ〳〵似たものであると見られる。かう云つた文字なき人の口に、却つて、唐宋八家文や、剪燈新話、紅樓夢、還魂記、西廂記あたりに見るものよりか味ひのもつと豊かにして奥ゆかしいものがあると云へる。この外傳説に、神話に、お伽噺に、村里に口傳ひに傳へられてゐる口碑あたりに、文獻資料から洩れてゐて而かもそれを超越した珍らしいものが見出されると考へる。これ等もすべて大きい意味の支那文藝の中に取り入れて取扱はるべき性質のものである。

## 五十一、支那の工藝美術

支那の工藝美術の方面では、歴史以前の時代から古銅器、鑄金術の發達を始め、象牙彫り、木彫りなどの細かい彫刻、玉器類、又染色、刺繍、織物、漆器、堆朱、鏤鈿などと云つた古美術がある。漢代に入つては波斯方面から輸入せられた玻璃の工藝各種、琉璃玉、花瓶、食器類、又その釉藥を用ひた燒物類などが高貴の人々によつて用ひられ持て囃さるゝに至つた。鍍金の馬具、化粧具などより鍍金の佛像等が、六朝時代より盛に愛用せられ、或は又先秦より漢、魏、六朝にかけては、碑碣の類などがこれ又地方地方の名流によつて、又帝王豪族によつて建立せられる風俗を見るに至り、或は又王侯貴族の營む土饅頭の墓陵には石廊、石棺、羨道、墓道等の特殊の壁畫、畫像、石の彫刻を見ると云つた風で、地上に、地下に、幾多の古代工藝を發達させてゐるものを見る。中央亞細亞のツルファン、ロプ湖畔又敦煌あたりから出土したものにその片鱗が窺はれる。これ等は西方ばかりでなく、渤海を越えて東洛浪帶方郡（今の朝鮮滿洲）に、又更に日本の推古朝、奈良朝あたりに傳來してゐるものがある。次いで支那の本場は、唐に至つて工藝美術の圓熟期に入り、太宗から玄宗皇帝、楊貴妃、安祿山の時代は、漢民族空前の恐らく又絶後のクライマックスに達した時であつた丈に、殆んど文化の各方面に亙り、十二分の進歩發達を見せるに至つた。日本の遣唐使

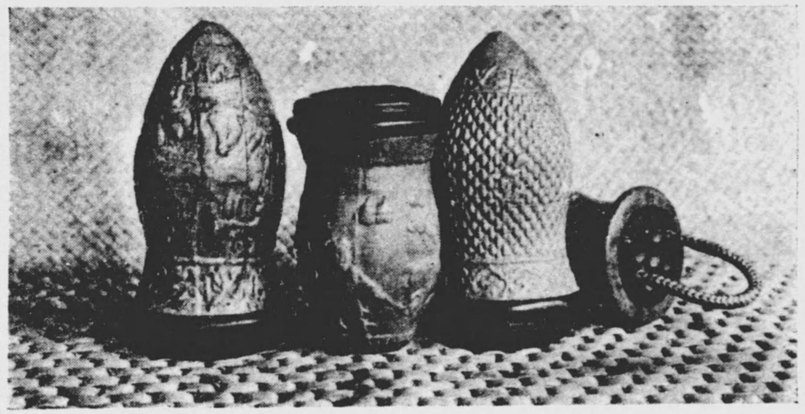




支那建築美の粋を示した無錫牛頭渚の飛亭

は恰も都合よく、その最も昇りつめてゐた唐の盛時の美術工藝を始めあらゆるものを採り入れたのであつた。之を日本文化生活の初期の文明として採入れ消化した。奈良の正倉院や、法隆寺あたりに見るものは正にこれである。又支那古美術品で歐米に夙に持つて行かれ、立派な博物館に陳列されてゐるもの〻多きはこれ亦天下周知の事である。

支那は又太古以來禮樂の道にすぐれ、之を實際政治の上に編み込み、上古擊壤の美風ありて以來、鼓を打ち笛を吹き、人心を柔げ、善政を敷き敎化のことに力を致す事は、卽ち國家統制の上から見ても最も大切な手段方法だと考へられてゐた。その爲め歷朝歷代の爲政者は、必ずこの禮樂の道に力を盡した。今日芝居の舞臺に見るターク（打鼓）、シーピ（西皮）、アールホワン（二簧）などの場面で民間世俗に持てはやされてゐる奏樂振りは何れも、人心誘導の上に最も望ましい事とせられてゐるものである。從つて又最も大衆的に之が人氣を集めてもゐる。支那城內、月夜あたりに、盲者が三人それぞれ笛を吹き、三味線、胡弓を彈きつゝ、一人の目明きの片輪を先頭に立て、靜かな人通りのない高壁下の細道を流し流して歩いてゐるなど、昔しを偲ばせる紫陌巷中のみやびやかな古俗である。こは主に山東の田舍から每年正月の頃出て來て、水村山郭を渡り渡り、流してゐる手合どもである。どうかすると街上、呼び止め、門內に迎へられ、一曲價一弗位で以て、有名な歷史物などを且つ語り且つ彈き、良家の家庭の人々を樂しませてゐるなども面白い。支那の相場で胡弓の一棹は、値二十錢位のものもあり、五十錢、一圓、ととりゝ〳〵であるが、いくら安くても胴に何れも、蛇の皮が張られてゐる。一棹二十錢の安物でも、優に三百人、五百人と樂しませる劇場で、その舞臺面も面白く奏する事の出來るとは、まことに大衆向きの安價な樂器だと云へる。文字を知らぬ場末の民衆も、之によつて優に一日の勞を慰める事が出來るのである。



北支那の文人が好む瓢々葫蘆（へうたん）

## 五十二、翰墨の味

支那の學藝方面と相並んで特筆せらるべきものは風月を談ずるを事としてゐる翰墨の道である。こは文人墨客を中心とした吟客風人等の間にうかがはれるものであつて脫俗した大陸氣分をいふのである。之が政治、外交、取引などから超越して味はれ、おのづから文人社會の共通な嗜みとなつてゐる。俗な人の知らぬ風月を談ずる高雅な風韻はこゝに一別天地をなしてゐるものと云へる。支那で文人墨客といふと功成り名遂げた人々、又始めから官

途につかないで、自ら樂しみ、書畫詩文の道に沒頭してゐるもの、篆刻、芝蘭の道にたづさはるものなど色々の人々を含んでゐるのであるが、要するに、名譽榮達の心境から超越し、長閑な境涯に自ら安居する者を指していつてゐる。されば文人といへば詩文をよくし、書畫をよくし、又學殖を有する人が多い。この三拍子揃つた者でなくては雅席に出られないとされてゐる。時には古印古泉を集め、篆刻に長ずる者があり、或は古銅器瓦塼書畫の鑑定に長ずる者があり、又硯筆、紙墨等の文房具に詳しいものもある。しかも何れもその共通な性質として、悠々自適、自ら高く止ることをせず、洒々落々、名利に恬淡にして、山月の趣を有する者が多い。之を日本で求めるならば、池大雅堂の如き、又近くは拓川加藤恒忠翁の如き、まことにその生れながらにして、その趣を體得してゐたものだと云へるのである。

支那書道の材料には、漢の木札に墨書せられた神雀年間のあたりのものが、中央アジア流沙の地方から出土したり、又日本に傳はつてゐる晉の王羲之の喪亂帖や、九月十七帖などの墨寶のあるを始めとし、六朝から隋唐にかけての筆跡は、寫經に、法帖に、拓本に、尺牘に、扇面にと種々の資料によつて見出され、宋元から明清の近代に至る各方面の書道の材料は甚だ多い。扁額に、掛軸に、又對聯にと、色々の姿で見出される。又支那の繪畫については、所謂文人畫としての女史箴の圖を始めとし、隋、唐、宋元に亙る名品、日本に傳はれるものもかなり多く、ついで仇英、

忙中閑を得て竹の聯に名句を彫つてゐる夏氏の風懷

沈石田、王石谷、藍瑛などの明清のもので支那に見出されるものが又無數にある。支那の繪畫については、所謂文人畫としての鑑賞せらるゝ風韻本位のものがあり、宣和畫院の畫風に見る古典的のものもあるが、何にしても、その大陸的の面目と深みを有してゐるところは特に見るべき點である。又書道にありては、支那人獨特の悠長な氣持と、その書法にぴつたり合した侵し難い風格とが、その運筆の上に現れてゐる。古來の名筆、智永、歐陽詢、顏眞卿、蘇東坡などは趣が汲みとられる。その苟くも筆を取る時分には、正しく卓に凭り、一點一劃を粗末にしないのである。日本流儀の立ちながら卷き紙を片手ですら〳〵と三下り半の去り狀を書く時の芝居に見るやうなやり方はあちらではやらない。かゝる日本流儀の書き振りは、一種の曲藝とし て、むしろ驚異の眼を以て眺められてゐる。片田舍の僻地に游ぶと、略字の書振りがひろく行はれ、過を「辻一」に、歳を「歩」に、劉を「刘」にと云つた書方をしてゐるものが多い。尙支那

藝術の一方面として、古來醫術その他の技工に關するものが取扱はれてゐるのであるが、此處に特に附け加へて置きたいのは支那料理の事である。

支那の料理は、世界一の料理として見られてゐる。その上下三千年の間にあのひろい地理上から來た色々變つた材料とその味覺の體驗とでかなり研究苦心がされてゐる。從つてその材料のこなれ方、その調味の複雜さ、又その榮養價値、分量のまされる點、調理の秘法などに於て、世界獨歩の立場を作り上げ、又その山珍海味と稱せられてゐる丈に、地球上のあらゆる食料をとり入れ、之を眼に見た姿の美よりも、口に味はつて味覺の滿足を得る目的、それから壯陽、補身の目的、この兩方の目的に適ふやうに仕組まれてゐる。從つて時には蛇の肉、蛙の脚などといふ奇々怪々の材料も用ひられ、何處迄も内容が實質本位に調理されてゐる。その調理法には炒、炸、清、餾、燒、の種々の違つた場合があるが、何れも口のやけるほどに熱くして之を卓上に運ぶのがおきまりで又それが味覺を唆ることにもなつてゐる。肉（葷）と菓子の前菜ものの外には冷えたものは出さないのを例とし、又冷えた料理を出して、之に箸をつけさせることは禮に非ずと考へられてゐる位である。燕窩（つばめの巢）魚翅（ふかのひれ）を始めとし、豚肉、羊肉、雞、家鴨、鶴（鶉）熊掌等の肉の料理もあるし、冬瓜、香菜など野菜のみのスウッアイ（素菜）卽ち精進料理などもある。

支那料理にはその最も贅を盡したものもあつて、その主な種類だけでも六七百種に達すと云はれてゐる。が、しかしまたその反對に最も簡單な細民苦力たちのとる一椀一汁のものもある。上は萬金より下は一二錢で以て充分腹のふくれ、用の足りるものもあると云つた風である。之がやがて支那四億萬の住民許りでなく、世界五大洲に普及力を持つて來た世界的料理としての發展力を裏書きするわけのものである。支那料理が、その立派な藝術として文學工藝美術と同格に取扱はれ、又研究法に、又その鑑賞に多大の民族的關心のかけられてゐるといふことは美しいことである。衣裳や建築に技術上の權威がおかれてゐる以上は、又食事のこと、料理の事にも、それと同格の注意關心の拂はれることは實際生活に重きをおいてゐる支那として尤もな譯である。つまり學問の應用として、これが味覺の上に又民族保健、延命長壽の上にと固く結付けられ、その研究に怠りなくやつてゐるとは、どこまでも支那らしい目出度い方面だと云はなくてはならぬのである。

# 十、支那の娯樂と家庭

## 五十三、支那路傍の手品

支那は大衆の國。大衆の日常生活は、まめに働き、その零細な金を得て、それで生計が立てられてゐるのである。その稼ぐこと以外に別段何の考へもなく、年が年中同じ事を繰り返し、唯蟲の如く生きて、蟲の如く死んで行く丈のやうに見えてゐる。所が、あれで仲々どうして、面白いところがある。といふのは秋の蟲を叢に探し求め之を蟲籠に入れ、兩雄を鬪はしめたりするのである。その籠の中へ穗のある草の莖をさし入れ、氣持を一段といらつかせ、又啀み合せ、半死半生の處まで爭はせて喜ぶこともある。又メイホワ（梅花）と稱する紅すゞめ樣なちんちくりんの小鳥を籠に偏ひ、之に十六枚の小皿で丸く一組になつてゐる食器を揃へ、一々之に水や、摺り偏の變つた御馳走など丹念に盛つてやつて食べさせたりするといつた、迚も大變な力の入れ方をしてゐる者がある。

春の野にところは、蘇州城外の芝生のぽかぽかする處に、日向ぼつこなどしてゐるといふと、鳥籠を下げた百姓が二三人やつて來る。そしてタンポポの花の咲いてゐる處に立停まり花托の所から二つに三つに摘み取つてゐる。そしてそれぞれ花の心を二つに、又四つに割るのである。が中から米粒大の白い柔かい虫の生きてゐるのが探し出される。之を竹のピンセットで挾みうまく取り出し、夫々その小鳥に喰べさせてゐるのである。妙なことをするものだと、その譯を尋ねて見ると、百姓のいふに摺り餌などでは鳴く聲がよく出ない。感心しない。どうも仲々苦心なものでありますよと答へてゐたのであつた。

又先年、江南の田舍の旅に一緒につれて歩いてゐた護衞の兵隊が、途上、民家の軒に吊されてゐた鳥籠を失敬し、鉄砲片手にその鳥を樂しげにあやしながら、畦道を辿つて行くのを見た。百姓にしろ、兵隊にしろ、又その日稼ぎの貧民たちにしろ、かうしたひは、小鳥なり虫なりを可愛がり、又自らその小鳥となり、又秋の虫ともなつて、つひ時間の經つのも覺えず、その心から娯樂三昧に入つて打込んで行かうとする氣持と云つたらない。恐らく支那の住民達は皆かう云つた日常生活を常道として歩んでゐるのではないかと思はれる位である。北平から漢口まで走る急行列車の一二等ボーイが、ボーイ部屋の一隅に、止り木に止らせ、何とか云つた小鳥を飼ひ、肉を薄く切

南支の路傍に人氣を集むる手品の場面

り刻んで之をとんとん叩き、挽き肉のやうにして、いとも樂しさうに之を養つてゐる樣子を見たので あつた。可なり乘客も多く隨分世話の燒ける忙しい時間の中に、寸暇を盜んでまで小鳥の爲めに忙 中閑ありの氣持を養つてゐる所は、ボーイ風情とは見られない長閑さであつた。かう云つた小動物を 樂しみ、日常生活を自ら長閑に美化して行かうとする氣持は一般にある。帳場に坐る番頭でも、料 理鍋の側に立つ調理人でも、或は試驗を明日に控えてゐる學生たちでも、又出征軍人の軍艦に乘込ま うとする際でも何れも皆常にかうした心のゆとりを持つてゐる。思ふに戰爭は戰爭だ、娛樂は娛樂だ ぞなどと云つた嚙みわけをした世渡り法をやつてゐるらしく見える。支那の社會では又それを當て込 んだ手品師、輕業師がゐて、軍艦の橫づけされ今も出でようとしてゐる混雜裏に寸地を求め、親子三 人揃ひも揃つた藝當をやつてゐることがある。その伏身になつたり、股の間から手を後へ差し出した り、振る竹の竿の先には平皿を載せて廻し、淀の川瀨の水ぐるまと許りきり〳〵と振るはせながら廻 してゐるのである。側の軍司令部室に充てられた自分の支那宿の軒下に佇み見てゐると、支那軍艦に 乘り込んだ蔣介石軍の兵隊は固より、まさにこれから乘らうとする連中たちも、足並をゆるめて、視 線はこの皿の動きに注がれてゐるのである。支那軍隊の强い、弱いは別問題とし、出陣を前にかうし た遠征途上の風情を味つてゐる處を見せつけられ、人間としての罪なき興味に自ら眼を樂しめつゝ、 出掛けてゆくといふ。あの氣持。其處に支那民族として離れることの出來ない娛樂氣分の漲つてゐる ところがわかる。笑ふことを止めよ。支那の兵隊は戰鬪そのものよりも、どちらかと云ふと、之を劇 化して味ひ見ることを好み、將軍は七言絕句にその遠征の詩情を吟じ述べて、軍事郵便として送つて 來ることに多大の樂しみを感じてゐる。無論一方に金の爲の從軍であるとは云へ、更にそれ以外に、 芝居化された人生の味を感ずることを以て、確かにより以上の娛樂生活の要領だと考へてゐるものと 察せられる。從つて其處には更にその翌日の軍事行動に元氣を新たにさせる所以もあることだと察せ られる。

支那人の營む娛樂生活の特色は、別段たいした費用をかけるとか、金持の眞似をするとか云ふ事で なく、その程ほどに適當な範圍内に於て、何れも自ら樂しみを見出すにあるのである。田舍の百姓村 では、正月の朝、紙芝居樣の操り人形で、將頭案と云へる旅藝人の擔ぎ來るものあるを見る。大供 子供打ち交り、その屋臺の前に集り、首をさし延べ見入つてゐるのである。舞臺の下、黑い布で覆は れた幕の中には、聲色の巧みな男のかくれ居て、面白く、可笑しく役者の臺詞の使ひ分けをやつてゐ る。よく田舍人の氣持に投ずる外題を揭げ、一幕、二幕と打つてゐる間に、多少の見料も得られて來 るので、村より村へと打つて廻つてゐる。村人の樂しみは、ざつとこんなところであつて冬の日向ぼ つこ半分の氣持を味はつてゐる處がこゝに見られるのである。又田舍、川沿ひの村に行つて見ると、 十人に餘る盲人の三味線彈きが、流して歩いてゐたり、船の汽笛を耳にしたと見え、杖で辿り、辿り、

怪我もなくどうにか、輪船に乗り込んで來たりするところが相當見物のやうである。船の中でも客から求められることさへあれば、早速よい曲を彈いて聞かせてくれたりする。

支那街では又よく銅鑼を叩き、往來の行人を集めてゐる手品師を見る。辻に空地ある路傍のあたり、閑人が相當ゐると見えて、忽ちに三十人、五十人といふ人が來たり、環をつくる。手品師は早口で以て面白さうな笑ひ話をし、興を唆り、客をそらせないやうにする。七重八重と黒山をなし集つた見物人を相手に、そろ〳〵手品が始まる。先づ黒い三尺幅の四角の切れがそこに持ち出される。地面を踏み踏みとん〳〵足の音までさせ、その少しも仕掛けのない地面であることを示す。今度はその持出された切れを振り、振り、うら表を見せる。そして又地面に再び擴げておく。おいては取り、取つては又おき、地面をよく疑のないやう見せるのである。二度三度と、かくの如く繰返してゐる中に、大の扇面を取り出し、大きく開き柔かにこれを煽ぐのである。すると切れは波を立てゝ飛ぶ。笑はせながら又之を取つておくのである。やがてこんどはその扇で煽り立つることを止める。すると、驚くまいことか、不思議にもその切れの下から、丸の圓を描いて持ち上つて來るものがある。見る見る、一寸は二寸に、二寸は三寸にと段々上り、つひに五寸位の高さのところまで達する。すると又笑ひながらこゝで扇をとり出し、今度は煽ぐ代りに、その持上つた部分を切れの上から叩くのである。石の如く、金の如く堅い音のすることが判る。何が中から持ち上がつて來たのかと思はせて置いて、バッと切れを取りのけて仕舞ふ。するとそれは、間違ひもなき大の五徳である。頑丈な鐵製の生々しいものである。見る者皆飽氣にとられ、眼を三角にして之を見つめてゐると、奴さん、切れと、五徳を兩手に取りわけ、之を客に近く見せ一巡をする。何れも成る程と云つた顏をして、唯々感心して見せられる。何も袖の內から出したわけでもなし、地から湧いて出た譯でもなし、どう威張られても仕方がない。前後左右から大勢の目で見てゐても、客の目にはそのタネアカシを求めずそのまゝそれを不思議に思つてゐるのである。

次には又聲を勵まし、今のはまだやさしかつたから、更にもつと變つたことをやりませうと云つて、今度はまた同じ場所に立ち、客の一人を招き、中心近くに立たせ、足でよく地面を踏み調べて呉れと云ふ。穴もあいてゐなければ、何の仕掛けもしてはないでせうと說明し、客を利用して自分を明かにし、さうしておいてその同じ場所に、例の四角な切れを置く。煽いで風をやる。切れは飛ぶ。また置き直す。かくの如くして、三回、五回と繰り返しくり返してゐる。そして默つてその切れの上の中心のところに眼を注がせる。客に特に眞ん中を見てゐなさいと云ふ。そこへ不思議さうな相圖の聲を發する。その發音に續いて、今度はそろ〳〵と何んだか中心の一點が次第に盛り上つて來る。少しく搖れて微動しながら持ち上つて來る。客はみな何だか變だな、と云つた顏付をして見入つてゐるうち一寸、二寸、三寸、四寸、かれ此七八寸も高く上つて來る。何だらう、などと思つて見てゐるう

に、今度は扇で中を叩くことはせず、周圍の切れの縁のところをのみ叩いてゐる。何の事はない、大地の響きがするのみである。やがて、その縁を叩き終つたと見ると、バッと勢よく叩き切れをまくり取り去るのである。すると、驚くまいことか、今度は大蛇が幾重にも丸く卷いて環をなし、その頭が中央部にニュッと直出した姿で口顎を開いてゐる。割れた舌の先をベロ〳〵出してふるはせてゐる。その眼つきの冷たさ、物凄さと云つたらない。氣の弱い客は、實に意外又不思議の感に打たれ、吃驚してゐる。やつこさん、支那帽子を脫ぎ、客の前を一巡する。感心させられた觀客は三錢、五錢、十錢、中には二十錢ぐらゐも奮發して入れてやる同情者もある。意外な人氣を博し、多大の收入が得られたと見えて、帽子の中が可なり重さうになつて來る。次い大蛇の尻尾を摘み、輕く持つて一同に見せてまはる。垂れた蛇身から約三分の一の處まで首を擡げる。性質は柔しい。手品師は、何か蛇についての話をしたり頸のまはりに卷いたりなどする。そして仕舞ひには、それを側の木箱に納め、蓋をして留め木をさす。支那の手品師のする仕事は大體こんな風で、氣味はよくないけれども、その興味を唆ることは夥しい。

## 五十四、支那の輕業師姜先生

支那は奇術の外に、また大武術と云つて離れ業の物珍らしい輕い所をやる。中にも、最も危險なひやひやさせる所を平氣でうつてのける處は感心させられる。或る日であつた。三十八の姜（福林）先生といふ大の男と今一人は十九歲の常岐山といふ若い男のふたりが舞臺に出て來る。その大の男の頭上に若い方の男が正しく逆樣に立つて相重なり、二人同體になつた形を取るのである。そして舞臺面をあちこちと動くところの場面を演じたのである。その同體に重なるまでの徑路はかうである。始め舞臺面に一人の若い方が壁に接して蹠をあてゝ寢る。すると、今一人の方が一直線上に頭と頭を合せて俯伏せになつて寢るのである。そのとき、釜敷樣の丸い環狀のものが持ち出され、頭と頭の間に挾みあてて、双方のあたまへピッタリとつけに、又押してゆく。すると若い方は押され押されて行く。僅かづゝ上方に移動させ、させ行くのである。二尺、三尺、四尺、やがて五尺近くも上つた時分には、兩手を床に突き重い體を支へ、逆立ちの姿をとる。すると一方のピタとねてゐた先生は、そろそろ起きて來て、下から持ち上げるのであるが、しかし頭と頭は依然固着したまゝの狀態に

日本の紙芝居に似て子供のたかろあやつり人形、
人形使ひのゐるところを示す

ある。やがて、上の方のが、やもりの壁にピッタリ下向きにくつついた様な姿をとつた時、其の重みを全身に支へてゐる下の方の姜先生は首に全力をこめビリビリ振はせつゝ壁に沿ふてそろ〳〵直立しかゝらんとする姿勢に移る。全身は汗して、大變である。肥大した肉襦袢は、火を發する如き熱度を見せてゐる。やがて、完全に上下二人が壁面にピッタリ鮮かに直立した瞬間には、看客といふ看客は普通なら思はず拍手喝采をする所であるが、何れも手を握りしめ、固唾をのんだまゝ全く感極まり、緊張の極に達してしまつて、誰れ一人手を打つものもなく、むしろ感心の度を過ごして、唯々落ちなければよいが、と云つた心配の氣持に變つてゐるのである。

やがて見てゐるうちに、その重なつた儘の二人姿の身體は一體となつていよ〳〵壁面から離れ、一歩々々、觀客の視線を集めつゝ正面の舞臺の眞ん中へと趾先力強く蹈み固めながら歩を移してくる。先づ下なる先生が金太郎の如くなつて大の字の姿を演じ來れば、上なる先生も亦逆さ大の字になつてハッと掛聲を出して見せる。下の相圖に

ケロ方面の輕業師姜先生と常先生



よつて又上の方でも勇ましく唱和し左右兩手に持たされた旗を振る。そして舞臺を一巡りするのも容易でないらしい。二巡りほどしてやつと溜め息をつき、客に重苦しい、然かし感心した氣持を呼び起させる。やがて逆さの先生の手へ肉片の刻まれた平皿にフォークまで添へて與へられる。逆さのまゝの姿ではあるが眼の玉を動かし、見當を間違へることなく、之を取る。決して取り落とすやうなへまはやらぬ。そして譯なく口に入れ、嚙み嚙み「嚥下」するのである。實は食道も胃袋も上の方に位置をとつてゐるわけであるから、嚥下でなく「嚥上」してゐるのであるが、首尾よく一片も殘さず嚥上して仕舞ふ。殊に驚いたのは、後で茶椀で熱茶が運ばれたのである。どうするかと見てゐると、苦もなく之を飲みほしてしまつた。食道から逆もどりするやうなこともなく、胃袋に納まつたものと見える。飲み且つ喰ふ藝當はこれで首尾よく了つた。これが終ると、同體の二人男は上下揃つて觀客に向ひ輕く挨拶をする。それから今度は大の字なりの橫向きになつた形で又變つた藝當を見せ、やがて舞臺を又一巡二巡する。それから元の壁面に歸り、こゝに立停つたと見てゐると、壁を傳つて靜かに兩人はやゝ安心の氣持ちではなれて行く。その頭と頭とが離れ別るゝ所まで行くには尙相當の時間を要するのであつたが、兎も角も無事に藝當をなし終へた。まことに流汗淋漓、世界に又となない、骨の折れた輕業なのである。後で自分は樂屋に訪ねて行つて、その苦心談をきゝ、南支の鄕里生地を聞いたり等したのであつたが、たつた一度だけ舞臺で、上から落ちて、ひどい怪我をした事があつたさ

うであるがそれ以來、そのコツを心得てゐるので、もうこの頃は大丈夫なのですと云つてゐた。支那の大衆は、最早や普通の輕業では滿足が出來ず、刺激の强い、物凄い藝當を見せるのでなくては、受けなくなつたものと見える。支那世相に迎合して、大衆娯樂の、その時代相と共に進み稼いで行くことはまたかなり骨の折れたものと思はれたのである。

## 五十五、人氣を呼ぶ芝居の一二

太子と猫の兒をすりかへる芝居、狸猫換太子の一場面

支那大衆娯樂のうちで、芝居の面白味の受けてゐることと云つたらその日常生活から引き離すことの出來ないものがある。その芝居の何處ででも打てば必ず當てるといふ外題があるが、その中には、狸貓換太子だの、白蛇傳だの、御碑亭だの、天女散華だのいふのがある。夫々皆特色のある面白い筋を有する芝居である。

中にもリーマオホワンターツ（狸貓換太子）と云ふは、宋の稗史からとつたもので、たしか、神宗の時であつたか、宮廷風俗人情の一端が勸善懲惡の筋は、數多の宮中おほ奥の妃たちの、花の如き雲上生活の間に、或る一人の妃に皇帝の覺えも目出度く寵愛斜ならず、芳情日に集り、つひには或る日の事玉の如き王子を分娩するに至つたほどであつた。處が、大奥の近侍、役人たち始め、又他の妃連中の間では、平常餘りに、上の一方に偏した寵愛振りを妬み、機會のある毎に何とかして腹癒せせんと狙つてゐた矢先、最早、抜きさしならぬかすがひの吉祥事があらはれたのでこのまゝに見てゐてはどんな事になるか判らぬとて、いよ〳〵こゝに秘事がたくらまれたのである。といふのは先づ第一着に宮中の産婆を語らひ、桃の形をした玉手箱を用意させ、その中に何處かで生れた猫の子を入れさせ、之をこつそり産婆の手から胸に秘密を抱きつゝ、雲の上に表面は此の度の吉慶事をことほがんと、係り役人を經て、言上に及ぶと云ふ段取りに仕組まれた。而してそのとき玉手箱の內容をこの通りと上聞に達せしむるやう計畫されたのである。所がその時は、全く猫の子を生み落とされた妃として惡く申上げたことが、どうなりかうなり通つて、事がすみ、妃は君側から遠ざけられる事になり悲しい日を送つてゐた。實際又その妃の、餘りに意外な不成績振りに初期の目的はうまく達せられたものと考へられ、年來の寵愛もこれできつと、日々薄らぎ行く事だとのみ早合點し、內々その關係者一同は安堵の思ひをしてゐた。所が星移り年の經つにつれ、天は正しからざる者に與みせず、何時とはなくふとした事から、往年の妃の分娩による王子は宮中に緣もゆかりもない程遠き人里に育たれ、

成長して、この頃は立派な少年になつてゐるとの様子が手に取る如くこまごま上聞に達した。最早や爭ふべからざる事實として、それが確認せられるに至つた。大奥内の積弊、内訌、ねたみ、そねみの結果が飛んでもないたくらみとなつて行はれた事に氣のつかれた皇帝は、事態容易ならずと見られ、當初から之に關係のあつた妃連中や、糸を引いてゐた役人達、又産婆など一人殘らず召し出し、夫々手きびしいお取り調べがあつた結果、是を是とし、非を非とするのお裁きが立ち處に斷行され、流るる如き長き綸言を仰ぎ、姦臣、よからぬ妃たち産婆どもは配所の月を眺めさせられる身となり、こゝに雲はれて王子は目出度くお側近く召され、御對顔の出來る身となり太子として立てられることになり、件の妃は皇后となり、御機嫌麗しく宮廷禁裏は瑞氣が再びあたりに漲るの世となり、大團圓に納まつたといふ筋に出來てゐる芝居なのである。

かう云つた他愛もない民衆向きの芝居が流行し、一度打てば必ず人氣を集め、何日續けて上演してもこれぱかりは見物人に飽きが來ないと云はれてゐる。他の白蛇傳あたりにしても同じ種類の筋ではあるが、それは何れも嚊し方の奏樂、役者の顔の隈取りにその立廻り、臺詞の如何がその時の人情の機微を穿ち、その表情振りが、その程度々々の客の心を突き、その肺腑にぴつたり合ふところがある。こゝに支那大衆演藝としての生命が存してゐる様に思はれる。しかもその觀覽料の安き事、又無雜作な不斷着のまゝで入場の出來る習慣になつてゐること、等がこれまた民衆演藝の人氣を



充てゝゐる間接の要素となつてゐると云へる。

## 五十六、家庭生活の挿話

支那の家庭は、娯樂氣分を生命としてゐると同時に、そのよく稼ぎ、生計の事によく注意して、自給自足の精神に基づき、何れの方面にも堅實に、經濟生活を營むことを第一義としてゐることは既に述べた通りである。支那の家庭生活は、どこでも比較的多數の家族を擁してゐる關係上、費用の嵩む心配がある。殊にまた中流以上の家庭にあつては、一夫多妻の習慣が、大分減じて來たとは云つても、しかし今なほ熄まず、第一夫人の外に、第二、第三、第四と、甚だしきは、十人、二十人から二十六七人に達する夫人を擁してゐる豪の者すらあることである。第一夫人は普通、主人の年よりも一二歳、年齡の上であるのが從來の慣例となつてゐる。相當年を經た

湖南湖北地方界隈切つての茶目で聞えた一寸坊の君

後は、第一夫人のお眼鏡に叶つた範圍内のもので以て、第二、第三のそれを迎へる事とされて居る。その代り、第二夫人以下は媒酌人を要せず、從つて必ずしも紅の轎子に乘つて輿入れする事を必要としてゐない。比較的無雜作に、その側室となつて家族の一員に迎へられるのである。その爲め大家族主義の家庭内に於て實權を振ふものは、何と云つても第一夫人であつて、住宅の内房第一室にその居室を占め、第二、第三、以下は左右の側室にその部屋を貰ふことになつてゐる。固より左右の各部屋は書齋、子供部屋、客をとめる部屋などに充てられてあるものが多く、客の應接室は大客廳と云つて正面の、内房に近き大室に設けられてゐる。小さいうちでは臨時にどの室でも之にふり當てる。庖厨は普通、別の附屬建物が之に充てられ、ボーイ、車夫、馬丁、門番、阿媽等の小室は多く門の左右の棟に間仕切りされてゐて、自働車、手車、物置き等の側に設けられてゐる。

中流以下の家庭では、一夫一婦を原則とするも、下層民にありては獨身ならざるを得ない事情の下にある者が多數にあり、その反對に、上流にありては、その社會的仕事の手廣ければ、手廣い程、多くの側室を持合はせてゐる。無論こは人にもよりけりであり、例外もどつさりある。又自働車の運轉手程度のもので、奇數の日は主人の宅に、偶數の日は場末の自宅に、と使ひ分けをしてゐる類のもあるが、こは無論幾らでもない收入のうちで第一、第二を都合して持つてゐるのである。



支那では、婦人は、その女としての家事裁縫などに從ふ者は比較的少く、食事、賄ひの方は、炊事道具や、材料の關係で、すべて男子が之に從事することになつてゐる。良家の家庭の夫人で、食事のことなんかに喙を出すと、評判を落すと云はれてゐる。さらばと云つて、裁縫の方はどうするかといふと、これも、日本流儀に、解いて仕立直す事などは少い爲め針仕事の方の機會は割りにないのである。午前中から晝過ぎ迄お化粧三昧に耽り、厚化粧のおやつし美男かづらを用ふる髪の結ひ方などは殊に念の入つたものである。頭にぴつたりと漆の如く黒髪の固着した結ひかたをしてゐる姿は、左右兩耳の翡翠の飾りと共に何處までも支那美人の面影を匂はせてゐる。

支那婦人は、良家にあつては、金の腕環、翡翠の腕環、など數多嵌め込み、中庭に、或は庇の下に、椅子に陣取り、足を重ね、悠々團扇を使つてゐるなどは見る目もよろしい。しかしどうかすると、その下男を叱り飛ばし、第三號、第五號などの若いのを槍玉にあげ、時には、わが亭主を批評し、落ち度など云ひ、大聲で、以て怒鳴り散らし、醜聲のかなり外に洩れたりすることもある。甚だしきに至つては、門外に出でゝ往來の人を目當てに、考へもなく内輪のボロを、その眼つきも恐ろしく、口許のしまつた鋭い顔つきで、さらけ出してゐる場面すら見ることがある。家庭内では亭主はむしろ、女共に口答へをしたり、手を出したり等する事はなく、嬶大明神の形で、自分はひそかに後庭に場面を避け皿に水を盛り、筆など浸して、鉢植の蘭の葉はを一々表裏から淨め洗ひ、醜聲を餘所に、君子

人の趣きを發揮してゐる所など見ることがある。これは支那家庭内部の實際を描寫した話であつて、可なり敎育のある家庭婦人であつても、虫の居り所が惡いと、忽ちにして角を出したりなどする。すべてがすべてかうと決つてゐる譯でもないのであるが、南北各地にかう云つたのが多い。一家團欒の睦まじい良家の美風をたゝへたうちも相當にある。けれどもどうかするとその母親を異にしてゐる子供の數多ある家では、何かにつけて、云ふ事が多く、夫々子供を持つ母の立場が違ひ、銘々外交的手腕を振ふ必要に迫られてゐる事もある。その係り係りによる母親の權力次第で、同じ海外留學に出してゐる子供の學資の點に迄も、甲乙の差別がついてくる。一家の財政方面は、第一夫人が大抵握つてゐるので、自ら第一に取り入つてゐない者は損をするといつた形である。併し若し第一に男子がなく、第二第三に男兒がある時には、側室の方が威張り、そのため時ならぬ爭ひを起す事もある。すると第一は言下に、『お前さんは鼻高々と威張りなさるが、この家へ這入つてくる時、媒酌人があつたのですか。紅の轎子で輿入れをしたのですか。我が身の程を少しは考へて見なさい』と、痛い所を一本まゐる。第二はギャフンと參る。第一夫人は悠々天の一方を眺めて聊か得意氣な顏をしてゐる。一々さらけだすべきものでもないが、その邊の支那家庭内の樣子といつたら語り草は數知れずあるのである。

支那家庭に見る衞生は、その食物を煮沸して、そのぬくいうちに、また材料は何でも十二分に焚いたものを食べると云ふ考へた習慣がある。又家庭で殺菌用の韮、蒜を攝る習慣もある。殊に生のにんにくは自ら特効があると云はれてゐる。住宅内の冬の暖房裝置などはあまり考へられてゐる方でないが、その衣服に、また、建築におのづから調節されてゐるところがある。窓のわざと小さく設計されてゐることや、壁の厚く作られてゐることなども、自ら衞生に適する事になつてゐるやうである。

## 五十七、家の字の生ひ立に見る豚

支那の家庭は、上古以來、豚をその家族の一部に取り入れてゐたものだから、その當時の文字を作る上にも家の中に、豚が三頭描かれ、それで家の字が組み立てられてゐる。豚を三頭、牛を三頭、羊を三頭などと家畜の配合されてゐる事實は多い。すべて文字の上に之が明示されてゐる。豚は、その後一頭のみを屋内に描くことになり、他は略することゝなつた。これが今日の家の字となつて殘つてゐる譯である。實際に支那は、田舍の家庭に入つて見たり、又支那宿に泊つて見

山東泰山、山家に親しむ野ばなしの群羊

たりすると、その隣室の横の方から、豚の親子が、鼻で唸り聲を立てながら、足許に飛び出し、びつくりさせられる事もある。居室に接して、豚小屋の設けられてゐる所もあり、全くその氣持に於ては家族同樣の取扱ひをなしてゐる。心からひどく可愛がつてもゐるし、又食糧の目的にも供せられてゐる。殊に衞生の上では、犬と共に、便所代りを勤めてくれてゐる點もある。支那生活の上に、豚が家庭内に重く見られてゐるといふのは、日本人の意外とする所である。その豚は親子諸共に潔癖性を有し、子豚の一つ一つ定められた乳房は、生れ落ちてから、必ず所定の第何番目かを嘗めることに定められ、母豚も亦それを注意してゐる。もし第三番目の乳房をしやぶつてゐたものが死亡した場合は、その第三番目の乳房は退歩してなくなる事實のあるのを以て見てもそれが解る。

支那家庭の團欒融和については、その全體が大家族をなしてゐる丈、それ丈、夫々外交的氣分もおのづから養はれ、互に押し強く云つたり、又互に我慢をしたりするところがよくこなれてゐる。その點は認められるのであるが、やゝもすれば角を出し、口角泡を飛ばし、やり合ふこともある。しかしそれは單なる口の上、口爭ひの程度に止つてゐる。全體としてはどこまでも面白く、朗かに行つてゐる。家族のものは樂しく食事を共にし、殊に夏の夜は月下に食卓を中庭に持ち出し、ボーイが料理を運び來たり團欒のうちに、時間を掛け、ゆつくりと飲み且つ食ふのが一般のおきまりとなつてゐる。かくして、食事の時が、何よりも全家族のものゝ樂しい時間と見られてゐる。食後、胡弓の一棹を持ち來り、兄が之を彈き、弟が歌ふなどの樂しい團欒振りを見るのも少なくない。中以下の家庭ではその庭が廣くなく、食卓は路傍に面して、或は夏は路上に持ち出しなどして、成るべく往來の人に自ら接し得るやう身構へして食事をとる。その間、日本人のやうに人に見られて恥かしいの、人の手前きまりが惡いの、失禮のと云ふやうなことは考へない。その邊は頗る呑んき氣に出來てゐて、無邪氣であり、又社交的な所がある。

支那の住宅には物置のある家は少く、又部屋に押入れなどの設備のあるうちもない。應接間、居間、臺所、何れを見ても家具が甚だ少く、上流の家庭でも、炊事場は鍋に竈、庖丁の三つと云つた簡單なものであるには驚く位である。これ等は平素簡易生活に慣れ、道具を殖やさない習慣から來てゐるわけでもある。その又道具は見て呉れの體裁なんかよりも、實質本位の手丈夫なものをわづか用意してそれで事は足りると見られてゐるのである。支那住宅は、一般から云つて採光の設備が殆んど考へられてゐないが、これは昔しから室内は暗きもの、落ちついた感じのするもの、時には又隱れ部屋などと云つた氣持の主となつてゐるがため何處までも沈重氣分が十二分に滿たされてゐる。それ故日本人の朗らかな、一にも二にも、明るい事を欲する氣持とは、丸きり正反對に行つてゐるのである。戸外より來たつて、支那住宅の内部へ踏み入る時には、まるで暗室に入つた如き感じのする事がある。ここに支那家庭生活の特異性がある。片田舍の農家あたりでは、住宅はたゞ寢に歸る所、星を戴いて出

で、星を戴いて歸り、食後わづか許り、カンテラの下で談笑でもし、弓胡を聞いたりなどしてゐるが、やがて何時しかその暗室に潜り込み寝て仕舞ふといふのである。近所界隈の人と語り合ふのは多くは路上で、又室外で、と云つた風で、居室そのものは全くの身體を休める寝部屋ぐらゐに考へてゐるに過ぎない。之が支那の下層民達の家庭生活の半面を物語つてゐるところだと云へる。



# 十一、支那世相の表裏

## 五十八、ミエンツ（面子）の問題

支那の世相は、一言で云へば、法律に依らない自治生活の赤裸々な方面を見せてゐる種々相である。その各人の内部に包む氣持は、可なり堅實な者がある。その銘々が露骨な主張を持ち出して、がやゝ〳〵騒ぎ立てゝゐる事もあるが、「一に實質本位、二に面子、この二者で以て、大體問題は片づけられてゐる。その面子に伴ふ實質的の收入があつて、自分の自營の目的に適ふことに見極めさへつくなら

軍服正裝したる劉將軍

ば、大抵の問題はすぐ片づく。〕その立場を惡くし自分の顏に對して泥をぬられた樣な事をしでかされたときは格別であるが、併し自分の心持で、人を察し人の顏を潰さない樣にする事は、特に思ひやりがあり注意が拂はれてゐる。

南支の城内で六神丸を買ひ求めたいと云ふ客と一緒になり、その街切つての信用のある藥店へと馬車を驅つて出かける。客を案内して、その店舖に入り、品物を出させ、その内容を確しかめ、値段の取りきめをすませる。そのうち外の葯種の話もしたりなどして、その客と共に店頭を辭し、いざ馬車に打ち乘らんとする時、店の手代が路上に出て來て、その案内者たる自分を特に呼び返し、一寸店までお出でをと云ふ。ふたりで行つて見ると、その時の賣り上げ代金に對して、一割を提供し、その勞を謝したいといふのである。こちらでからからと笑つて受取らなかつたら今後も亦よろしくたのむと笑顏を作つて皆で以てその心持を語る。これは支那老舖許りでなく、一般世相どこでも常道としてゐる所であつて、そこに紹介者に對する因緣關係を結ばうとするのである。つまり其の間に實質的のものを、さし出して、その案内した人の顏を立てることをする。そのときは顏の如何に拘らず、又その人の身分の如何を問はず、之がまめまめしく行はれ、そこにその店の信用狀態、竝びにその品物に對するよい評判を宣傳してもらふやうにと務めるのである。若しこの際、案内者の方で、その品物の相場に對していくらいくらを値引きせよと云ひ出した場合には、店によつて、御氣に召さねば他の家へ



行つて呉れと云ふうちもあるが、併し多くはその人の面子に對して、五分なり、一割なりを負ける。まけてくれない時には、言葉の調子を變へ、折角の客に對して僕の面子をどうしてくれるのかと詰め寄るのである。さうすると、番頭共、互に私語し、それでは仰せの通りいたします、と云つて折れて來る。こゝに支那世相の爭へないこまやかな所が見える。

〔支那の世相は、法律に準據する、せぬ、の論は別として、事實上法律から超越して、すべての問題が人情味本位で取り行はれてゐる。〕官吏の任免にした所で、罪人の取り扱ひ振りにした所で、又對内策の身の振方、樽俎折衝にした所で、何れも皆然りである。よく上海の租界の巡捕あたりの話にきく所であるが、假りに或る商店の陳列品を盜んだ者が往來で追ひ掛けられ、日本の巡査に捕縛せられた者であつた場合、官憲の力で以て何處までも、窃盜は窃盜として最後まで罪に問はれる。こは法律國に於ては當然の事であると見られてゐる。所がその管轄地域の支那街になつたところを見ると、その巡査は止むなく犯人を支那の巡捕にゆづり、之を引き渡しする。すると、今迄默つて縛られたまゝ引つ張り廻はされてゐた奴さんが、その新規の巡捕に向つて、道すがら問題を持ち掛けるのである。それは私もお前さんも共に同じ民國人同士ではないか。日本の官憲が綱をかけたのは仕方がないとしてもお前さんまでが自分をこのまゝ警察へ引つ張つて行つてしまふとは思ひ遣りがなさ過ぎるぢやないかどうだ、一つイークワイチェン（一塊錢）〔大洋銀一元〕呉れてやるからこの綱を解いて呉れないか、

とか云ふのである。すると、巡捕先生、掛け引きもうまく三塊は出せ、と持ちかける結局押し問答をしてゐるが。中間を取つてリヤンクワイ（兩塊）で以て話が纏まる。法律の上ではさう云つた窃盗事件がその日一件だけ、尠かつたと見て置くならばよいのである。すると、犯人は助かるわけだし、警官の方でも特別收入があつた譯だし、一擧兩得とは之を云ふのだとほく〳〵顏である。日本の巡査の行き方とは全然正反對で、むしろ法律を逆用して金儲けが出來てゐるのである。こゝに支那の法律を無視した世相の表裏が遺憾なく窺はれるのである。

支那の社會は、表面から見ると、その如何にも國家の制裁など無く、他愛もなく物が片づいて行つてゐる如く見えるが實際にはその裏にはすべてうまく糸を引いてゐるものがあつて、了解の出來てゐる利害關係がこまかく結ばれてゐるのである。しかもその長年の習慣通りに多く大抵の事が裏面の方法で以て解決されて行く。よく〳〵の事でなければ表面化することはない。表面化した時には、「既に相手の顏を潰す事を計畫的に考へてゐる時である。其處になると、表面化された面子の論は、とかく双方とも鎬を削つてやり出し、兄弟喧嘩を他人の前にさらけ出し、事態容易ならぬ事になつてしまふ滿洲問題などもそれである。甚だ以て難かしくなる。時にはその面子を維持せんが爲めに莫大の金をすつて仕舞ふこともあるが、それでも尙双方で手を引かぬことさへもある。多くは其處まで持つて行かないうちに大抵のところで片をつける。さうするには互に了解の點と、かねと面子問題とがその解決法として重要な楔子となつて來るのである。そのうちでもとりわけミエンツ（面子）が一等八釜しく考へられてゐる。

## 五十九、茶館に行はるゝ民衆裁判

蘇州玄妙觀茶館まへの白市晉見

支那の世相を見るには、茶館の場面くらゐ都合のよい場所はない、本來茶館の出來てゐる譯は、一般民衆の、金のかゝらないよつて、朝早く此處で口を漱ひだり、顏を洗つたりなどする事を兼ねて、その一日の仕事の計畫を立てたり、相談をしたりすると云ふ仕事の上の利用を專らにしてゐる處もあるが、又友人と相會し、談笑をするとか、或は蘭花、小鳥、鬪蟲などの趣味を味ふ爲の利用を主としてゐる處もある。その地方界隈でも、その茶館の設けられてゐる場所次第で、自ら茶館に來る客種も違つて來るわけである。同じ

商人の集るものにしても、呉服商、書籍商、五金商（金、銀、銅、鐵、錫）古玩商、雜貨商等夫々その專門によつて集まる特色がつけられてゐる。中には、その自分の趣味で、之に出入する者は、朋友など伴ひ來たつて卓を圍み、自ら好む所の茗茶を持參し之を取り出て、茶館のボーイから熱湯を求め、三度も五度も出して殆んどその茶の味のしなくなるまで飲みほして居る者もある。水瓜の種子や南瓜の種子を嚙りつゝ、窓の外に吊るされた鳥籠を見て、何事をか樂しく語り續けてゐる若き女連れも見える。客だねの範圍は夫々その茶館の格式に依つて違つてはゐるが、何れにしても、支那の社交方面では、この茶館の場面ぐらゐ支那人氣分の有りの儘に窺はれるところは少い。

支那では、暄嘩をする二人の當事者なども、どうかすると、時折り茶館を利用して日を約束し、時刻まで取りきめ、土曜日の午後の三時と云つたやうな、都合のよい大衆の集り易い時を申し合せ、約束の茶館指して、二人でやつて來る。三十人、五十人、百人と這入り來つて、卓は何れも滿員の形となる。すると二人は、そろ〳〵その自分の名を名乘り、自ら主張する所の論點と、相手の不合理な點などを並べ論じ、甲は右に、乙は左に、と夫々立つて交互に滔々懸河の辯を揮ふ。滿座の客は熱茶を啜る音も立てない樣にして、靜かに傾聽する。中には西瓜の種子を嚙りながら聞いてゐる者もあり、左右兩手を筒袖に入れた儘、卓に凭れ、首を垂れ、感心して聞き入つてゐる者もある。頭を廻らし更に深く感じ入つてゐる姿してゐる者もある。辯論の諧謔に一座どつと笑ふ。あれこれと辯じ來り、辯じ去るうちに、聽手の方ではそれ〴〵その何れかに肩を持つやうになる。色彩が別れて來る。そして甲乙二人は腹の中で、夫々最後の決を採る場合は、公平に、その問題を大衆に決定してもらはうと考へてゐる。そこで、遂に滿座の客に向かひ、甲乙何れを可とし、又何れを非とするかの採決の幕が切りおとされる。その時の決は頭數で以てきめらるゝのである。甲が絕對多數を占め、乙の贊成者が意外に少い時には、無論その論議は乙の負けになるのであるから、文句はないのである。そしてそのときその茶館滿堂の客の茶代をば全部乙の方が引受け、仕拂ひを餘儀なくされるのである。之が支那世相の法律を超越した大衆的裁判の實況であつて、こゝには巡査も要らなければ、裁判官も必要としないつまり民意が之を決定する最高の力を持つてゐると見るのであつて、今日他の國の陪審裁判よりも、尙有力であり、最早動かせないものだとされてゐる。之を一にも、二にも巡査を呼んで來たり、交番へ行つて裁いて貰はなければ、きまりがつかぬなど云ふ官憲にぶら下らんとする如き、依賴心は毛頭持つてゐないのである。こゝに茶館を利用して論議の黑白を取り裁くと云ふ民間裁判の面白いところが行はれてゐるのである。

## 六十、支那商人に見る裏の手

支那の世相は、何時も云ふ通り、大衆本位に動いてゐるものであり商ひは多く、顧客本位のもので

あるから、たとひその小商人にしても、その店頭に飾られた代物が、獨りの客によつて全部買ひ取られるなどは好ましからぬことゝせられてゐる。金のある人が、金にまかせて殘らず買ひ占めやうとしても、その求めには應じようとしない。その云ふ事が又振つてゐる。店は小さく共、數多の客の便利を圖る爲めに、此處に長年信用を賣つてゐる。貴方一人が客と云ふ譯でもないのだから、御入用でもあらうが、半分は殘して置いてもらはなくては、とその凛とした處を主張する。この氣持はどこにでも見えてゐる。そのやつと膝を入るゝに足りる小室を持つてゐる者でもどう云ふかと見ると、その室は必ずしも大なることを要しない。風雅であればよいのだ。又花は香氣さへ高ければよいのだ。必ずしも多きを要しない、と云ふてゐる。かう云つた面白い氣持がそこに汲みとられる。一般支那の人は、其處に一種の澁い人生觀を發揮してゐるのである。

室は雅、大を須ひず
花は香、多きに在らず

と云へるのは、全くこの間の氣持を指してゐるものである。併し其處にはもつと大衆本位

不夜城上海の目抜き大馬路の商店老舗



の民衆氣分が閃いてゐるのであつてこは資本家に對する一種の痛棒を加へてゐる言葉だとも云へるのである。

又支那の商店では、一般に品物を賣る場合に日本人の考へとちがつたところがある。といふのはその相場が、その一つ丈を取り出して、賣る時には、値も安く、割引きもしてゐる。ところがこれを數多く一人の客が、買ひ求めようとする時には、その割りに安くしない。こは一般の商ひ心理から云つて相反したことの樣に考へられるところであるが、事實はさうではない。こはつまり、一度に品物をどつさり買ひ求め得られる人は、金のある人であり、資本家である。食ふに困らない人である。たつた一つしか買へない人は氣の毒な人であり、貧しい人である、と云つた建前から出てゐるのである。この故に何としても金を多く用意してゐる人には、きつく當り、負けようともしないのである。こは支那の常識論から云つても當然過ぎるくらゐ當然の問題である。

外國の人が、支那街に入り、燒物屋の店頭であれこれと買ひ物をする。そのとき十數點の品物を買はんとするに當り、例へば、茶椀は茶椀でいくらかづゝ値切る、大皿小皿はまた之を多少づゝ値切るその上急須を値切り、植木鉢を値切り、あれこれと算盤を前にかなり負けさせてそれぞれ澁しぶながら承諾させてゐる。さうしてそれらの全部を買ひ取る積りで荷造り迄させる。店の方ではやゝもすれば、既に買つてくれたものと見てゐる。外國人のあたまでは、その懸け値が多いので、油斷がならな

い、と云つた先入主が支那人の店に對して久しく頭にあるものだから、その爲ひどく遠慮會釋なしに我が儘な値引もさせるのである。店の方では百方客の心を損じまいとするから、商賣に巧みな對手は逸早く、其處でその値切られた夫々の品物の値段を順次、算盤に加へて來る。珠を彈き、最後に出た〆高が、五十三弗と七十五錢と云つた數字を示したとする。するとその算盤珠を客が見て、手を出しその總額の中から更に三弗七十五錢を負けさせようとポンと珠を彈き消す、そして云ふには薩張りするから、ハシタだけ負けておけ、よいではないかと駄目を押す。我慢に我慢をして來た商人の方では色をなして、その外國人の顏を見つめる。そして云ふには「貴方は茶椀の値段も、皿の値段も、植木鉢も、夫々値切れるだけ値切られた値で、すべてそれで滿足、承知したのではありませんか。その既に定められた値段を總計してこれ丈の金額になつたのであります。ですから、いくら此處にハシタが出でようと、それは貴方が承諾された金額の總計を物語るものではありませんか。それを今更また無理無體に値切り倒さうとせられるのは、貴方の理窟がなつてゐない。無茶ではありませんか。それでは、品物を包んだけれどもお渡しすることは出來ませぬ。」と云つて態度が急變し、小僧をしてさつさと奥へ仕舞はせてしまふ。客は呆然としてゐるが仕方がない。結局の所、その合理的の〆高を拂はなければ話が纏らなくなると云つたこの種の事實談は、南支那の城内燒物店あたりで目の當りに見る場面である。吾人が緣日商人を相手にしたやうな式に行けると思ふと、信用のある古い支那店では相手にしてくれないことがある。この邊はまた支那世相の裏面を物語るものであつて、支那人は金ばかり欲しがり、いくらでも値切つた値段にまで負けるものだなど云ふ事は相手による話である。その間の商賣心理には支那一流の尤もな理窟の存在してゐることを忘れてはならないのである。

上海ホンキウ(虹口)日本人町を練つて行く支那富豪の葬式

## 六十二、阿片を運ぶ靈柩車

支那では法律を超越し、わけて商賣にかけては商賣の習慣を重んじ、何處までも支那式の行き方を守つてゐるところがある。俄か仕込みのハイカラな行き方はあまり歡迎されてゐない。その表裏共に、何處迄も在來の氣持を尊重し、風俗を重んじてやらねばならぬところがある。祖先傳來の墓地の如きも、その鐵道敷設とか、道路の開鑿とかいふことの爲に、强制執行で之を買收したり、沒收したりしやうとする事がある。ところがそれが、地方民の反感を招きつ

ひに沙汰止みの止むなきに至ることがある。いくら貧乏をしてゐても、先祖の墓地を人手に渡されてゐると來たら何處迄も騒ぎ立てる。さも尤もに聞こえるやう頷づかれる議論をする。それならば、腹の底から絶對に考慮の餘地がないのであるが、如何なる場合でも、人手に渡さない腹でゐるのかと云ふと、そこには又支那式のところがある。表面は世間に對する手前、同郷の郷黨の人に對する手前、又事實賣りたくない氣もしたりして、八釜しく述べ立て、文字にも書き立てたりする。如何にも道徳上君子人を以て任じて居る人のやうに見える。しかしそれは所謂面子の上からの努力であつてこは體面の爲の體面である。その實は一畝いくらいくらの割でもつと高く之を買ひ上げて呉れないだらうか、さうなるなら幾割の報酬を條件としますなどとその裏口の方から運動して來る。その猛烈さ、根氣のよさと云つたらないのである。つまりは金にし度いと考へてゐるものもあるのである。それ故、其處にいくら土地收用に對する喧しい反對運動が突發して來ても、おい左様か、と云つて引さがつたり、沙汰止みにしてしまつたりしては眞の意味に於ての地方民の心持ちに添はないことになる。いくら猛烈な反對があつても、反對は反對として受け流し、その實を握らせるように手配をすることが、地方役人の要領である。またそれに依つて要領を實行する丈のこともある。支那や臺灣、滿洲國あたりの墓地問題は常に表面化したものとなつてゐるやうだが、その表裏に伴ふ心理狀態をお察しすることが何よりも大切なる事である。そこに必ず面子の問題が伏在してゐるのだから、下手なことは云ひ出せないのである。

支那では、また父母の靈柩をその郷里、生地へ船便によつて、また輸送の都合で、一日も早く送り届け、適當な位置に墓地を求め、此處へ葬りをさめ祖先の靈を休めなければならないとの考がある。この意味からして隨分澤山の棺柩が、各地の船着場、水邊の土手に雨曝しとなつて並んでゐるのを見る。その上に被せた菰の日數を經てゐるため腐つてゐるのもあり、又やつと數日前持つて來た許りのものもあり、相當立派な漆のかゝつたのもあり、様々である。壽材は丸太二つ割りであるから可なり厚みがあり、七八寸を超えてゐる頑丈なものも見當たる。栗や柳の材が多いやうであるが見たところ堂々たるものである。三年や、五年、風雨に遭はうともびくともしないものである。安徽地方では土中穿山甲にやられるので、墓の周圍に漆喰づけに茶椀を並べて丈夫に構へてゐるところもある。良家の家庭ならば、三年の喪、少く共一年の喪が明けると、家郷へわざ〳〵船をさし向け之を送り届けるのがおきまりのやうである。けれ共、事實上は様々の都合から、心は此處に在れども、仲々さやうに

は參りかねる。名前の札も、打たれてない位だから、、外、一寸見わけもつかず、何とも仕様がない。又はたから云々すべき性質のものでもない。

この靈柩には、その生前に、金のゆたかな者は善美を盡した彫刻、或は漆を加へて、永遠の生活に入る死後の住家として、出來る限りの費用をかける。こは支那世相の民情の常であつて、墓地に金を掛けると同樣に、この點については、神經が過敏に働いてゐる。この事は前にも述べた通りで、死後の生活を安定させると云ふ氣持から、之に心一杯の用意をするので、こは支那民情の現れとして最も重要視せらるべきものになつてゐる。

支那民情の上では、棺柩に對して一種莊嚴の念が結付けられ、こは神聖にして犯すべからざるものといふ考へが伴つてゐる。それ故、支那街や租界の往來で支那人が葬式の行列を作つて歩いてゐてもそれには何とも云はぬ。何等禮を失する振舞ひをするものもあるわけがないと思はれるのは當然である。こは世界各國何れも同じことで人によつては目禮をして亡き人に禮を捧げてゐるものさへある。所が近來、上海の支那街あたりでは、巡捕や兵隊が、劍突鐵砲の武裝姿で、支那人の行列を誰何してゐる。行進を止め、靈柩車を臨檢してゐる。時には飾られた花環を取り除け、厚い棺の蓋に手を掛け之を開いて中味を調べようとすることさへある。何故そこ迄、人道を蹂躙し亡き人に禮を失した、傍若無人の行動に出るのであるかと、誰れしも思ふところである。ところが近來の支那は、警察官より

君子は貧を憂へずと自らうそぶく天下の浪人

も、うは手を行く民間の智慧者があり、この頃頻々と夥しい阿片の貨物が靈柩車に見せかけ之に納められ、亡き人を運ぶやうな姿に裝ひ、役所の眼を晦まし、某方面、某方面へと密輸送されてゐるといふ事實がある。その爲め、勢ひ之が臨檢を必要として來たのであるとのことである。支那では、阿片の事をヘーホ（黒貨）と稱し、露骨に阿片と云ふ事を避けてゐる。又指でそれを示す方法もある。何れにしても、この葬式の形式を利用して計畫的にインチキ（隱的）をやらかさうと云ふ者が、數多く動いて來たことはこの一事で以て萬事が解るのである。

## 六十二、どうにもならぬ侵入者

支那の世相は一方に金儲けの巧な人々の活躍してゐると同時に、また其の裏に、その人々が罪滅ぼしとしてお寺を利用し、或は慈善團體を仲介に立て、施しの醫藥、治療、

寄附をさせたり、又貧民にお粥を給與したり、など社會事業的な方面に惜ます金を出す者が可なりある。必ずしもそは罪滅しの意味ばかりでなく、眞の救濟の精神から產を投げ出してゐる人もあるのである。けれ共、そのお寺に施米し焚き出しをさせたり、藥を與へたりなどしてゐる者がある。その動機は、大きい意味の人道問題もあるが、中には善事を算盤勘定で計算し、自分のこれまで犯した惡事は百と見積る。その時には、百二十丈の、又百五十丈の善根を積むなら、その差だけ神に認められるわけであると考へて、寺の修繕に大金を出したり、佛像の塗り替へを一手で引き受けたり、佛書の刊行、寄贈を一手で持つたり、など可なり寺院方面に盡すのである。之と關聯して、その苦兒院、救濟事業等に寄附をしてゐるものの氣持も、多くはさう云つた算盤珠から出てゐる場合が少くないのである。ともあれ支那は古から政府に賴れない所であり、不幸なる民も政府事業を當てにすることの出來ない所であるから、動機の如何など批許すべき段ではない。何れの方面からでも、救濟の實現が出來れば、それで結構なのである。救ひを求めてゐるものは、何の方面からでもよいのである。しかしその間下手をやると賣國奴呼ばりされたりすることがあるのではない。又それ程、新聞の發行部數は多く支那は、一般、世間が新聞によつて指導されてゐるのでなく、城内に田舍にとあらゆる方面に、その噂、流言の擴がる事が可なり多い。中にも、住民の生命財產に影響を及ぼす戰亂についての噂となると、殆んど



止みなく、次から次へと、傳はつて來る。昨今の支那世相は、南北各地とも、小康を得る事ですら容易にない。若し、それ大動亂の兆でもある事を耳にするといふと、忽ちに逃げ支度にとりかゝり、自分の身を守る用意をしようとする。その噂の前驅を爲す流言は、何れの地方民も馴れつこになつてゐて、餘り信用しなくなつてゐる。けれ共、一人傳へ、二人傳へ、三人、四人、と云ひ囃されて來るうちには、本當に信じられて來る。古の市虎三傳の流言と同じ樣に、實現性のあるものとされて來る。一大虛に吠え、萬犬實を傳ふ。すると住民はそろ〳〵本氣になつて家財を纏め、逃げ支度に取り掛かるやうになる。こゝに支那住民の移動生活の特徵が見出され、自分の身も何處へか行つてしまひ、居所を眩すことにもなるのである。

その主なき家の中には、何時しか乞食ともつかぬ變な人間が我が物顏に住み込んでゐるといふこともある。かう云つた假り住居振りが本ものになる實例は、南北諸地方で見出される。人の物も自分の物と云つた、共產氣分が無意識的に行はれてゐる事は、遠き昔から支那では、珍らしくないのである。本當の持ち主が二年目とか三年目とかに歸つて來ることもある。來て見て變な者が居ようと、別にたいして問題にもせず又その留守を失敬してゐた方の者も、別段謝りもせず、附近の空き家を求めて、いつしか又轉々として移つて行く。北平の城内トンタンバイロー（東單牌樓）の襤褸胡同（ビョウブホウトン）路上には、もと火の番の居た一坪餘りの厚煉瓦、上廓作りの小屋があつた。十年程前から

そこの火の番が居なくなつたのを幸ひに、乞食體の夫婦に子供幕しの細民が何時の間にかこゝに住み込み、年が年中、中に起臥し、老爺は晝間出掛け、夕方になると、歸つて來る。近所の者も知つてはゐるものの、餘り人相のよくない人間が往來の行人に氣持のわるい感じを與へてゐるので、どうにか片付けやうとしてゐるが、やつこさん達、出て行かうともしない。迂かり言葉でもかけると逆か撚ぢが來る。手のつけやうもないので、其の儘置いてある。昨今子供が大きくなつて、とても住みにく相ではあるが、永久我が物顏に、住めば都と思ひ込んでゐる樣子が見えてゐる。

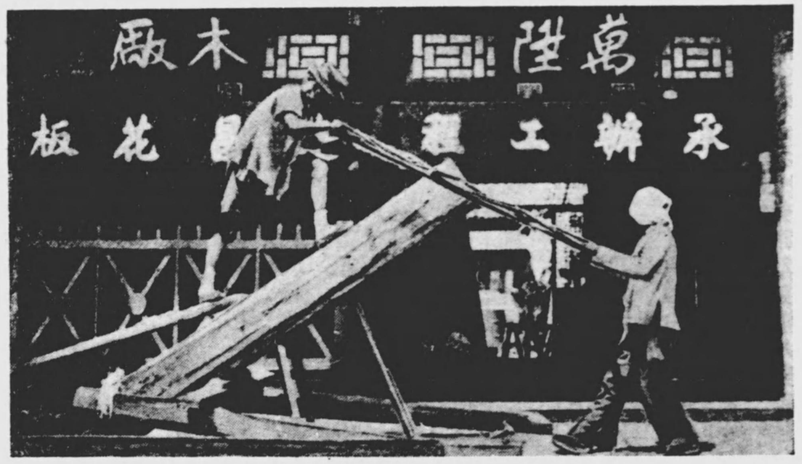
理窟はさて置きかやうに永年に亙つて根を下し、事實上、町内の總べての人から承認された形になつて仕舞ふと、火の番も何も這入られたものでない。全く皆から遠慮された形になつてしまふ。これは支那世相のある半面を物語るもので、一種の無意識的の侵略氣分がこゝに漲つて來る。けれ共どうにもならぬと云ふ所に支那の人の諦めの氣持が見え、それを誰れしも問題にしなくなる。そこに、大きいゆとりが見えるのである。

## 六十三、潛行的な努力振り

支那の世相は、面子を重んずるところから、その形による體裁を或る程度まで氣にする所があるが併しその實質の伴はない樣な見せ掛けをなし、その内容のまづさ加減を自ら暴露すると云ふ事はなるべく、避けるやうにしてゐる。之も都會人と田舍の人とで各〻特色を異にし、中には見え透いた嘘を並べて平氣でゐる者もあり、又中には絶對にお世辭など使はず、充實した内容そのもので、人にぶつかると云ふ者もある。

臺灣の南部、嘉義の田舍で、嘗て自分が東京に子弟を留學させてゐる家庭の父兄に集つてもらひ、一席共に語り談じようとする會合を催し、總督府の役人がその中間に立つて世話をして呉れてゐた。その時、田舍の百姓をしてゐた老父が、泥のついた青衣の仕事着物その儘で入場しようとしてゐた。すると係りの役人は、東京から見えた先生の前に出るに、餘り見つともないではないか。すぐ内へ行つて着換へて來なさい。君は何と云ふ名前か」などと官僚式を發揮してやつてゐた。すると老父は、その言葉に答へて「貴方が役人として、その制服でこゝに臨席してゐらるゝのに較べて、自分が百姓として百姓服を着けて出席するの






朝から晩まで稼ぎに稼ぐ木廠の木挽

は、何の不都合の點があるか。時間もなし、着替へて來ることはいたしませぬ」、と云つてゐる所へ丁度自分は降りて行つて、「少しも構はぬから這入りなさい」、と云つて呼び入れたことがあつた。その老人は、福建厦門系統の本島人で新港から來た陳某といふものであつた。が、その田夫としての態度を固執する所、そこには頗る頑固なやうな、しかし犯し難いものがある。形にこだはらないで中味充實本位で行く所に、その世相の裏が窺はれるのである。

支那の世相を社會政策の上から見るといふと、その小商人が金を持つ人の買ひ占めに對し、一矢を報ひた事や、或は茶館を利用しその大衆裁判をやつたところ、又田夫が内容充實主義で腰強く出る所など、何れも皆味ひのある話題であると思ふ。支那はいくら政府の方面のみ、力は振はず、國家統制が取れてゐないことがあつても、その事は爭へない事實であるとしても、その裏に、法治國の人に理解されない。又一種の社會政策的な、痛快な現象が行はれ、それに依つて世相の表裏が、無理の當らないやう、ちやんと調節されて行つてゐる。不統一の點だの、不平均の點だの、ぎごちない點だの、言ふ物は、どうにか、角が取り去られ、丸く納つて行くコッを見出す事が出來る。そこに支那の社會相の永續して行く唯一の途が開けてゐるのである。

支那世相の、之と反對に、最も著しく目に立つものは、軍人の跋扈である。實力ある軍隊統制者の振舞ひである。支那の交通大動脈をなしてゐるあの鐵路火車などにしても、その一度、兵亂に備へんが爲めの軍隊輸送、軍需品の輸送などいふことになると、普通旅客の方はバッタリ動けなくなる。地方軍閥、地方當路者の爲めには、肝腎の鐵路も私有物とされ、いくら外國借款で建造されてゐるようが、文句は挾まれない。實に絶對の力を持つて之が生殺與奪の權を振つてゐるかのやうに見える。其れ故支那の世相は、兵隊の動きを見、その動靜の如何によつては、如何樣にも見られ、感じられる。又その兵隊を輸送するに當つても、人數の多く車輛の足りない時には、無蓋車に立錐の地なき迄に立たせる位は未だしもの事、有蓋車の屋根の上に蟠居せしめ、その動搖の度に落下する者すらもあるかと案られる位である。その邊の、兵隊を取扱ふ無雜作な樣子は、言語で決して云ひ表はせないものがせある。人一人よりも、馬その他の家畜の方を、むしろ値あるものとして見てゐることは、こゝに云ふ迄もないことである。

四川の奥地でかつて兵營を訪ねた時のこと、綠樹の蔭に喇叭の音の聞こえてゐるので、石段を昇り側へ行つて見た。所が、兵隊達はそこらあたり地上にうねりくねりしてゐる老樹の根つこの上に、夫々思ひ思ひにゲートル姿のまゝ足を伸し、寢そべつて喇叭を吹いてゐるのであつた。晝寢半分、遊戲氣分で、その休みの時間を利用してゐたのか知らぬが、これ位呑ん氣な喇叭卒は天下に珍らしい方であらう、又田舍の旅に、兵隊を連れて歩いた時、腰に提燈、背に雨傘、肩に鐵砲と云つたいでたちで灰色の軍服に支那靴を穿いてゐたのである。山下を辿り行く時、峰のあたりに雷鳴を聞く、夕立を催

す。すると夫々携帯の傘を開き、自分は相合ひ傘で語り合つたのであつた。兵隊の云ふには、この制服は自分達自辨である。鐵砲はわざわざ貴方の護衞め爲に、倉庫から出して、夫々貸與されたものである。何にせよ、この軍服を濡らしては一大事であるのだから、と眞夏の午後の山路で斯様な話を打ち開けてしてくれてゐた。夜は提燈を灯し、畦道の危い所を注意して呉れる。そこに軍隊式と云ふよりか、人間味本位とでも云ふのであらう。支那の兵隊については、一にも、二にもその日本式の軍隊精神、軍人の本質、と云ふ建前から批評するならば、落第である。けれ共支那の社會の成り立ちや、國家の保證をして呉れてゐない事情、又住民自身の自治によらなければやつて行けぬところであることを前提とし、その國の兵隊として見るときには、最もよくその自分の生きる道を考へ、それに善處してゐるものでやむを得ないことであらう。

それが國家的に見て有效であるや、否やのことは、自ら別問題となつて來る。むしろ軍人を離れての一般人民、一般生活者と云ふ、大きい考へ方から之を見たはうがよからう。

以上述べた所は、何れも支那國内に於ける世相の表裏を示したものである。更に海外に進展してゐる所謂華僑達の方面から、支那本國を振り返つて見て來ると、勿論その外の文明國に對して、支那は色々の點で物足りない所のあるところとして見られ、海外の都會、開港地を歩くにも支那服を着て歩くのは、肩身が狹い位に思つてゐる支那紳士も多いのである。國内でこそは、世相の表裏を嚙み分け



巧みにまた面白く游泳し來たり、三千年の文化生活を發展させて來てゐるその點の誇りは多分に持つてゐる。ところが、何分にもそとに出ると、肩身が狹い。國と國との比較、實力の比較、統制力の强弱等を較べて來ると、益々その感を深くする、と云つた見解を多くの在外支那紳士は持つてゐる。だから日本に渡來する者も、始めから行季、鞄の中に支那服は入れて來ない。たとひ入れて來ても我が家の室内で着るのみ。戸外の散歩には洋服か又は和服姿。かやうなわけで、海外にあつて、支那時局とこの事態を顧る時には、如何にして中華民國の向上發展が期待さるべきか、考へて見れば見るほど心ある者はこの熱に燃えないわけには行かないのである。けれ共、志はいくら高遠であつても、實際には未だ未だ、一般がかなり低い。また必ずしもそう低いわけでもないが、國士が廣きに失し、地方地方の利害が年中、衝突してゐて、少しも足並みが揃はない。いくら何でも歐洲聯盟の舞臺であまり自國に統制力のあるやうなことは云つてもゐられぬ。實力ある國家の體裁を金看板に、宣傳だけはしてゐても、そのあとから來る電報、來る電報は領袖群雄の峰起、統制の不始末を物語らないものはない。外國の人からは、左なきだに不統制の國だとのみ、頭ごなしに相場を決められ、口惜しい感じもしてゐるのである。併し國家内部のごた〳〵は、支那としては却つて隨所隨所に大きなマーケットを開き、之を中心としての軍略的渦巻きを起し、こゝに一大商取引のあらはれでもあるかの如く見て置けばよいのである。軍人精神に基づく兵亂ではなく、地方の騙引、商取引を擴大しただけのもの、

之に飛行機だの、機關銃だの、鳴物が這入つてゐる仕事に過ぎない。海外に出てゐる支那の人々は、國内にゐる四億の住民達よりも、一段深刻に、自國の世相の表裏がよく見透かされてゐる。又「支那は何處へ行く」と云ふ。大勢推移の方向をも知つてゐる。併し、それをどんなに知つてゐても、どうにもならないのが、現代の支那の實狀である。諦めたくないのはこの中國の國内事情である。その諦めざるを得ない所を、終局の落ちつき場所としてゐるわけである。そこに國民としてゞなく、支那の社會人として、又支那民族として、或は又支那商取引の一員として、自己の生活振りを堅實なものにし、自ら築き上げたその地盤に愈々榮えんと努力する所、この努力こそは支那世相の表裏を貫いてゐる人心の機微の現はれであると見られるであらう。



# 十二、支那軍閥と政客

## 六十四、文弱を蘇生せしむるには

支那は、古來の歴史から見ても、又現在の支那の情勢から見ても、色々見方があるが、何を云つたつて、兵力、武力が國内を支へる第一の大柱となつてゐる。武力防備の充實してゐない時代は、いつでもその虚に乘せられ、その政權が他人に奪はれ、その政治は治者の手から離れて行く、これは動かすべからざる事實である。その癖支那では

ハウテイエープターテイン（好鐵不打釘）

ハウレンプータンピン（好人不當兵）

と云へる譬もある位で、よい鐵は釘なんかに、せられず、よい人は兵隊なんかにならない。どうせやり場のない、仕方なしの人間が、兵隊なんかになるのだと云ふ。甚だ武人を貶した言葉ではあるが、これ程迄に武人となる事をよく云つてゐないのである。古來文武などと云はれてゐる位に、文を第一とし武はその次に見られてゐる。恐らく支那では文筆の方を尊び、文學の才能の秀でた者が、國家で

動亂恐ろしと上海目指しあつまる避難民

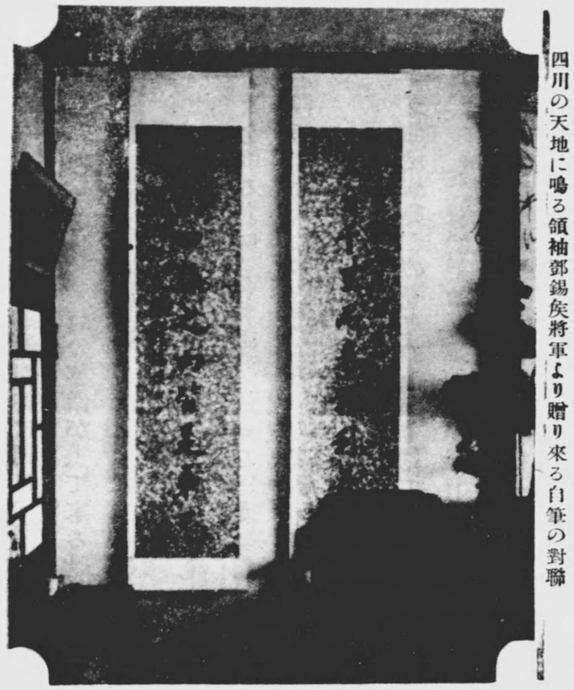
重要視せられてゐる事實を多く認める。併し一方から見ると、學者を坑にして殺したり、又詩文の道に懸命の努力を拂はせ、高位高官に昇らせ、その生涯を文字の事に沒頭せしめ之を又最高の名譽と思はしめ、遂に人間として、ひからびた、去勢狀態にして仕舞ふ政策を取つた帝王すらも尠くない。人間といふものは位、人臣を極め、無上の名譽と、無上の待遇を與へられると、そこで自己滿足を起し、事實上の催眠狀態にかゝつてしまふ。決してその間、兵を養ひ、武を練り、君の位を奪ひ取らうなどと云ふ氣持にはならなくなるのである。武を卑しみ、文を尊ぶ所以も、そこのところの安全第一主義から出てゐる、歷史上の事實も亦こゝから出てゐる例が尠くない。

支那の武力、軍隊の力は、歷史の上からは、文を離れ、別に見られなくてはならぬ。一方に文が重要視せられ尊ばれると同時に、或はそれ以上、武力の方には重くきび〳〵した所がなければならぬ。王朝の將に衰へんとするや、文武百官は多く文弱に流れ、飽食暖衣に走り酒池肉林に溺れ、尾大振るはなくなる。その時、長城以北の沙漠地から、又東北の邊境から、武力萬能の英傑が出て來る。多くは、馬上で天下を取り、眼に一丁字こそ無けれ、天下國家を料理する計畫を立てようとする。そして筆の人間、料理の人間、美術の人間と色々左右に呼び寄せ、之をして文物政務のことに參與せしむる。かう云つた不世出の辣腕を振ふ者は、多くは馬上で天下を取る者に求める事が出來る。漢の匈奴にしろ、その外、歷朝の太祖太宗たちにしろ、その鼻祖と仰がれる者は多くは草分けの武辨馬賊、綠林出の樣な程度の者であつた。惡く云ふ譯ではないが、かう云つた荒削りの者の間に、眞に肉躍り腕鳴る的のきび〳〵した英傑が出る。それ故馬賊必ずしも、支那民族興亡の歷史の上から見て、捨てた者でもなく、その漸く文弱に流れ亡びんとする危機一髪の際に、食鹽注射で苦しい蘇生の閃きを現はし、奮起して來るものゝあるのは主としてこゝである。こゝに支那の武人、兵隊に對して一風變つた觀察が出來るのである。

## 六十五、武備ある者は文備あり

支那の武人、兵隊は多く文字も碌すつぽ知らず、書は以て姓名を記すに足るなどと云つた項羽の如きを始めとし、何れも武辨一點張りの者が多い。熊公、八公の連中であるのだから、字を知らぬは當然である。昔から、男兒字を識るは憂患の始めと云はれてゐる位で、字など知らないものの方が腕つ

節が強いと考へられてゐる。かう云つた出身であつてこそ、いざ一方の將帥になり上つてゐても、まさかの時、事、志と違ひ、俄かに城門から都落ちして逃げ出さうと云ふ時、土方、苦力たちに變裝するの必要に迫られることもある。手兵五人、八人を苦力に變裝させ、主從諸共に相携へ、遠く難を避け落延びようとする如き場合には、どうしても昔の綠林時代の思ひ出そつくりで、その身を全うすることが出來ると云つたこともある。



四川の天地に鳴る領袖鄧錫侯將軍より贈り來る自筆の對聯

功成り名遂げた軍閥上りの人物が、いくら金が出來て、都に出で、餘生を租界に送るなど云ふ時であつても、常にその最初の出身常時の事は忘れられない。それであつてこそ、萬里の野に三軍を叱咤することが出來、又その萬卒に對する同情の氣持も起る。一將功成り萬骨枯るなどと思はせてはならぬ。こゝに支那軍人の成功の秘訣が潛んでゐる。支那の名將數ある中に、日本人の人氣を集めてゐたあの吳佩孚將軍の如きは、その河南洛陽に都してゐる當時、師を迎へて左傳を研究し、詩經を讀み、その古典的文學の修養は怠らなかつた。又四川上游で劉文輝が自分の船に遊びに見えたとき、青山文存の餘白に自ら筆を取り風懷を書してゐたり、或は同じく鄧錫侯が自分の爲めに、立派な筆跡で自ら聯を書いて贈つてくれたりなど、その武人にして而かも趣味あり、文筆の事に相當用意のある者の多いのは、意外とする所であつた。武備ある者は又必ず一方に文事の嗜みを有してゐる。こは古來よく見るところである。かの孫傳芳のごときは、會つて話して見ると、昔の督軍と云つた感じよりも、文學者的の色彩が濃厚である。その話すことにも、味ひのある古人の句などが續發する。今日南京政府で高官を占めてゐる連中も、三軍を叱咤すると同時に、又あの柔かい羊毛の長鋒を巧みにこなし、醉後雲龍を馭く名筆を揮ひ得る者が尠くない。それ故支那は、古來武辨一點張りの武人にした所で、流石は文の國丈に、その間文筆の素養を心掛けてゐる文化人が相應にゐるのである。見方によつては支那は文化の國、文の國であつて、それが身分、境遇によりたゞ姓名が書けなかつたと云ふだけのことかも知れない。一方に掠奪、破壞を試み、城門を破り、地方住民のなめる塗炭の苦しみを物ともせぬ、殘虐至極な修羅場を演出するものもあるかと思ふと、半面には又頗る優しい所を發揮してゐるものがある。北支、掠奪、殺人至らざるなき城内の一角に、逃げ遲れたかみさんの姿がひよつくり現れる。之を薙ぎ倒さんとする所へ十二三の可憐の女兒が現はれて來る。そして銃口の前に立ち、おつ母さんを殺すならわたしを

身代りにと、涙ながらにいちらしい聲して嘆願する。流石の鬼の如き兵隊も、之には振り上げた腕の力が弛んだとか云ふ話もある。その邊の支那兵に關する挿話を見ると、同じ支那兵と云ふうちにも色色の氣分の見られるものがある。必ずしも一般人の考へてゐる如き者ではない。更に眼界をひろげ中原の天地を眺めんか。南京中山陵の石段の上に立つて、長江を下に中原の曠野を眺め萬里の國土を觀じ來る時、胸に三千年の戰爭史の印象が去來し、感慨無量なるものがあるのである。そのうちに、支那は果して文の國か、將た武の國か、逝く者は逝き、滅びる者は滅び、すべて治亂興亡の跡は雲烟糢糊の間に消え、たゞその多少の樓臺烟雨の中と、云つた詩的感じ以外には何物もないのである。

併し、支那の軍人にした所で、上にも述べたやうに總べてを自己の經濟生活と自己の幸福の爲め、又その時の大勢に順應せんとする心がけだけと云ふ、支那式の建前からして動いてゐる者が多いのである。從つて、城を枕に討死するなどと云ふよりか、成るべく妥協を講じて密使を取り交し、或は飛行通信で以て双方の商取引を行ひ、双方に利益のあるやうに丸く納め、出來れば劇的場面を演じやうとする氣分が濃厚に見える。これ又他の民族にあまり見られない所である。支那の戰爭は、外人の力を借りて、科學的の設備をなしてゐる砲臺、又飛行機隊、銃器、彈藥などのうちにその特色と見るべきものがある。然し本來は、科學を超越し、文學的な又人間味本位になる妥協戰爭が多い。時には、始めから交涉談判の方を主とし、賠償金いくらときめておいて、戰はずして勝つといふ孫子吳子の兵法によつてゐる。開戰になる筈の時局が、素人目には噂のみで、有耶無耶にすんだなど云ふことが屢々ある。敵兵を偵察しに行つても、十萬と號したり、味方の軍勢を他へ宣傳せんとするにも百萬と號したり、白髮三千丈式の唐詩の句を引用したりなどする。その邊の支那の軍事報道や又號外などには獨特の味ひが見出されて面白いところがある。

中國の首都南京城内の鼓樓

## 六十六、支那の戰爭は商取引の變形のみ

支那の世相は、萬事が經濟生活本位に出來てゐるが爲、國家主義だとか、政府萬能主義だとか云つた考へは殆ど支那には適用が難かしい。それよりかその地方の自治自營、又個人的の運動、立場、從來の關係情實などの方面からすべてが割り出されてゐる。いくら軍隊が國家の爲に使用せられてゐるべきだとか云つても、大局が我に不利になるときは、その動員をすぐ差し控へる。こは支那兵は軍政部にて、その國費

を以て養つてゐるといつても、それよりか自己の勢力範圍の軍資金によつて、賄つてゐるわけなのであるからどうにでもなる。殆ど掌中に弄ぶ如く、全く將棋の駒を置き換へる如く、無雜作にうごかせるのである。それ故に之を職業にしてゐる兵隊共のことゝして、給料になればこそ動きもする。若し國際間の體面から見て兵を動かすことは感心しないとしても、この絶好の機會に軍隊を進め、例へば北平の都へ指して美名の下に隱れ、我軍を入城せしめた方が得であり、それが同時に相手の手薄につてゐる虛に乘ずることにもなるのであるならば必ずやるのである。見定めさへついたならば、直ちに動員令を出して成り込む。その實際に、國家としての體面が、聯盟の舞臺にどう響かうと、それは聯盟に關心を持つ南京要路の大官たちの都合の上からのみ立てられる見方であつて、地方領袖の關知する所ではないと見る。何よりも大切なるこの絶好の時機を外すことは一大事だと許り集中にこれ努めるのである。いつもこの式に殆んど國家的立場のことなどは考へられても居らず、殊に若し强ひて之を中央から制肘でもしようとすれば、後で恐ろしい要求が來て、結局双方立ち行かぬこととともなる恐れがある。自分で食はせてゐる我が軍隊を、我が方寸の下に動かすに、何の遠慮が要らうか、と云つた傍若無人振りの心理作用が働いて來るのである。まして平素、中央から幾許の軍資金の足しも出て居るわけでない、と云ふ如き場合には、益々鼻息も荒く手のつけやうがなくなる。こは山東方面に於ける、軍閥系の動員振りの一つの現はれについて述べたに過ぎないのであるが、熱河問題について



も之を旗印として、あちらからもこちらからも所謂義軍參謀連は、一度その入城さへしたならば言を左右に託して、引き揚げようなどといふことはしない。他人に厄介にならず、自分で動き得る軍隊は、國家統制の下に納まつてゐず、全然足並の違つた行動を取つてゐるのである。こゝに支那地方軍閥に對する中央の惱みがあるわけである。中央の地方に對する惱みは山東方面ばかりでなく、何れの方面に對しても同じことである。

世界諸國の支那を見る眼は、これだからすぐ支那は自分に統制する實力がないのだなどゝ、簡單に評せんとする。實力がないと云へばないとも云へるが、山東に、山西に、河南に、又國境を越えて熱河にと、北平を中心に夫々領袖群雄が、幾十萬の兵を擁して虎視耽々、互にその隙を狙ひ合つてゐる形勢である。無論皆その月々の給料の支拂はれてゐる譯でもあるまいが、之を中央政府が一々賄つて行くことは迚も出來た話でない。國寶美術品を擔保に外國借款を起し、假りにそのかねの流用が出來たとしても、つまりは燒石に水、何の足しにもなるものでない。殊に表面の兵數はどつさり書き上げられてはゐるが、軍費の支拂はれてゐる實際の員數はいつもその三分の一にも足りないと云ふ樣な內情も曝露して來て、一體何處らが實數であるのか押へ處がない。

支那は常に斯うした商取引、騙引同然の鞘取りが行はれたり、又着服があつたり、それかと思ふと半年以上も給料不渡りと云つた事もあつたり、その間の軍費の數字は、常に文學的であつて、簿記的

であることは滅多にない。それ丈に國家統制の下に、他人の領袖の兵を賄ふなどは、半ばはどぶの中に捨てる位の太つ腹と、無駄錢を投ずるつもりでなければ難かしいのである。第一は人の問題、信用の問題、第二は金の問題これである。いくら外國の學者、記者たちがその無統制を槍玉に擧げて見た所で、支那の實體ばかりは理窟では動かぬ。法律でも動かぬ。挺でも動かぬ。眞の軍閥内部の實狀の知れてゐる者には、他人の批評など空論の如くにしか見えぬ。その土匪討伐に當つて、いくら砲彈兵數を差し向けて見たつて、隊長がインチキをやつて、之をその頭目に賣りつけ、以下皆その分け前に與かり着服しようと云ふ腹でゐる時には、いづれの時にか土匪が砲門彈藥に窮して降參して來ることがあらうか。そこらは全く敵か味方か、味方か敵か、離合集散は支那軍隊の常道であり、味ひのある經濟生活の歩み方でもあると斯やうに、支那の軍部内部は穿つた味方をしてゐる。その腹で双方互に共鳴し合ひ、月下に酒を飲み談じ合つてゐると見てよい。廣い支那のこととて軍規肅正といふ眞地目な考へを持つてゐる志士も、固より多い事とは思ふ、皆が皆、軍隊を商人の固まりだと見て居る譯でもない。けれ共、その從軍遠征の始めの考へ方が、命を捨てるなどいふ考へではなく、收入を目的とした日傭人根性に過ぎないのである。支那の軍閥、或は三民主義に基く軍人の行動といふものは、一種の支那式の頭で以て解釋しなければ要領は得られない。日本の軍人のやうに、殉國の精神で滿たされてゐるわけではない。國家統制は支那軍隊にもと〳〵離るべからざるものとして、判斷する如き事は、支那の實狀を認識してゐる者の頭にはどうしたつて理解されないことである。何處までも支那の軍隊と、支那の戰爭とは。全國土を一大市場としての取引驅引の行はれてゐる所であると見るのが、最も誤らない見方であると考へるのである。

## 六十七、共産軍と政客

支那の政客とは、所謂讀書人中の、或は朋黨を組んでゐる者、又それに絲を引く者、及び軍閥系統の大小各種の流れを汲んだ登場人物。先づこの邊のものが主としてその構成要素となつてゐる。讀書人中には、近來の學校出身者、洋行歸り、日本留學生など、政客の分子はこれまた複雜多樣である。從來、或は安福派と稱し又直隷派と稱し、或は西山派と稱し、又浙江閥、廣東閥など、その夫々日本の薩、長、土、肥の從來重く見られてゐたと同じやうに之が一種の眼を以てその黨派が見られてゐた。然し今日は中國國民黨の一黨のみで他黨の存在は許されてゐない。でも、然し宛ら他の方面で、山西省から銀行家、金貸業者を產み、福建省から海軍水師を生み出してゐる特色のあ

馮玉祥の照像

ると同じことで、夫々また地方的に政界の惑星を出してゐる處は尠くない。嘗ては湖南から、又安徽から、屈指の政治家を出し、又山東から軍閥的政客を出してゐたが、今は蔣介石を始め浙江派が一等重きをなしてゐる。

支那最近に見る政客は、北方を別として、南方では、本來三民主義を金看板として立ち、浙江或は廣東の財閥を背景に、夫々拔くべからざる地盤を築き上げて來た。以前はロシアのボロヂンを擔ぎ上げて、廣東から國民革命軍を起し、湖南に道を進め、長江筋に出で、到る處、軍閥の打倒、共産主義の高調、貪官汚吏の剷除、土豪劣紳の剿絶、逆産の沒收等と何れも立派な標語の下に天下の耳目を惹きつけて來た。そして隨處に、共産氣分を漲らしめ、農民協會を作つては、大地主の田畑を沒收し、貧民をして土豪に楯つかせるべく、煽動したりなどしたこともあつた。その爲め、長江方面では耕農の事に安んずるものなく、田園將に荒れなんとすと云つた物凄い光景まで呈したのは一に、從來各地に多數を占めてゐた細民百姓達が、その慘めな小作の狀態、水飮百姓から、一躍して氣樂な生活に移る事が出來ると思ひ、生き甲斐のある農民生活が出來るものだと云ふので、誰れも彼れも響の物に應ずるが如く、その標語に憧れ、土豪を倒し、天下を風靡したがためであつた。中には漢口、武昌、地方では、錢莊、兩替屋の主人などで百萬圓の財産のあつたのを逆産の名によつて沒收し、おまけに主人の身柄は人質として連れて行き、衰れな最後を遂げさせた者もある。又戲曲に、文學に、說文に、



占ひにと多方面に亙つて造詣の深かつた學者、葉德輝翁の如きは、その藏書幾十萬卷を危險に曝し、身柄は長沙の城外仕置場に磔にせられ、心臟へ向つて三發、はかなくもこれ亦逆産の罪名によつて銃殺、湖南の露と消え果てた。東京上野谷中の寺で、我々、翁を知るもの同志、白岩龍平、鹽谷溫諸大人、始め何れも翁の筆跡を持ちより、相集つて心許りの追悼會を催したのであつた。こは近年珍らしい催しではあつたが、その當時、その遺族に慰問の電文でも送らうとの話も出たが、併し若しや人があつて苟しくもその遺族にして、日本人に憫みを乞ひ、小細工でもしてゐるかの如く思はしむる事でもあれば、遺族が又殺戮されるであらうとの遠き慮りも生じ、遂に打電は見合せることにしたのであつた。その革命軍の長江沿岸に出た當時の鼻息と云つたらとても言語同斷のわけであつた。

その後國民政府は、武漢の天地に一中心を、又南京城内に、他の中心を置き、兩者互に相哇み合ひ、對立してゐた事もあつた。その間例のボロヂンは政府顧問として漢口に在り、そのバンドを歩いてゐる姿など見たことがあつた。が星移り形勢變るにつれて、兎角南京、武漢の間には風雲暗澹、やがて蔣介石獨裁の力で以て、政治の中心は南京の方に移り、その上、まもなく北伐の大業をも完成し、北支那の天地を席卷するに至つた。當時滿洲の天地までも遂にその三民主義を奉ぜしめ、青天白日旗をゆがみなりにも掲げさせると云ふ、隆々昇天の勢を示すに至つたのであつた。此處に於てか、人も知る如く、一時は全國土に三民主義の文字がポスターとして壁に、柱に、到る處に讀まれ、青天白日

旗は、各主要都市に、又輪船の甲板にと掲げられるに至つた。

南京中央政府は、その浙江財閥による財源を背景に、客と意見の衝突、その外種々な複雑した經緯のあつてから、廣東系の政客と衝突を來たし、幾度か政治的悶着を起し、將に火花を散らさんとした事も一度や二度でなかつた。その常に南京の中央政府を盛り立てゝ行く丈でも容易でない所へさして、廣東系その他の份子を加へ、妥協的時局の收拾に力を致す事は可なりの骨であると見られる。ボロヂンは既に武漢政府時代最早やその必要の認められざるに至り、之を陸路ロシアに送り歸し、困つた時の神頼みを喰はしたのであつた。爾來中央集權を目標としてこゝに年あり、浙江に、江蘇に、その他、安徽に江西に、福建にと元の孫傳芳が五省聯盟總司令として有つてゐた當時の領域に加へて、北に、西に、南にとその支配下の土地を擴張する事に汲々としてゐる。けれども事實上は、纔かに江浙の二省でそれ以外に幾らも手が出ず、福建に安徽に江西にと云つた三省は固より、或は湖南、湖北迄にも近來はソヴイエトロシアの赤い魔の手が伸び來り、江西南昌にはロシア直通の航空路が開かれ、安徽から福建かけての奥地には、ソヴイエトロシアの出張部落があちこちにと出來、南部福建の海岸には、ロシアの銃器彈藥が入れられると云つた狀勢で、今や中部支那の主要部は悉く赤化の自治領土となり、暗雲低迷し、蔣介石自ら大軍に將として武漢に、又江西にと、その赤化の心臓を衝くべく、討伐隊



を出したり、自ら出馬したりしてゐること、一再ならず出した討伐隊が、彈藥を敵に賣つて自ら寢返りを打つと云つた狀態を見せるに立ち至つた。こは始めに、共産黨を看板に自身廣東から打つて出たのであるから、云はゞ身から出た錆が今日全盛を極めんとしつゝあるの觀がある。むしろ中央政府にあつては此を思ひ彼を考ふるとき感慨無量なるものがあるのである。

## 六十八、南京政府と政局

今日の南京政府は、その背景として有する國民黨の一國一黨主義の下に構成せられ、天下に黨外黨を立てる事を禁じてゐる。その爲めに否でも應でも、口に治國平天下を唱へる者は、國民黨員でなくてはならず、政府に席を置く者も、又皆之に入黨し、その建前の下に、中央黨部として、又地方黨部として、政務に參與することになつてゐる。その政務は民族、民權、民生の三民主義の下に行政、司法、立法、監察、考試の五權に屬する役所の政務を務り、都市に又地方に夫々そ

蔣介石の照像

の系統的行政機關を設けてゐる。何れも孫中山の引き伸し寫眞を祀り、青天白日旗を掲げて、總理の遺訓を遵奉することに努めてゐる。別けても内政に、外交に、産業に、教育に、又交通に、衞生にと云つた方面には多大の努力を致し、此處數年間に夫々目醒しい成績を擧げ、着々革命の功を積みつゝある。

支那政局の實力のある處は、財政部なり、軍政部なりの實權を握る者と、互に手を取り、氣脈を通じて仕事をするにある。常にその政客の中心は、この中心の移動によつて、或は緊張し、或は弛緩する。時には南北の均衡が破れ、其處に政治的掛引の必要から時には接近し、總司令の名に對して副司令の名を與へ、さも弟分の如く待遇して見たり、それかと思ふと、腹の探り合ひ許りしてゐて、冷い掛引に變な態度を見せたり、一向その邊の足並、身の振り方が一定不易と云ふ譯に行つてゐない。常に微妙な對内的の動きと對外關係の必要から、その間に暗雲去來し、或は急に、又緩にと云つた風になる光景が見えてゐる。

支那を天下とする政界の雲行は、朝に夕に、猫の眼の如く、又走馬燈の如く、局面を變へて行く。その間に巧く機會を捉へ、自ら風雲に乘せんとする政客、或は領袖の代表と云へる者が、常に策動してゐる。中心人物の認めて代表の名を與へたものがあり、又根も無き自分免許の怪し氣な代表先生もあり、これ等が國内の要所要所に、又列國政界の渦巻きの中に、出入往復して、得意の辯舌を揮ひ、旅費以上のものを稼いでゐる。斯くの如くして支那政客の動きは、年が年中その局面と、登場人物とを變化させてゐる。さればもの〳〵半年も、政界から離れてゐたものは、取り殘されてしまふ。併し最惡の場面を好轉せしむる爲めにわざと亡命客となり、變裝して他人の名義で外國船に乘り、暫くその渦巻から離れ、惑星の如く或はフランスに、又ドイツに、チエコスロバキヤに、日本に、香港にと轉々、その處を更へてゐる如き者もあり、或は大連に別府にと云つた一ヶ所に、長く時期を狙つて亡命してゐる者もある。その時めける時には、三千の食客を養ひ贅澤な酒食に耽つてもゐられるが、その



宣傳ポスターに見る時代相

一度轗軻落魄するや我が身の廻りの手入れすらも出來ない落ちぶれ方をしてゐるものもある。人榮ゆれば爲に訪ふ門前の客は市をなしてゐるが、一度宰相を辭すれば訪ね來る人もなく、門前雀羅といふ悲哀を見ることは、唐人の詩にもよく味はれる通りである。

支那の政客くらゐ浮沈の激變のある生活は少い。時めく蔣介石の鄉里、浙江の奉化縣に行つて見ると、その寧波城外、南門外の取り擴げられ、新道路から、素晴らしい文化道路が開鑿せられ、今や寧波奉化間の路面は、往復の自働車、貨物自働車など頻々跡を斷たない。又、その奉化縣の城內山腹には、蔣介石の名に因む中正公園が設けられ、その新しい文化施設のうちに、于右仁の石刻の大文字なども見られ、その周圍遙かに山色、天に連なる風光明媚の光景を有してゐる。それだけに、一段の景觀を此處に見出すことが出來る。蔣介石の別莊、蔣介石の歸省の度に訪れる奉化縣中學校の校庭には勇ましげに浙江青年の蹴るフートボールが高く青天に揚つてゐる。校門に揭げられた白日旗の風に飜るのも何となく末賴もし氣に見られた。恐らく今の支那政客の中で廣東閥、浙江閥、各派軍閥を大觀して、蔣中正の如く、その政界に飛躍し、又文字通り飛行機で漢口に、江西に、鄉里に、と鳥の如く身輕く、又手輕く飛び動いてゐるものは他に多くあるまい。巡査の垣根まで作らなければ用心が惡く、帝都の一角から一步も出られないと云つた國土にゐて、支那政客の動きを見てゐると、その危險、その不安の渦卷きの中を、如何に氣輕るに、洒々落々と、スポーツ氣分で動



いてゐるかに一段と興深く感ずるのである。

支那政客が政治活動をなすには第一智謀に長けてゐなくてはならぬことは云ふを要しないことだが、更に宣傳の口號を巧みに利用せることである。かつてその一斑が察せられることだらうと思ふ。

一打倒背叛總理的中國共產黨
二打倒反對三民主義的中國共產黨
三打倒破壞國民革命的中國共產黨
四打倒破壞北伐的中國共產黨
五打倒利用土匪土賊壓迫農工的中國共產黨
六打倒侮蔑總理的中國共產黨
七打倒陰謀消滅國民黨之中國共產黨
八反對三民主義便是反革命
九反對國民黨便是反革命
十一切權力屬於中國民黨
十一眞正的國民黨同志團結起來

十二打倒一切反動派
十三打倒投機分子
十四鞏固國民黨黨權
十五打倒一切帝國主義
十六剷除貪官汚吏土豪劣紳
十七嚴防右傾分子
十八對國民黨罷工便是反革命
十九不受國民黨指揮的民衆便不是革命的民衆
以上



# 十三、支那の社交と外交

## 六十九、支那に見る對話術

支那の人は、その貧富の別なく、貴賤の差なく、何れも生れ乍らにして、格段の社交性に富んでゐる。そのよく語り、自ら我を說明し、我の主張を述べ立てると同時に、人を喜ばしめ、人を興味から反らせぬやうに惹きつけること。かう云ふ點には一種の魅力を持つてゐる。固より中には、人の前で借りて來た猫の如くをとなしく、遠慮勝ちにしてゐる者もあり、又人を食つたのもあり。又口數少く、ゐるか、ゐないか解らぬくらゐの者もある。けれ共概して多くは口の人、歡樂氣分を多分に有する人達である。固より讀書人、僧侶、その他軍人、文人、風人等の中には、見た所枯淡にして、かなり澁味の多い人も居る。必ずしも、口數が多くなく、併し何處となく含蓄のある所を仄めかしてゐるものも居る。又その特に全然無口であつて、靜かに扇を疊んでは落し、落としては開き、同じ事をそのかなめを中心に虛空に半圓を描きつゝ繰り返し、支那一流の扇扱ひをしてゐる者もある。又その靜かに膝の上で輕く團扇を使ひ、壁の一方をのみ默つて眺めてゐる者もある。

城内路次の日向に對話術練らろ上海南市

人は各々その癖があり、その人の習慣もあることであるが、併しその一度、心の琴線に觸るれば談論風發、滿座の客を相手に可なりはしやぐと云つたものが多い。こは支那の大家族生活の間におのづから養はれた子供の時からの習慣である。或は又茶館あたりに行つて友人と共に語り合つたり、又よく茶を啜り西瓜や南瓜の種子を噛りつゝ饒舌り續けてゐたりした習慣、その外色々の事から知らず識らずの間にその人の第二の天性を作り上げて來たその現れであると見られる。思ふに支那では、

第一、話題に豐富なる事、
第二、滑稽味を加味する事に巧みな事、
第三、話し言葉に古人の名句や、詩の句を挿入する事、
第四、滿座の顏色、心の中を讀み、直ちに話題の方向轉換を行ふ事、
第五、男女の別、老幼の相違、又教養の如何により話し振りを變へて行く事、
第六、朝に、晝に、晩に、その時刻に依る話題の撰び方を考へる事、
第七、その話の緒から轉じて更に一同を笑はせる痛快な話を切り出す事、
第八、全然物を云はなかつた客をして云はしむるやう、柔かく靜かに話題を持ち掛くる事、

かう云つた種々な談話術に依つて巧みに相手を操縱する。宴會の席でも、客室でも、車中、船中、如何なる場合でも、頗るまめ〳〵しく立ち廻るのである。あちらには口から先に生れたやうな人が多い。その言葉が全部聞き分けられるならばさぞかし、と思はれることもある。例へば、廣東人は廣東語で、厦門人は厦門語（泉州方言又は漳州方言）で、或は福州人は福州語でといつた風であり、尙、また溫州、寧波、上海、蘇州、無錫、宜興邊りにはそれ〴〵その方言を用ひ、又江北のコンポニン（江北人）は對岸の訛り音でやつてゐるのである。とてもその遊歷行脚の出先出先で、聞かされる方言音は、容易なことでは解らない。智識階級の人は、先づ大抵上海語の方は話せないで、北平語ばかりを語つて呉れる。これとても、其の人特有の發音で云ふものだから、ひどく耳ざわりになることがある。例へば、日本人と云ふ言葉にしても、トンヤンニン（東洋人）と云ふ者があり、又同じ日本人と云ふ事にしても

一、リーペンレン
二、ヅーペンニン

（日本人）

三、セツペンニン一

と云つた如き微妙な違ひがある。浙江湖州の人は第二のヅーペンニンをおきまりの發音としてゐる。この筆法で以て、同じ事を發音されてゐても、隨分感違ひをすることがある。が、併し幾度も繰り返し、ニコニコ顏で語り合つて吳れてゐるうちには、其の心が讀めて來る。つまり腹と腹との腹藝の言葉が双方に暖かく通じ合ふのである。其處で大體は嚙み分けられて來るのであるが、それも固より程度の問題である。

支那の社交の第一は、相手同志互にその惡人でない事、兇器を持たない事、一見舊知の如き直觀を與へる事、是れである。歐米で、挨拶の代りに右手をさし延べ、固く握手を交す習慣の出來たのは、その初め、手に何も武器を持つてゐない事を證明するのが抑もの起りであると云はれてゐる。が、支那では兩手を拱き、長き筒袖の中に納めた儘、ニコニコしながら上下に振るのである。併し良からぬ人は袖の中にピストルを隱し、引金に指をかけてゐるのだなどと脅かし、怖がらせる惡戲者もゐる。支那は歐米の社交舞臺とは違つて、支那獨特の行き方があるのである。言葉はよく話せるに越した事はないけれども心と心の交りの方が第一義であるとしなくてはならぬ。

## 七十、社交性の禮讃



支那の人は會へば必ず、すぐ倶に食事しようと云ふ事を口癖の如く云ふ。朝、人が訪ねて見えても、晝過ぎに見えても、チーフアンラマ（乞飯了麼）と云ふ挨拶をする。お早うの意味以外に何物も現はしてゐないのであるけれ共、その言は飯を濟ましたかといふことになる。人さへ見ればかう云つた挨拶をする。以てその如何に飯を食ふことが社交上重大な話題になつてゐるかが解る。又友達と道で會ひ、何か話してゐるうちに手をさし延べ、人さし指をピンと立て、一寸その人の顏を見ながらちよつと動かすことがある。つまり食指を動かすやり方なのである。こは飯を食ひに行かうと云ふ誘ひのしるしとなつてゐる。其の時默つてゐたり又頓珍漢の返事をしてはならぬ。兎も角、支那の社交には食ふ事が第一なのである。飲み且つ食らひ、壽にして而して康、と云ふことが、誰れしも無言の裏に實行せんとしてゐる大原則なのである。社交と云つて之に反對する者は世間に恐らく一人もあるまい。

支那の人は、その生きんが爲に社交に沒頭してゐる。社交と云

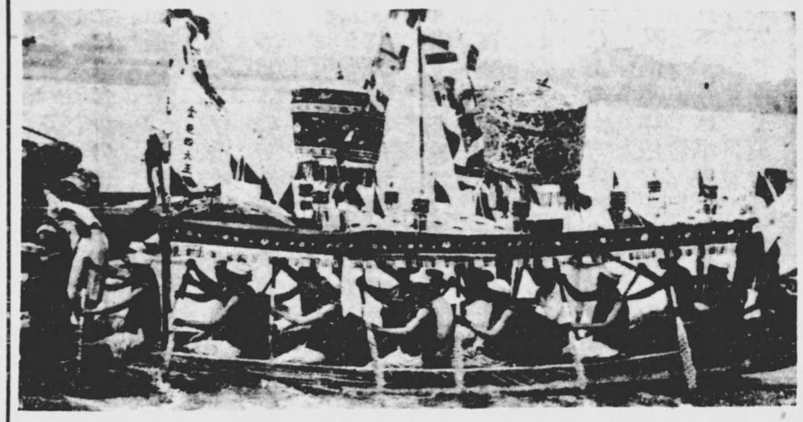
ふる挌、大衆料理の朗らかさ、江南所見

へば、飲み且つ食らふことの代名詞の如くになつてゐる。この飲み且つ食らふ事の止まる時は、卽ち死の時であると云つてもよいのである。これ程迄に社交は、支那人生活の生命ともなつてゐる。若し支那の社會から社交を取り去つたならば、實に殺風景なものとなる。社交の爲めには、如何なるものも犧牲にして惜しまない。學校を休んでも、社交に努め、出勤を遲刻しても、社交に義理を缺かないやうにする。連日連夜、社交に入り浸りになつてゐる役人、又青年達は、決して珍らしくない。社交の爲ならば人も許してくれる。實に社交なる哉！　社交！　誠に社交は、神聖なる人間渡世上の秘訣であると見られてゐる。從つて飲み且つ食らふ宴會は、社會人として、これは避くべからざる必要な手段方法と見られてゐるのである。

## 七十一、支那料理に見る社交

支那の料理は、宴會、社交の上に最も重要な役割りをなしてゐるものであるが、その到る處これが家庭料理として見られてゐる許りでなく、一般處生の上にも重く見られてゐる。たゞその必要條件として、費用が高く掛つては、自然とみな尻込みをする。成るべくその安價について、永く何時迄も續くやうな仕掛けになつてゐること、これが大切である。

と云ふのはいくら近代風の空氣が這入つて來ても、大體の宴會は、特殊の場合は別として、銘々がその會費を持ち寄ると云つた、切り刻んだ事はあちらでは行はれてゐない。その會の催し主、主人役になるものが無論始めからきりもり進行掛りをして料理人を選定し、材料を心配し、酒を撰び、宴席の場所、室内裝飾、設備萬端のことを勝手に定める。さうしてその全費用を、お供ぐるみで自ら引き受けるだけの覺悟が出來てゐる。それで、夫々招待狀を發する。無論その日取りだとか、主賓の外の陪席者の顏振れだの云ふことは、よく打ち合せの上之を定め、念の爲その人名迄をも招待狀に添えて持たせてやるくらゐにしてゐる。その用意周到なこと、慇懃な狀は、到れり盡せりである。宛ら日本の結婚の時の御招待がやゝ之に似てゐる。けれども、一層丁重な心持ちがそこに見られる。かう云つた宴席には、その催しの性質にもよるが、料理屋、菜館邊りの料理番任せにしないで、名門の料理番を特に願つてかりて來て調理させる。それがまた料理以上の御馳走ともなつてゐる。何にしても、來會者からは會費は取らない。その代りに招待を受けたうちの主



パイロン（扒龍）と呼び蘇州河上に見る福建人の船競爭、八月の盆勝會所見

賓なり、その他の人が、好機會を捉へて又一會催し、その前の主人公を始め、他の連中を招待する。之には多少の出入があり、新顔も加はるのである。斯くの如くして次から次へと、幾回かその系統の顔振れで、社交の集りが催されるのである。その間に、その席上では、その來會者の豫て贈り物として寄こした裝飾品であるとか、或は書畫の軸物、鉢植であるとかいふものがあると、忘れない樣に飾りつけるのである。又宴會の席には、細心の注意を拂ひ、主賓を中央の上席に、左に右に、互に成るべく話の合ふ人を見立て、しかも順序を失禮にならぬやうに定め、名札をつける。又卓上に運ばれる料理の紅燒鯉魚は、そのお頭を主賓の方へ向けて出させるとか、主賓の爲めに、或はその他の意味のある客の爲めにと、順次その名を呼び上げ、眼と眼を見合せて盃を擧げ、カンペイ（乾盃）と發音し、飲み乾すとかする。そのとき、勢よく盃の底を見せる。その間、盃を投げたり、渡したりすることは、しないのである。せいぜい席を立ち客の側に行つたり、主人自ら酒を勸むることはあるが、それも名前を呼んでボーイをして酒を注がせるのが普通のやうである。

又酒不調法な下戸にしたところで自分であまり飲めないものはそれを口に云はず、始めの一杯を受けて、後は卓の下で手をひろげ、左右に二三回靜かに振る丈でよい。それでその意味はよく解る。その客に酒を薦むる方法は古來最も妙を得てゐて、一等遠來の客が先づ一杯とか、齡最も高きもの先づ一杯、眉白き者先づ二杯と云つた式に、象牙の酒令の筒の中から、一本宛御神籤やうのものを振り落



しそしてその文字を讀み上げるのである。しまひには顏紅きもの先づ一杯、顏白き者なほ三杯などと云つて否でも、應でも酒を薦める。最後にはその籤の一度も當らなかつた者に一座の決議を以て更に大盃を煽らせるなど、その酒の薦め方の巧みなことは恐らく天下一品であると云へる。

酒令の行はるゝ間に、料理の山海珍味が續々と出る。その運び出さるゝ順序もよく、中央に置かれ、物珍らしき調理法の說明だの、それの歷史沿革だの、又食道樂の極を盡した話が出る。中にはそろそろおきまりのエロやグロも出て來る。白眉の老翁も、延命長壽の秘法、取つて置きの佳話などを今夕只可談風月とあつて、今夕は特別と許りぼつり〳〵語り出でる。醉仙は謹聽する。甘味の料理がそこへ運ばれて來ると、第一回目のおしまひとなり、長夜の宴では、第二回目に入る前に、二時間許り、中休みがある。その間、壁に掛けられた書畫を清鑑したり、扇面を拜見したり、書齋に入つて記念の畫帖に染筆したり、夫々持參した篆刻の印面を眺め、落款に押したりなどする。又月があれば、庭に出で、蘭花の香を稱し、一莖九花の苦心談などする文人もある。

かう云つた支那の宴席は、その社交の爲めか、飲み食ひの爲めか、何だかはつきりしなくなることもあるが、併し名刺の交換やら、その道の尊い體驗談を聞かして貰ふやらで、平素知り度いと思つてゐた事がそこで手に取る如く判る。その翌日名士の自邸へ呼ばれる約束が出來るやら、一夕參會した爲めに、それからそれへと枝がさき、長春の宵を十二分に味ふことが出來るのである。之が支那の

社交に見る支那式の宴席の場面なのである。固より近代式の都城、開港地あたりでは、ホテルの洋食を取る宴會もあるのであるが、この方はナイフとフォークの使ひ分けに、洋酒のとりどりが出たり、あとはダンスの夜會の幕があつたりするやうになるので、聊か勝手が違つてくる。併し英語、佛語ペラ〳〵の新人達は行く所として可ならざるはなく、夜會のドレスにダンスのステップもいと輕快に立ち廻つてゐる手合もある。かう云つた社交倶樂部の立ち廻り方、游泳術は、支那の人はこれまでに月謝を多く拂つてゐると見えて、可なり妙域に入つてゐる者がある。一晩に二つ、三つ、の會合へ巧く掛け持ちをして廻つてゐる先生もある。實にその社交にかけて熱心な事は驚く許りである。その物の云ひ方、歩きつき、話題の採り方、表情振り、すべて社交界切つてのこなし方をしてゐる者が尠くない。時にはミスター、ホーマーだの、ウエリントンクウ（顧維鈞）の如き、白人の名前を兼ね有する者もゐたりする位の中西式の近代人もゐる。恐らく、この社交方面は、日本よりも、一段うは手を行つてゐるかの如き感じのするのは、獨り語學の點ばかりではあるまいと考へる。

## 七十二、阿片に見る無我の境地

阿片は、又支那社交界の上に重大な役目を持ち、宴會が閉ぢられた後に出掛ける方面は、先づ大抵その想像がつく。こは支那政府の中央、及び地方の財源となつてゐる公然の秘密の代物であつて、しかもそは大衆に、又富豪階級に抜くべからざる牽引力を有し、支那民族の續く限り、恐らくこれと心中する者の絶えるといつたやうな時代は來ないであらう。その樓上に見る阿片窟（煙房）に、また柳暗花明の巷に見る煙館に、或は田舎の樓船に、又客棧にと、どこでも到るところ阿片の支度のしてない處はなく、少し念の入つた交渉を纏める如き場合、或は目的なく唯その趣味の上から互に心置きなく四方山話でもしようとする場合など、何れにしても、阿片の煙管に、豆ランプ、阿片膏、筐、などの阿片盆に飾られた七つ道具が、その媒介になつてゐることが多い。さればいくら、その値が高からうと、唯の煙草、酒類とは違つて、一段幽玄なる嗜好物として、この阿片ばかりは特に社交の上に重く見られてゐる譯である。いくら之

北平城内延命長壽の秘藥ゆたかな慶仁堂

に中毒しようと、又路上で行き倒れとならうと、構ふ所はない。こゝに阿片萬能の社交から見た一種動かすべからざる魅力を有してゐる。近代の青年は之を國恥行爲と見て、拒毒會なるものを組織し、之を撲滅する事に努力してゐる。けれ共、既に述べたる如く、こは到底實行は期せられない程になつてゐる。

阿片の趣味嗜好は又格別なもので、共に宿に泊し、又船に合ひ乘りする時、或は親友を訪ね共に語らふとする時などその設けられた阿片臺の上で打ち寛ぐときは誠になごやかな氣分になる。そのとき、その一人が既に指の爪も褐色に、相當中毒狀態に陷つてゐる者であると、時間を定めて必ず飮むのである。何はさて置き、その身體を横たへ、足をくの字に折り曲げ、高枕で煙管を手にし、阿片盆を引き寄せ、豆ランプを點じ、そろ〳〵ジー〳〵と音をさせ始める。こはその阿片膏を指頭で詰めるときの音である。詰めては燒き、燒いては焦す。その間に煙を吸のであるが、鯉の上飮する樣な恰好をし、さも滿足氣な顏して之を嗜む。その煙は窓の開かれてない煙室に渦を卷いて充滿し、何となく香ばしくて、油臭い一種の魅力を有してゐる。誠にこゝばかりは天下御免と云つた渦卷の雰圍氣をあらはすのである。寢臺を接して共に夜物語りに耽つてゐる時などは、殆んどその煙丈で以て醉はされてしまふ。時には新しくく之を煙管に詰めて客に薦めなどしたり、その御愛憎はよい。遠慮して辭退すると、煙管の口許を袖で拭き清め、心から饗す氣持で以て更に又之を客に薦める。斷り切れないで之をのむ者は忽ちにして佳境に入り、話の調子もよくなつて次から次へと話に又花が咲く事になる。

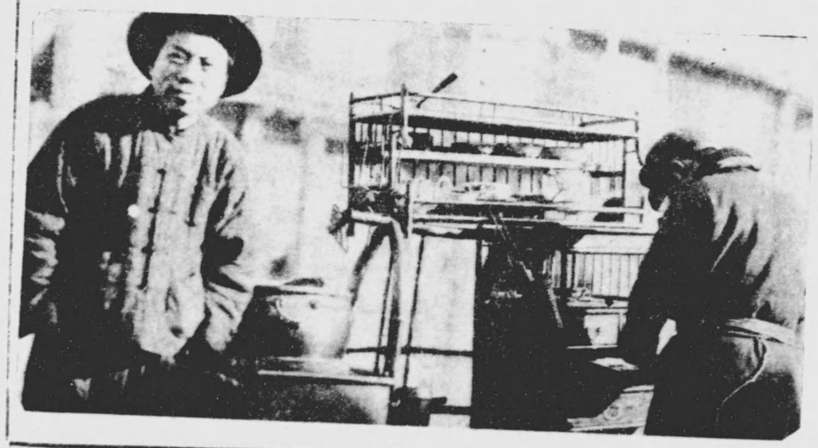
支那社交の裏には、酒食の外に、かうした支那獨特の秘境もある。之を時代に逆行した頭の古い社交法であり、國法に反した交際振りであるなどと見る者もあるが、今日の情勢では、他の物質的引力よりも、之にはまた思案の外の魅力が潛在し、國法も時代思潮も超越して、こゝに無我の境地に引つ張り込まなければ止まぬといふ力がある。しかも味覺の上に、又性的方面の上に、すべての理窟や、經費を超越して、こゝに淫せしむる神力があると見られる。この故に從來大官富豪の間にもこの天與の阿片を年中からだから離さず、國家を代表して、海外に派遣さるゝ重任を帶びた人物にしても、結局その行く先の國法が之を許さない事を云ひ草にして、つひに派遣の沙汰止みを見るに至つた實例すらもあるくらゐである。

## 七十三、芝居と賭博の社交振り

支那の社交には、またシーミ（戲迷）（芝居狂ひのこと）と云つて芝居道樂を中心に、年中芝居を外さず出掛けて行く手合がある。こは全くその道樂から始まつてゐる事ではあるが、支那の社交の上に著しい恰好な手段方法であると見られてゐる。南支北支共に、その一流の千兩役者が舞臺面に姿を現はして來る時刻は遲く、十一時過ぎになる。そこで、大抵宴會又その二次會を濟ませてから、車

を驅りて目指す劇場へと向ふ。芝居をダシにして、客を攀し、或は樂屋まで案内して役者の個人的紹介にまでも及ぶことがあり、その人によつては、名刺の交換をさせたり、贈答品の取り交し迄させたりすると云つた、極めて打ち込んだやり方をする事もある。北平に、又上海に、蘇州、杭州、漢口にと遊覽客の多い所では、殊にこのシーミの社交は流行してゐる。甚だしきは、始めて來た遠方の客を驛に迎へるなり、そのまだ西も東も解らぬ先生を行きなり乘り物に乘せて落付くところは綺羅びやかな劇場の入口であつた等と云ふ狐に摘まれたやうな持てなしをする變り者もゐる。言葉は解らないが、銅鑼や笛、胡弓で先づ耳と目の洗禮を受ける。花道もなく、舞臺の狹い所に、王冠嚴めしき紅綠の禮衣を着けた麥した文武百官の立ち並ぶ上演振りなど、日本のそれとは丸きり變つてゐるので、兎にも角にも強い印象をうけるのである。

支那の社交の上には、又殆んど習ひ性となつてゐる、賭博の遊びがある。南京あたりの一流旅館には、客室の壁に賭博阿片を禁



勝負事にかちワンタンの一杯にありつける百喰坊の領公



する意味の印刷物が貼られてゐるが、支那宿の客室と云へば固より遠來の客が久し振りに訪ね來る面會もあることであらう。又話の工合では、色々懷かしい舊友の落ち合ふ事もあるであらう。すると自然その間に麻雀その他の遊びが始まり、共に外出して榮館、酒樓に上り、又は風流な方面に乘り出しターツアウエー（打茶圍）（ひやかし）に出掛けることもきつとある。行つた先で、相手から麻雀を始めようなど都合の宜い挨拶を受けて、その儘入り浸りに夜の更け行くのも知らぬと云ふ場合もきつとある。

歡樂の前には國家なき、その社交振りに對して、何かと理窟を云ふのは野暮である。どうせ社交の限りを盡す以上は、かうなつたら痛快にやるべしだと、之繞をかけ、思ふ存分遊び抜く。さう云つた方面で、殆ど度を越し、理窟なしに、罪なく、このことに恥るのである。平素友の訪ね來る夕、或は船中、車中、何處であらうと、その場所は選ばない。隨分人込みの沿岸航路の輪船の中でも、夏の宵、燈下に八仙卓を圍み、夫々上半身裸體姿で二重顎の肥え太つた乘り合ひ客とも、流汗淋漓バイ（牌）をガチヤ〳〵交せ返し、次から次へと何時勝負が果てる事やら、殆んど夢中になつて打ちかゝつてゐるのを見る。元よりおほ平に銀の大洋を數多賭け、相當大きな勝負が續行されてゐるのではなく、純然たる罪なき社交手段と見られ、吳越同舟の客も、一見舊知の如く、その間にいくら運惡く負け續けても、又翌日勝てるだらうと云ふ望

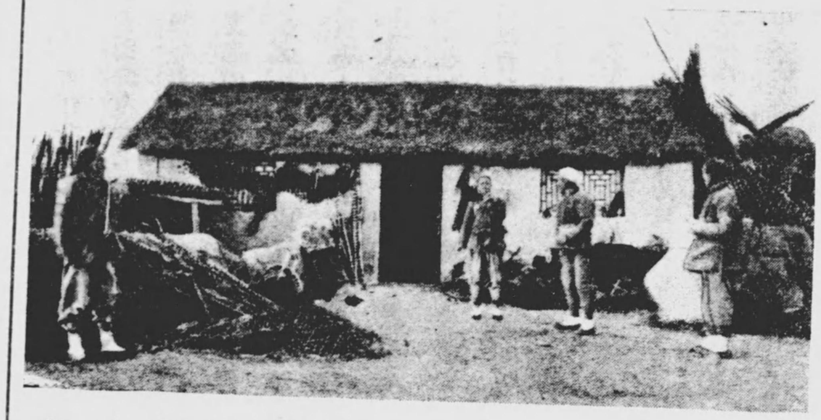
みを抱き、別に悲觀もしてゐないらしい。洒々落々〳〵、大損をしても、全然氣に留めてゐない。むしろその社交手段で、連日連夜、樂しき旅の出來たことを、自他共に感謝してゐるくらゐのものである。

賭博は、獨り世間的の社交の遊びである許りでなく、家庭にありても、一家團欒、母が中心に、姉妹弟兄など女子供の遊戲ともなり、それが、その種類の如何によらず、夫々相當の金を賭け、可なり眞劍になつて大聲を立て、勝負から勝負へと力を入れ、損得の計算をやつてゐることがある。どうだつて宜かりさうに思はれるところが、まさかに金を賭けて見ると、よい加減にしては置けないものと見える。數多のトンペイ（銅幣）（北平の銅子兒に當り、一錢銅貨に對する南支の方言）を夫々、掌に一列に並べ、之を十枚十枚と歯切れよく瞬くうちに投じ、卓上に積み重ねる。二百枚や三百枚は、鬼神の如く迅速に彈き出し、殆ど暗算同樣に數へそろへることが練習され、その點から云ふと、學校の算術や、教科書もいらない。かう云つた家庭の遊びが、懸命の閃めきによつて力を打ち込んだトンペイの打算法を熟達させてゐる。又その金の計算に當つては、かん高く姉を睨みつけスーコトンペイ（四個銅幣）、バーコトンペイ（八個銅幣）などとその金高を力說してゐる時の態度と云つたら見物である。一家團欒とは云へ、その勝負事ぐらゐに、あゝ迄して靑筋を立てゝ爭はなくともと思はれるが、その遠慮なく、自分を守る場面を擁護してゐる氣持は、いぢらしくも見える。併しこの訓練がやがて街で買物をしても、リンバウツオ（黃包車）（人力のこと）を値切るにしても、押し强くやり通さ



せる基を作つてゐることになる。されば行きなり支那の世相を見て、日本人あたりが根强く感ずる點を表面許りから觀察しないで、その幼少の頃から如何にきたはれてゐるか。我を守り我を主張するの力强い素地が養はれてあるかと云ふ事に注意しなければならぬのである。

支那の社交に見る勝負は、南洋の天地に於ては、之が桁外れの財的飛躍となり、世界の相場を狂はせるゴムの價格、或は砂糖、煙草、コーヒーなどの大々的買ひ占めとなり、或はその株の素晴らしい賣買ともなつてゐる。支那華僑が、首を縱に振ると、橫に振るとによつて、世界經濟界に波紋を與へる迄の恐ろしい力を有するに至つた。それ故勝負事は一面社交の爲とは云へ、つまるところは經財的方面のからくりにも應用せられ、一にまた自個の運命の開拓にも資せられることが多い。必ずしも學校教育など經なくとも、その一六勝負を巧みに操り、その學に、又その技術に、秀でた者が上を行き、まご〳〵してゐる者を後へに瞠若たらしめ、しかも土地家屋は云ふに及ばず、非常な產をなして、自家百年の大計を完成するに至る。現に今もかう云つた金持が、バタビアに、スラバヤに、又シンガポールに、ペナンに、バンコックに、ラングーンにと到る處に數へられてゐる。むしろかくの如くして支那國土內部よりも、海外にあつて財的雄飛をしてゐる者が著しく多い。これ等が貧困に身を起し、社交と妥協と理財の三手段により、かう迄目出度く仕上げて來たとは支那なればこそである。



飛行機の爆彈投下に時局を悲しむ河北の農夫

## 七十四、外交は輿論なり

支那の外交は、前に述べた社交の行き方を一段と擴大延長して考へれば、自ら推知せられるであらう。支那の外交は、史記の列傳に見えてゐるあの蘇秦張儀が合從連衡に飛躍し又暗躍したところから解る通り、いくらその時代が戰國時代であらうと、又今日の國際聯盟時代であらうと、少しも變るところはない。蘇秦張儀をして二千年後の今日に在らしめたならば、疑ひもなく、今日のウエリントン、クー（顧維鈞）の如く又王正廷、顏惠慶、施肇基、羅文漢、殷汝耕、諸人の如き、その立ち廻り方、その活躍振りを示すことであらう。又その今日のナイフとフォークの使ひ分け、ダンスホールのステップ、英佛語のペラ〳〵に、鯛、マグロの刺身、凡そ何の味でも理解してゐた事であらう。幾千年の世代を距てゝゐても、その邊のコツは少しも變る所はあるまい。その當時の六國の國際間は今日の民國を中心とせる英、米、日、露、佛、獨、その他の大小諸國間の關係と同樣の外交振りで、押して行ける譯である。その間の飛躍の原則に於ては、何等變る所はない。常にその自力の强弱如何に拘らず、又その實力の用意あるなしに拘らず、その大勢を指導してゐる背景を見出す事に敏にして、その眞に目的とする相手を制肘せんとするの手段に出てゐる。



こは原則的に支那幾千年來の傳統的外交術であつて、支那の外交舞臺に現れてゐる者はすべて百も之を承知してゐる。卽ち、以夷制夷の大原則を應用してゐる譯なのである。平たく云へば人の褌で相撲を取つてゐるわけで、こは武力のたいした用意はなくても、そのやり方、立ち廻り、運動、次第では立派に功を奏することが出來る。得意の辯舌、獨特の魅力、押しの强いこと、その何時迄も根氣のよい事、裏面に使ふものを使ふ事などその人間の弱點、あらゆる機微に觸れた心使ひからして、總掛りで以て兎も角やり上げる。つまり正々堂々の本陣を構へると云ふよりか、戸別訪問、勝手口の運動、泣き落し、御馳走政策、曰く、〇、曰く、〇、等、等、でとどのつまり外交の第一目的を達するのである。こゝに於てか、支那一流の外交飛躍は初期の目的を達する譯になるのであるが、こは他の列國あたりの常道としない違つた行き方であるが爲め、兎角何時もの手とは知りつゝも、つい〳〵その手に乘り、やられてしまふ傾向がある。又幾度でも根よく局面の打開に力め、結局は根が盡きて、持ちかけられた方でも諦らめ、まあ〳〵仕方ないわ、と云ふ所まで持つてゆく、たとひその外交が一

段落として芳ばしからぬ結末を見たとしても、其處に諦めの氣分を持つ者もゐるが、併し大勢を更に更に指導し、波瀾を有利に起して、他の外交ならざる、貿易その他の經濟問題で以て痛手を負はせようとする場合もかなりある。

支那一流の以夷制夷のやり方は、それと知つて仕舞へばそれ迄であるが、その間に何處迄もその主張の論點、金看板としては、一は對内的に、一は對外的に、まことに麗はしい又同情を惹く辭令が用ひられる。誰れからしてもその言葉を尻から異論を挾まれない丈の用意をして掛つてゐる。

由來支那の外交は、密使代表を派したり、或は宣傳ポスターを掲げたり、新聞政策を利用したり、要するに、辯舌と文章、この二つで行く。巧言令色至らざるなく、何時如何なる場合に遭遇しても、三千年來きたひに鍛はれた、又練りに練られた、この二つの手段で行く、支那外交の最も著しい特色はこゝに存してゐる。而して大勢如何ともなし難い大きな空氣を作つて仕舞ふ。こは支那外交の背景として、最も巧な、力強い、金城鐵壁である。その作り上げられた背景の波に乘つて順風に帆をかけ、第二の外交的手段をとらうとする。又一般民衆もその大勢に順應して之を眺め、又之に謳歌しようとする。斯やうにして、三民主義を强調する時は、猫も杓子も、その大勢に合流し、心の内では兎も角も、口にサンミンチウイ（三民主義）を唱へる。その三民とは内容が何を指してゐるかは知らない。唯御題目の如く之を唱へて、政府の金看板に調子を合せ、幸福に渡世しようと力める。同じやうに打倒帝國主義が行はれ、之が國内の輿論となると、その國論の大勢に順應し、誰れも彼れも亦之を口にする。腹にあつても無くても、之が自己を守り、伸び行く我の處世法であると見、同時に之がまた外交の標語ともなつて行く。無論三人五人と集つた時には、その群衆心理で益々熱を高めて行く。併し、單獨に日支兩國人が、卓を圍み、談笑し或は會食する如き場合には、さう云つた氣合はおくびにも出さない。殊に長年の親交ある者同志にあつては、心からの尊敬やら、又哀情を發揮するのみである。眞に心の友となり、或は細君を日本人から迎へてゐる如きもの〳〵場合には、氣まづい考へなど持つてゐる譯もない。けれ共、自分を除く他のあらゆる環境が惡化して來て、如何ともなし難く、四面楚歌の聲となつて來た場合には沈默を守つてしまふ。

嘗て、上海日清公司の買辨をしてゐた、白龍山人王一亭翁は浙江出身丈に、幾百幾千の船員乘組みの世話もし、食べさせても居た、德の高い珍らしい人格者であつた。年來書畫をよくし、吳昌碩翁を友として、文人の聞えも高く、又佛書佛事に熱心な菜食論者でもある。上海城内老梓樹の下に梓園を設け、これに君子人の生活をしてゐる。日本人に特に交り深く、その交友の範圍は廣い。事實上日支兩國の有識者間に橋渡しとなつてゐた有力な國民外交家でもある。國際奉仕の事に自ら犧牲となつて居たこと多年、然るに最近日支の間に暗雲棚引き日清汽船の内航も思はしくなくなり、船客、積み荷の方も、日一日と無くなり、その上、排日排貨の宣傳と輿論が高まつて來た。王翁系統の、船に、

又碼頭に働き稼ぐ數多の浙江出の手合は、すべてこの時局に禍されて止めたとなつたら忽ちに糊口の途にも窮するわけで、事態頗る重大となつた。こは一つに皆我が日の丸の國旗の掲げられた船に從事してゐるが爲である。時局は益々急を告げ切迫し、日支間には一大事變が捲き起される事となり、王一亭翁の身邊は頗る危險に迫つて來た。脅迫が來る、刻一刻と公司に安坐して居られなくなつた。その輿論の雰圍氣は、つひに、翁をして公司から手を切らざるを得ざるに至らしめた。

王翁はその心中を披瀝しての言葉に、「自分一人が日清公司から手を引くのは何でもない。幾千の船關係の仕事に從つてゐる同鄉出身の老若が、忽ち自分と共に手を引けば、明日の日から路途に迷ふことになる。衆口を糊させやうとするには、この際自分は殺されても公司から引く譯に行かぬ。」と肺腑をついた力強いその涙ある言葉が出たのであつた。が、非常時の民國の現狀に對して、なに生暖いことを云ふか、城内の梓園を燒き拂つてしまふの、家族を鏖殺するの、と流言日に迫り、遂に止むなく、心ならずもその悲壯な大勢に引ずられ、順應するの態度を取らざるを得なくなつた。平素親交のある自分共から見ても、まことに翁の意中は察するに餘りあることである。令息王傳燾君の文人書は、嘗て、東京上野の日華展に陳列され、宮内省御買上げと迄なつた名譽を擔つてゐる。日支國民外交の方面にあつては、北方の故金紹城、周慶祥翁などと共に重きをなせる一人であつて、日支双方の心ある人は共にその心事に深く同情してゐる譯である。けれ共最早や、大勢が斯くまでのぼせ切つて仕舞つた以上は、また如何共なし難い。支那は支那としての申し分もあらう。併し國境を越えての個人的親交、文人的交りは時局などに煩はれさる事なく、在京中華民國公使館、江洪杰、楊雪倫、兩人をはじめ、各員どもは國民外交の意味に於ての氣持に何等變るところがない。そのよその雰圍氣がどうあらうとびくともしない。又かう云つた所に、平素ラオポンユー（老朋友）としての親みがあるのである。元の汪永寶公使の如きも、學者文人としての親交があり、何等氣持の上に互に蟠りのある人ではなかつた。



## 七十五、笑つて答へず心自ら閑なり

日支の局面は時の勢で暗雲低迷する事はあらう共、やがてその雲の霽れるときが來る。もとこれ一身同體の兩國、何れが頭、何れが心臟、共に調和し、共に同一血管と神經によつて世界の舞臺に乘り出し、平和なる生活の增進に務めなければならない。

茶腕つぐカスガイ止めも心おのづから長閑かなり

ぬ運命になつてゐる。併し支那の人に云はせると、日支兩國人が共に卓を圍み、會飮すると、日本人は常に口に親善、共存共榮を繰り返す。最早やさう云つたテーブルスピイチは耳にタコの出來る程聞いたなどと、奥歯に物の挾まつた言ひ方をしてゐるわけでもあらうが、斯やうな場面には色々他の言葉を用ひて、相手を反らせす事を暗示せしめてゐるのである。

ないスピーチをすることが肝臟であらう。隨分、時として、支那の人は臆面もなく無遠慮な事を述べもする。其處はお互に、氣持と常識の相違から來る譯であるが、その言葉使ひ、顏色は常に相手を下へも置かぬ取り持ち方をすべきである。實に至れり盡せりである。つまり相手を褒め、相手を喜ばせ、しかも自己の運命開拓に力める。その間、短氣な氣持を出したり、聊かでも、究局の所迄つきとめるやうな事は避ける。〔顏と顏を見合せても、視線は互に反らせ、双方ふうわりと柔かく、行き違つたやうな身の振り方をする。それならば外交辭令のみで、要領は得させないのかと云ふと、左樣でもない。幾度か行き違つた行方をしてゐるが、併しその間、摑めない譯ではなく、その雰圍氣を暗示させてゐる。笑つて答へず、心おのづから閑なり、と云つた態度である。支那外交のコツはいつも此處にある。支那の人が小鳥や牛馬を馴らせることの上手であるのもこのコツに在る。

〔支那の外交秘訣は、成るべく現在を柔かく丸め、結局の解決は時が自然に之を結ぶと云つた、大陸的の行き方をしてゐるのである。〕やきもきするやうなことが見えては居ても、或は緩に、又急に、しかも面子を重んじ合ひ、新聞の論調を氣にし、そして最後までの努力を惜まない。その力盡きて後に止むるかと見ると、さうでなく窮すれば通ずるの術を常に必ず發見する。而して自己に有利な局面の見出せる迄、我が仕事として之に從ふ。その間過去の優越感を振り廻したり、自己の自給自足の實力あることを見せつけたりなどしない。何處迄も爪を隱し、さうして營々と努める。各人の腹の底には、自分は困らないけれ共、やる丈はやる、いふ丈云ふ、それで手に握るものがあれば、それ丈得が行くのだ、握れなくともともとだ、と云つた氣持がある。〔その轉んでも只では起きない、何のかのと理窟をつけて、有利に開展して行かうとする粘り强さを有する所は、他民族に見られないのである。〕

## 七十六、日支の外交は語學から

支那の外交は、つまる所、國土の廣く、又自力更生の念の固く、獨力獨行の信念の厚いところに强みがある。相手の國を割りになめてかゝり、眼中人なく又國家無き態度を見せ、口吻を洩らす。崑崙の山は巍々として聳え、長江の水は蕩々として流れる。その大陸に國を爲せる人々丈に、外交の事に當つても、動じない。英は過去八十餘年間、長江一帶に、又威海衞に、厦門にと隨所に、數多き租借地又は居留地を占め、幾十億の金を投じ、殷然大英國の勢力を延して來たのであつたが、今やその九分通りは喪失しつゝあるの形勢を見る。一に外交、二に外交、その無限の寶庫と、無限の消費力を持

語學第一と田夫と語る牛車のうへ洋先生話の中心となる

つ支那は、世界外交の檜舞臺として常に耳目を集め、將來、大平洋問題も、これ又、支那そのものが對象となつてゐればこそ八釜しい。今日支那の外交舞臺に著しく問題化されてゐる排日排貨の問題の如きも、半面には支那の商人自身に多大の損失を招き、復舊の事を念じてゐる者も尠くない。或は露支國交の恢復が、意外の方面に思想問題の拭ふべからざる心配を生み出しはしまいか、など唱へてゐる者もある。滿洲獨立承認の問題を中心として、殊に日支外交の舞臺は、空前の大渦巻きを捲き起しつゝある。

支那の青年達は、たとひ片田舍にゐる民衆、田夫達がいくら呑ん氣を極め込んでゐようと、今日中華民國として列國の風下に安閑として坐つて居る氣がしない。民族自決の近代思想から、巧みな外交術により、又實力の向上伸展により、國の地位を高めんとするの自覺心が頓に起り、各都市には青天白日旗の風に飜ると共に、興國の精神が可なり漲つて來た。兎角、その勇み立つた勃興氣分に對して、常にアメリカと日本とが、之に關心を持つ二つの中心國となり、支那の都會地にありても、一は米國留學生の洋行歸りと、日本の留學生歸りとが、夫々特徴のある樽俎折衝ぶりに、又均衡のとれる樣にと飛躍をしてゐる場面も見られる。最近は全支那中學、師範以上中等程度の學校は勿論、各校共、日本語を第一外國語の正課として置き、鋭意この日本語によつて、新進氣鋭の日本人の文化、國家思想を採り入れ樣しとしてゐる氣持が見える。こは宛ら日本の國內でアメリカの問題を氣にし、アメリカに好からぬ感じを持つてゐる者の多い癖に、日本の世相は、建築に、音樂に、娯樂に、服裝に、スポーツにと無茶苦茶にアメリカ式を採り入れて得意がつてゐるのと、似てゐる所がある。日本の出版物、日本の更紗模樣、日本の化粧品、日本の味の素、日本の藥、日本の如意袋、の如きこれ又無雜作に取り入れられてゐる。それ故高處、大處から見れば、ホンの口舌の上で兄弟喧嘩をやり始めてゐる丈のことで、その實、互に日常生活のものなどになると、よく流用し合つてゐると云つた、可愛い間柄のやうに見え、本來東亞の舞臺に於て骨肉の小競り合ひなど取り止めにし、眞の同文同種の團欒氣分、家庭の共同生活といつた本全の處へ、辿りつくべき運命にあるのである。そこがよく讀めなくてはならぬ。

最近支那は都市の小賣商店あたりで見ても少年小僧達に至る迄上海出來の活字本を店頭に披げ、アイウエオ、カキクケコ、ハタ、ハナ、タコ、コマなどと發音緩やかにお稽古をしてゐる所を見るのは

謂はず語らずの內に國民外交の用意がその裏面に出來て行つてゐるやうに見られる。それから又日本の方では中學、商業邊りで支那語の新科目が英語と並び行はれる事になつたのである。これ等は共に兩國のお隣り同志の氣持を近づける目的から見て誠に結構なことである。支那の方では又その日本語の普及はひとり、學校許りでなく、夏期講習に、短期教授に、夜學にと語學の才のある所へ持つて行つて、追手に風の勢でアイウエオが普及しつゝある。しかるに日本の方の內幕は如何かと云ふに、文部省令で之が數年前、公布されたと云ふ丈で、その採用せる所は數校を出でず、支那語の雜誌すらたいして發行もされて居らず、やゝもすれば、支那語を發音する青年、小僧たちは冷笑し去られると云つた、實に冷淡も甚だしい現狀である。英語萬能の日本人心理に、語學の上手でない所へ持つてきて、この仕末であるから、遲々として振はない。日本の青年團、日本の商業徒弟學校、實業講義錄、夜學等に於てその熱を以て現代支那語のハオブハイ（好不好）（お變りないですか）ニンハオア（懸好阿）（御機嫌ですか）の支那氣分たつぷりの話し言葉を教へてゐる所は果して幾つあるだらうか。これ在支三十年、五十年、といふ長く支那にゐる人達で、しかも支那語一つ話さない日本人のゐるに比べて、同じ樣な日本の國民外交上の一大缺點であるやうな氣もする。滿洲方面に行つてゐる日本人で口に生命線を說き、大きな事を吹き續けてゐる手合が、その土地の每日の挨拶一つ話すでなく、又解らず、チンプンカンプンの先生がどれ位ゐるか解らぬ。語學の出來ない事實が優越感を穿き違へて、



唯大きな事をのみ望み見てゐるやうでは、結極片假名、平假名、から叩き上げてゐる根氣のよい隣國の國民達に頭が上らなくなるのではないか。否、根こそぎ經濟戰線を致たされ、眞の融和親交の上に國民外交の實を擧げんとするの決意の足らず、その一大缺陷を此處に暴露しつゝあるのではないか、東亞の將來から見て、特にこは警告を發して置きたい點である。

卑近な例では、我が臺灣島內ですら政府を笠に着、優越感をのみ感じて、四億萬住民の日常の言葉を學ばうとしない。從つて島民、本島人達の云ふ所、話し合つてゐる所は薩張り解らぬ。何を云はれてゐても聾者同然である。本島人の方では熱心に日本語を研究し、よく理解してゐる。それ故、忽ち交涉をするとき、また、問題を起した時などに、日本人は缺陷を暴露する。つまり非常な損をしてゐる譯である。朝鮮にしても、同じである。この缺點はその人の地位が高くなればなる程、言葉の修得を馬鹿にする傾がある。こは非常な誤りであつて濡れ手に粟の蟲のよい態度で以て支那や滿洲を見、その親しく面接する相手方の話す言葉も理解されず、その氣持も汲み取れないと云ふ國民外交振りではそれで事が足りると思はれてゐるのであるか。今後伸び行く我が青年達に猛省一番、根本的にこの態度と謬見を改めて貰ひ度いものだと思ふ次第である。

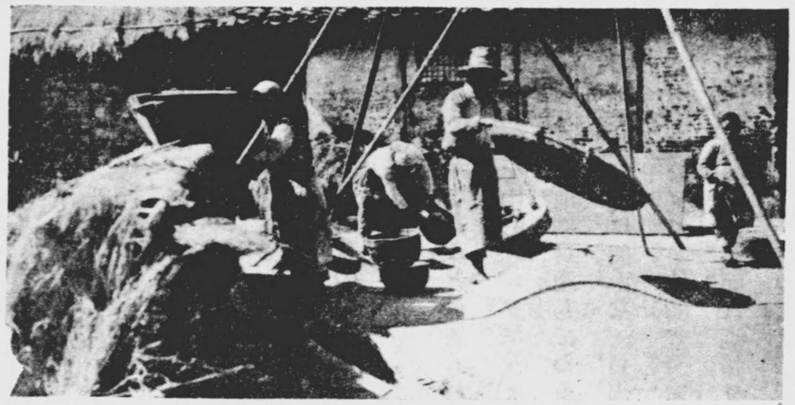
# 十四　結び

## 七十七、日滿支三國住民の天職

もともと支那の民族性には、その一面に自分の御都合次第で無暗矢鱈に權利許りを主張し、是が非でも、旗皷堂々の宣傳戰を張りやかまし〳〵叫びちらかす性癖がある。さうかと思ふと、又その問題次第では殆んど忘れたる如く、又自分に無關係のものである如く、平氣な態度をとることもある。自己の利害に關係のないことであれば、傍にどんな騷ぎがあらうと、全然無關心で居る。路傍に稼ぐ木匠、又瓦匠、水木兩作、（大工で左官を兼ねた商賣）の手合などにしても、その日の日當に優るものを與れる仕事さへあれば、その騷ぎの渦中に飛び込みもするが、行つた處で一文にもならず、おまけに今やつてゐる仕事が損になると云ふ時には、決して手を休めることをしない。その邊は確かによく考へてゐる。出來心から何もかもほつたらかして、彌次馬の上塗りに出掛ける如きことはしない。兎も角、排日問題の如き、その他の時局の騷ぎにしても、一部煽動する者の爲めに大勢が引き摺られ、ブローカー達の食ひ物になつてゐるところがある。眞に日常の生業に從事せる者は、邪魔をされ、强迫され、貼り札が貼られ、品物が持ち出され、掠められ、又路上に燒かれ、主人は人質に取られるといふ騷ぎ、これ程迷惑なことはない。それで皆一日も早くそれらの魔手から逃れ、常態に引き戻されん事を祈つてゐる。排日がそのブローカー達の掲ぐる美名の爲めに、燎原を燒くが如く擴がり、手のつけやうもなくなつて行く。でも心ある者は、行く所まで行けと諦めの氣分で眺めてゐるが、併し一方には、その煽動する仕事を職業化し、官憲、當路者もそれに順應してゐなければ民心から離れ、惡くすると、政權を失ふ心配すらあると見てゐる。蔣介石の如きも、よくその邊の眞相を看破し、自ら我を知る心事はよく察せられてゐる。唯、時勢の赴く所、暗雲の霽れるときを待つて、大勢順應、對內策を善導しつつ、善隣の將來を考へてゐるものだと察せられる。

日本側にしたところで東亞の平和親善の大眼目に向つて、思ひを致してゐない者は、一人もない。又法律を超越し、理窟を離れて、大局に善處するの襟度を示し度いと思はない者はあるま





日支滿を超越したる人壽年豐の吉慶氣分

い。ただ年來の問題、懸案の、あまりに澤山停滯してゐるのをこの機會にすべて十把一からげに薩張りと解決し、再びこた〳〵を繰り返させ度くない氣持から、かうして念には念を入れ、その局に當つて善隣氣分の範圍内でやつてゐるものである。其處は双方で察し合はなければならぬ。單なる理窟の上とか、法律のみを盾に爭つたり、又以夷制夷する慣用手段のみの方法でやり合ふなどは本當の善隣の道を見出す所以ではないのである」。

支那一流の善隣方法としては、時にその面子を立て〳〵貰ふと云ふ、たつた此一事の條件の滿足が得られる場合には、幾百の懸案を瓢々乎として片付けることもある。その他愛もなくひよつくり只で寶物を贈物にして呉れるやうなこともある。今日、東亞の親善關係は、極めて重大時期に瀕し、その身の振り方は微妙なることを要し、その戲談一つにも深い意味が含まれてゐると云つた風に取られてゐる。「滿洲問題を中心に、日滿支、の三つ巴は、こゝに日本のこれを生命線と摑んでゐる丈に、甚だ期畫的な重大な時期に到達してゐる。併しこれも時が來ると、いつしか雨降つて地固まるで、三人兄弟のお揃ひで談笑裏に朗かな、目出度い局面を演出するの曙光を見出さなくては嘘である。又必ず其處へ行くべく、お互は奉仕的の努力と風懷を有しなくてはならぬのである。又其處には勢、日滿支三國相互の經濟的發展が裏面に期待せられなければならぬ。云ふ迄もなく本來滿洲國は支那と同文、同族である事に於て、又その言葉の上から云つても、日常、家庭生活の上、世相の上、民情風俗の上、一



として日本以上に密接な形を共有してゐないものはない」。兄は南京に、弟は奉天に、父は北平に、子は新京に、と云つた國境を超越した肉身關係のゐるものも尠くない。現に滿洲の某々大官で蘇州出のものもあれば、我が臺灣新竹出の總長の君もある。關鍔のごとき、又、謝介石のごときは、よく人の知る所である。つまり、その出來る限り、東亞の天地に、その東北といはず、何處と云はず、東亞五億の住民の爲めに、滿洲であれ、南洋であれ、四川であれ、夫々お互の幸福な民族進展に資する樂土を漸次作つて行くことは、やがて東亞の吾々の盡すべき天職であり、義務であり、又一肌脫ぐべき一大使命でもあると考へる。既に南洋の天地は、事實上、華僑五百萬の樂土となり終つてゐる。今東北方面を中心に渦巻く聯盟の問題も、實は日支善隣の氣分と、その將來に對する東亞諸民族の融和善隣の氣分とを結束の如何によりて、譯なく片がつく。何も日本人自らに之を私する野心を有する譯でもなければ、支那自體が之を出し惜しみしてゐる理由もない。南洋に行つて成功せると同じく、その輝かしい民族進展は日ならずして、又、東北八千方里の樂土の上に實現せられ、その交通に、兵備に、支那の本土内以上、秩序の維持、文化生活の向上のこゝに期せらるゝに於ては、誰れがどう見ても、芳ばしくないことがあらう。現に南京から、又北支那から、その國内の兵亂を避け、家財を取り纏め、入滿して來る者の續々ある一事を以てしても、その間の消息は解る。故張作林の遺骸がこの安心の出來る奉天城内の舊邸、禮堂に安置せられ、名流紳士の、その英靈を慰め、香華を手向けてゐるもののあるのも、

# 支那讀本

終

或る意味に於て、亡き人を地下に瞑せしむる最上の方法だと見ても差支ないのである。張學良御曹子始め、民國朝野の心ある人々は、自分と感を同じくするものありや否や、敢てこの言葉を以て本書の結びとなし、日支善隣の將來につき固き三國共同の歩調を共にするの實を擧げんことを念願して止まざるものである。



## 附記

尙本書に述べたいことは滾々として盡きないのであるが、何分頁數に限りがあるので、主としてここには基礎的な資料のみを取扱ふことにした。あの間々のひろく、且つ奥行の深い支那をその事情、民情、文化の各般に亙り、本書で一々充分に紹介することはむづかしい。しかしそれら細部に亙つたことや又特殊の方面の事に就いては、これ迄隨時隨處に公にしておいた著作も少なくないのであるから、特志の學徒又は趣味の友は、なるべくその方の拙著に就いて本書の盡さない個處を補足せられたい。

たゞ自分は世間一般の著述に窺はるゝやうな型に囚はれた前提、本論、結論の三段にわざわざ組み立て、その間に技工的な手間をかくる如き事は好かぬ。否、そは自分の性にも合はぬところである。既に天命を知るの齡に達したが、過去の著述は大小約五十種、何れも皆之を前置きと見てもよい。又全部を結論と見てもよい。又總べてが材料を檢討した本論であると見られても構はぬ。そこいらはどうだつてよい。見る人の自由に任せる。最近は北の方、吉林、新京に遊び、又日ならずして南、長江、江南地方に游歷に出かけるところである。江山待つあるが如く、江蘇太湖、洞庭の東山、西山から常熟王石谷先生の故宅、興福寺の禪僧、閘北廢墟の跡、すべてこれ皆我が懷かしの天地であるのだ。時

局を超越して中國の天地は自分には朗らかなゑみを呈してくれてゐる氣持もする。隨つて成るの拙書は、何れも自分を通して映ずる中國の赤裸々な姿であると見てほしい。特に取つておきの本でもあるまいが、本書に參考となる拙著の主なるものを左に列擧しておく。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 翰墨行脚 | 東京春陽堂 | 三、五〇 |
| 2 | 支那遊記 | 同 | 三、五〇 |
| 3 | 支那及滿洲旅行案内 | 同 | 四、五〇 |
| 4 | 支那文化の研究 | 富山房 | 五、五〇 |
| 5 | 支那趣味の話 | 同 | 三、〇〇 |
| 6 | 面白い支那風俗 | 大阪屋號 | 二、〇〇 |
| 7 | 支那風俗の話 | 同 | 二、八〇 |
| 8 | 支那文化の解剖 | 同 | 三、五〇 |
| 9 | お隣の支那 | 同 | 一、八〇 |
| 10 | 長城の彼方（絶版） | 同 | 、八〇 |
| 11 | 支那料理の前に（絶版） | 同 | 一、八〇 |
| 12 | 支那民情を語る | 雄山閣 | 四、五〇 |
| 13 | 支那の社會相（絶版） | 同 | 五、五〇 |
| 14 | 支那風景と庭園 | 同 | 二、〇〇 |
| 15 | 文字の史的研究 | 同 | 二、〇〇 |



| | | | |
|---|---|---|---|
| 16 | 硯及筆墨紙研究 | 同 | 二、〇〇 |
| 17 | 硯の栞 | 白水社 | 一、〇〇 |
| 18 | 支那旅行通 | 四六書院 | 、七〇 |
| 19 | 支那料理通 | 同 | 、七〇 |
| 20 | 支那勞農階級の生活 | 三省堂 | 、二五 |
| 21 | 支那今日の社會と文化 | 文明協會 | 一、〇〇 |
| 22 | 翰墨談（絶版） | 富士書房 | 四、〇〇 |
| 23 | 支那長生祕術（絶版） | 同 | 三、五〇 |
| 24 | 中華民國地圖 | 神谷書店 | 一、〇〇 |
| 25 | 支那の山水（刊行中） | 嵩山房 | — |
| 26 | 哲人支那 | 千倉書房 | 一、五〇 |
| 27 | 支那の民情 | 同 | 、三〇 |
| 28 | 支那行脚記（絶版） | 萬里閣 | 二、三〇 |
| 29 | 支那風俗趣味（絶版） | 同 | 二、〇〇 |
| 30 | 支那社會民情（絶版） | 同 | 二、〇〇 |
| 31 | 阿片室（絶版） | 同 | 二、五〇 |
| 32 | 青龍刀（絶版） | 同 | 二、三〇 |
| 33 | 眠れる獅子（絶版） | 同 | 二、三〇 |
| 34 | 日本より支那へ | 北隆館 | 、五〇 |
| 35 | 支那の田舍めぐり | 同 | 、五〇 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 36 | 歡樂の支那 | 、五〇 | 北隆館 |
| 37 | 不老長生 | 、五〇 | 同 |
| 38 | 長久の支那 | 、五〇 | 同 |
| 39 | 老朋友 | 、五〇 | 同 |
| 40 | 文字の研究（絶版） | 四、五〇 | 成美堂 |
| 41 | 文字の沿革（建築篇） | 二、〇〇 | 同 |
| 42 | 文字の起源（絶版） | 、三〇 | 通俗大學會 |
| 43 | 文字の沿革 | 四、〇〇 | 巖翠堂 |
| 44 | 支那國民性 | 一、〇〇 | 同 |
| 45 | 教壇上の漢字（絶版） | 一、二〇 | 學海指針社 |
| 46 | 文字の教へ方 | 一、五〇 | 二松堂 |
| 47 | 文字の活用 | 、八〇 | 六合館 |
| 48 | 漢字音の系統 | 一、二〇 | 同 |
| 49 | 明治の漢字（絶版） | 一、五〇 | 寶文館 |
| 50 | 言語學（上下） | 一、一〇 | 博文館 |
| 51 | 現代支那語學（絶版） | 、四五 | 同 |
| 52 | 線音双引漢和大辭典 | 二、七〇 | 東雲堂 |
| 53 | 標準字典 | 二、二〇 | 中文館 |




昭和八年三月十日印刷
昭和八年三月廿日發行

支那讀本
定價壹圓貳拾錢

著作者　後藤朝太郎
發行者　東京市京橋區銀座西二ノ一　立命館出版部　竹上孝太郎
印刷者　東京市京橋區京橋二ノ十三　佐々木恒太郎

東亞印刷株式會社印刷
小暮製本所製本

發行所　東京市京橋區銀座西二ノ一
京都市寺町廣小路
立命館出版部
電話京橋五六〇六番
振替東京七五三六二番

後藤朝太郎著

## 支那讀本

日支兩國はいつまでも互ひにいがみ合つてゐる場合ではない。將來はお互ひに東洋の天地で東亞の平和を確立して行かなくてはならぬ兄弟なのである。著者は此の見地から渡支五十回に亙る體驗からして政客、軍人、詩人、農工商、僧侶、船頭、苦力等各階級に面接し又それ〴〵の社會に漂ふ空氣を掴み來つて之を日本人に呑み込み易く敍述したものである。挿圖百個、頁數三百、社會の要求を滿す近來の好著である。速に一讀以つて東洋の盟主としての日本國民の發展を期す。

價　壹圓貳拾錢
送　拾錢

佐久間貞次郎著

## 支那風俗春秋

本書に載說するところ、支那の政治、宗教、文學、歷史、人物、風俗、人情乃至名勝、舊蹟、山川、草木、禽獸、花卉等々に亙りて、縱橫に考證し、批判し、解說し、論斷して而も其筆致は流麗典雅を極め、其觀察は犀利雋鋭にして、更に錦上の花である琳琅滿目の寫眞數十葉と共に微に入り細を穿ち讀者をして殆んど卷を掩ふ遑なからしむ。

價　貳圓八拾錢
送　拾四錢

山縣初男
竹内克己
共譯

支那小說

## 不老不死仙遊記

前後二篇

永年秘本とされて來た本書が現代語に譯されてモダン・デカメロン、現代の「神曲」として初めて白日下に現はれた。朗らかな諷刺・洗練された空想、愛慾のアヴアンツウル・白熱の呪魔戰、現代讀物の要求するあらゆる要素を備へた小說である。「仙遊記」は道教小說として有名である。主人公の冷干氷といふ道士と共に不邪といふ白猿が縱橫に活躍する。英雄豪傑が出、青年才子が現はれるかと思へば、美女が悲戀に泣き、佳人が閨怨を囁く。妖狐や怪龍が跋扈して魔力を逞うすれば、天地の諸神仙が現はれて道術を振舞ふ。エロありグロあり、ナンセンスあり、紐解けば頁の盡きるを知らず。

價各壹圓五拾錢
送各　拾錢

640
13